

見晴台遺跡発掘調査報告書

(第49・50・51次)



2021

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は、名古屋市南区見晴町所在の見晴台遺跡第49次・50次・51次発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、名古屋市教育委員会の生涯学習事業の一環として、公募による市民参加を得て名古屋市見晴台考古資料館が実施した。
- 3 各発掘調査の期間、面積、参加者数、担当者は、下記のとおりである。

第49次調査

調査期間	平成21年（2009）7月6日（月）～9月30日（水）
市民参加期間	平成21年（2009）7月15日（水）～8月16日（日）
調査対象面積	A区 140㎡ B区 50㎡（B区は桜田貝塚・貝塚町遺跡）
参加者数	190人（うち中学生49人 高校生以上141人）
延べ参加者数	455人
調査担当者	市澤泰峰・伊藤厚史・野澤則幸・村木 誠
市民見学会	平成21年（2009）8月9日（日）
報告会	平成21年（2009）10月4日（日）

第50次調査

調査期間	平成22年（2010）7月5日（月）～9月3日（金）
市民参加期間	平成22年（2010）7月14日（水）～8月15日（日）
調査対象面積	A区 160㎡
参加者数	196人（うち中学生52人 高校生24人 大学生15人 一般105人）
延べ参加者数	504人
調査担当者	市澤泰峰・伊藤厚史・服部哲也・瀬戸 茂
市民見学会	平成22年（2010）8月8日（日）
報告会	平成22年（2010）10月3日（日）

第51次調査

調査期間	平成23年（2011）7月4日（月）～9月10日（水）
市民参加期間	平成23年（2011）7月13日（水）～8月14日（日）
調査対象面積	A区 160㎡ B区30.5㎡（調査時、A区は北区、B区は南区と呼称）
参加者数	185人（うち中学生52人 高校生20人 大学生7人 一般133人）
延べ参加者数	482人
調査担当者	市澤泰峰・瀬戸 茂・酒井将史・水野裕之
市民見学会	平成23年（2011）8月7日（日）
報告会	平成23年（2011）10月2日（日）

- 4 平成20年（2008）に実施した試掘調査の成果の一部（電波標定機設置施設跡）も報告する。電波標定機に関連して、工藤洋三氏、佐藤則之氏より貴重な写真提供を受けました。記して謝意を表します。
- 5 出土遺物の水洗、実測等整理作業は、発掘調査参加者、「みはらしの日」の市民参加者により実施したほか、令和2年度に文化財保護室（遺物の再整理は小浦美生、米倉由佳、凶面の清書は小川敦子）が実施した。出土遺物は名古屋市見晴台考古資料館で保管している。
- 6 本書の執筆は、伊藤厚史（第1～4章、第6章）三谷智広（パレオ・ラボ）（第5章）による。編集は伊藤による。

■目次

例言	i
目次・図目次	ii
表目次・写真図版目次	iii
第1章 遺跡の環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	3
3 明治17年の千竈村（前浜村）・笠寺村地籍図	5
第2章 第49次発掘調査	
1 調査の目的	10
2 調査の経過	10
3 土層の説明	15
4 遺構と遺物	18
第3章 第50次発掘調査	
1 調査の目的	27

2 調査の経過	27
3 遺構と遺物	29
第4章 第51次発掘調査	
1 調査の目的	37
2 調査の経過	37
3 遺構と遺物	39
第5章 自然科学分析	
1 見晴台遺跡出土の動物遺体	57
第6章 総括	
1 調査の目標に対する成果と課題	63
2 高射砲陣地に関する知見	64
写真図版	89
報告書抄録	123
奥付	124

■図目次

第1図 見晴台遺跡の位置	1
第2図 調査区の位置	2
第3図 周辺の遺跡	4
第4図 地籍図と現代の地図を重ねた図の範囲	5
第5図 地籍図と現代の地図を重ねた図（1）見晴町周辺	6
第6図 地籍図と現代の地図を重ねた図（2）東海道・笠覆寺周辺	7
第7図 地籍図と現代の地図を重ねた図（3）東海道・曾池周辺	8
第8図 地籍図と現代の地図を重ねた図（4）鳥栖一丁目周辺	9
第9図 第49～51次調査区位置図	12
第10図 第49～51次調査区位置図（A区）	12
第11図 第49次遺構全体図（A区）	13
第12図 第49次遺構全体図（B区）	14
第13図 第49次土層図（A区 東壁（SD08））	15
第14図 第49次土層図（A区 北端）	16
第15図 第49次土層図（B区 東壁）	17
第16図 第49次エレベーション図（A区 SD02）	19
第17図 第49次土層図（A区 SD01）	19
第18図 第49次土層図（B区 SD01）	21
第19図 階段（第49次B区）	22
第20図 遺物図（1）	25
第21図 遺物図（2）	26
第22図 調査風景	27
第23図 市民見学会	28
第24図 作業後のミーティング	28

第25図 第50次遺構全体図（A区）	30
第26図 第50次土層図（A区 拡張区 東壁）	31
第27図 第50次遺構平面図（竈）	32
第28図 竈	32
第29図 遺物図（3）	35
第30図 遺物図（4）	36
第31図 市民見学会	38
第32図 作業後のミーティング	38
第33図 第51次遺構全体図（A区）	40
第34図 第51次土層図（A区 北半西壁・SD02北トレンチ）	41
第35図 第51次土層図（A区 南半南壁）	42
第36図 第51次土層図（A区 SD101・SD102）	43
第37図 第51次遺構平面図（A区 SD02貝層周辺・SD02西トレンチ土器出土状況）	44
第38図 第51次土層図（A区 SD02西トレンチ東壁）	45
第39図 第51次土層図（A区 SD08中央ベルト西壁・東壁）	46
第40図 第51次土層図（A区 SD08西トレンチ東壁）	47
第41図 第51次土層図（A区 SD08東トレンチ東壁）	48
第42図 第51次遺構全体図（B区）	50
第43図 第51次土層図（B1区 北壁・西壁・南壁・東壁）	51
第44図 第51次土層図（B2区 南壁・北壁）	52
第45図 遺物図（5）	54
第46図 遺物図（6）	55
第47図 遺物図（7）	56
第48図 見晴台遺跡出土の動物遺体	61

第49図	第49・50・51次調査平面図（A区 各次調査区の関係）……………	62
第50図	空中写真（米軍撮影）……………	65
第51図	管内神社 基壇・階段 第3師団司令部……………	65
第52図	管内神社 基壇上面 第3師団司令部……………	65
第53図	絵葉書 管内神社 忠魂神社 野砲兵第3聯隊……………	65
第54図	管内神社 彌建神社 烏居 歩兵第18聯隊……………	65
第55図	電波標定機受信所（試掘調査）……………	68
第56図	電波標定機受信所（西から）……………	69
第57図	電波標定機受信所（北から）……………	69
第58図	電波標定機受信所（東南から）……………	70
第59図	電波標定機受信所 出入口（西から）……………	70
第60図	電波標定機受信所 出入口（東から）……………	70

第61図	電波標定機受信所 小孔（西から）……………	70
第62図	電波標定機受信所 内部 通信室（東から）……………	70
第63図	電波標定機受信所 内部 受信室（西から）……………	70
第64図	電波標定機受信所 内部 受信室（西から）……………	70
第65図	電波標定機受信所 方形槽（東から）……………	70
第66図	タチ3号送信機（米国立公文書館）1945年10月8日撮影……………	71
第67図	タチ3号受信機（米国立公文書館）1945年10月8日撮影……………	71
第68図	タチ3号送信機 地下部分（米国立公文書館）1945年10月30日撮影……………	72
第69図	宅地造成で現れたタチ3号送信機の遺構 2013年7月18日撮影……………	72

■表目次

表1	遺跡名……………	4
表2	貝殻の大きさ（SD02）……………	47
表3	見晴台遺跡出土の動物一覧……………	59
表4	見晴台遺跡出土の貝類……………	60

表5	見晴台遺跡出土の魚類・爬虫類・哺乳類……………	60
表6	遺構一覧……………	75
表7	遺物観察表……………	77

■写真図版目次

写真図版1	第49次調査 A区調査風景……………	89
1	調査前	
2	調査風景 SD08	
3	調査風景 SD01	
4	調査風景	
5	調査風景	
6	調査風景 SD06	
写真図版2	第49次調査 A区南半部の調査……………	90
1	遺物出土状況 SD08（北から）	
2	遺構掘削状況 調査区南東部（北から）	
3	遺構掘削状況 調査区南西部（西から）	
4	遺構掘削状況 調査区全景（南から）	
5	遺構掘削状況 調査区南東端（南から）	
写真図版3	第49次調査 A区北半部の調査……………	91
1	SD01（南西から）	
2	SD01（北から）	
3	SD01土層断面	
4	SD01・調査区北壁土層（南から）	
5	SD01・攪乱（西から）	
写真図版4	第49次調査 A区近代の遺構と遺物……………	92
1	SD06（東から）	
2	SD06（東から）	
3	SD06（西から）	

4	工事立会で出土した電線	
写真図版5	第49次調査 B区調査風景……………	93
1	調査前（北から）	
2	調査風景（西南から）	
3	遺構検出状況 SD02付近（南東から）	
4	調査風景	
5	調査風景 SD01（北から）	
6	調査終了状況（南西から）	
写真図版6	第49次調査 B区弥生時代の遺構と遺物……………	94
1	石斧出土状況	
2	土器出土状況	
3	SD01土層断面 アゼ1南面	
4	SD01土層断面 アゼ3北面	
5	遺構掘削状況 SD01・SK01（北から）	
6	遺構掘削状況 SK01（北から）	
写真図版7	第49次調査 B区近代……………	95
1	調査風景 階段	
2	調査風景 階段	
3	階段全景（南から）	
4	階段下部	
5	調査区全景（南から）	
6	階段全景（北から）	

写真図版8 第50次調査 調査風景……………96	3 市民見学会 (51B区)
1 調査風景 竈 (南東から)	4 調査風景 (A区)
2 調査風景	5 調査風景 (A区)
3 調査風景 (北東から)	写真図版15 第51次調査 A区……………103
4 調査風景 (北西から)	1 SD08・SK102・SK103 (西から)
5 調査風景	2 SK102・SK103完掘 (西から)
6 ミーティング	3 P202検出
7 調査風景	4 P201完掘
写真図版9 第50次調査 全景……………97	5 SD02 西トレンチ土層断面 (西から)
1 掘削終了状況 調査区全景	写真図版16 第51次調査 A区環濠……………104
2 掘削終了状況 SD08	1 土器出土状況 (SD02)
3 掘削終了状況 SD02	2 土器出土状況 (SD02)
写真図版10 第50次調査……………98	3 土器出土状況 (SD02 西壁付近)
1 SD101 (西から)	4 土器出土状況 (SD02 西トレンチ)
2 SD101 (北から)	5 土器出土状況 (SD02 北トレンチ)
3 SD102 (西から)	写真図版17 第51次調査 A区環濠……………105
4 SD101 (南から)	1 清掃中 (北西から)
5 玉石敷き・SD06 (西北から)	2 SD08 東トレンチ (南東から)
6 SD08 中央付近 (東から)	3 SD08 東トレンチ土層断面 (南西から)
7 SD02 土器出土状況	4 SD08 中央ベルト西面 (南西から)
8 SD02 土器出土状況 (南から)	5 SD02 北トレンチ土層断面 (北から)
写真図版11 第50次調査 環濠……………99	写真図版18 第51次調査 A区・B区……………106
1 SD08 東半部 (西から)	1 SD02 掘削終了 (北西から)
2 SD08 東半部 (北西から)	2 SD02 調査区西壁 (北東から)
3 SD08 中央部 (西から)	3 SD01 検出状況 (51B1区) (南から)
4 SD08 全景 (西から)	4 ミーティング (51B1区)
5 SD08 全景 (東南から)	写真図版19 第51次調査 B区……………107
6 SD02 全景 (東から)	1 SD02 (51B2区)
7 SD02 全景 (西から)	2 SD01 土器出土状況・北壁土層断面 (51B2区)
8 SD02 全景 (西から)	3 土器出土状況 (51B2区)
写真図版12 第50次調査 近代の遺構……………100	4 掘削終了状況 (51B2区)
1 竈検出状況 (東から)	5 SD01 土層断面図 (北から) (51B1区)
2 竈土層断面 (西から)	6 SD01 土層断面図 (南から) (51B1区)
3 竈全景 (東から)	写真図版20 第51次調査 B区全景……………108
4 竈土層断面 (西から)	1 調査区全景 (南から)
5 SD06 (電纜出土状況) (東から)	2 調査区全景 (東から)
6 SD06土層断面 (西から)	写真図版21 遺物 第49次調査 A区……………109
写真図版13 第50次調査 戦後期の遺構……………101	1 弥生土器 壺 (SD02)
1 玉石敷き (東から)	2 弥生土器 ミニチュア土器 (SD02)
2 玉石敷き (西から)	3 弥生土器 壺 (SD02)
3 玉石敷き (西から)	4 弥生土器 甕 (SD02)
4 甕埋設坑 (北から)	5 弥生土器 台付甕 (SD02)
5 甕埋設坑 (南から)	6 弥生土器 高坏 (SD02)
6 玉石敷き (東から)	7 弥生土器 高坏 (SD02)
写真図版14 第51次調査 調査風景……………102	8 弥生土器 台付甕 (SD02)
1 調査風景 (A区)	9 弥生土器 高坏 (SD02)
2 ミーティング (A区)	

写真図版22 遺物 第49次調査 A区……………110

- 1 弥生土器 壺 (SD02)
- 2 弥生土器 壺 (SD08)
- 3 弥生土器 壺 (SD08)
- 4 弥生土器 台付甕 (SD08)
- 5 弥生土器 ミニチュア土器 (SD08)
- 6 弥生土器 蓋 (SD08)
- 7 弥生土器 ミニチュア土器 (SD01)
- 8 中世陶器・陶磁器 (SD01)
- 9 弥生土器 壺 (SD08)

写真図版23 遺物 第49次調査 A区……………111

- 1 陶器 皿 (SX01)
- 2 弥生土器 甕 (SK08)
- 3 弥生土器 台付鉢 (SD05)
- 4 弥生土器 台付甕 (包含層)
- 5 弥生土器 高坏 (検出)
- 6 弥生土器 高坏 (攪乱)
- 7 弥生土器 壺・甕 (茶褐色土)
- 8 鉄器 火打金 (SX01)
- 9 弥生土器 壺・高坏 (表土)
- 10 石器 火打石 (北端)
- 11 円盤状土製品 (北端)
- 12 磁器 皿・坏・碗 (表土・北半検出)

写真図版24 遺物 第49次調査 B区……………112

- 1 弥生土器 壺 (SK01)
- 2 弥生土器 壺 (SD01)
- 3 弥生土器 壺 (攪乱)
- 4 弥生土器 高坏 (SD01)
- 5 弥生土器 高坏 (SD01)
- 6 弥生土器 高坏 (SD01)
- 7 弥生土器 高坏 (SD01)
- 8 石器 磨石 (SD01)
- 9 石器 石斧 (SD01)

写真図版25 遺物 第49次調査 B区……………113

- 1 弥生土器 壺 (SK01)
- 2 弥生土器 甕 (SK01)
- 3 弥生土器 鉢 (SK01)
- 4 弥生土器 台付甕 (SK01)
- 5 弥生土器 高坏 (SK01)
- 6 弥生土器 高坏 (SK01)
- 7 弥生土器 高坏 (SK01)
- 8 玩具 (表土)
- 9 土製品 貝形 (攪乱)

写真図版26 遺物 第50次調査……………114

- 1 弥生土器 壺 (SD02)
- 2 弥生土器 壺 (SD02)
- 3 弥生土器 壺 (SD02)

- 4 弥生土器 壺 (SD02)
- 5 弥生土器 壺 (SD02)
- 6 弥生土器 高坏 (SD02)
- 7 弥生土器 高坏 (SD02)
- 8 弥生土器 高坏 (SD02)
- 9 弥生土器 高坏 (SD02)
- 10 弥生土器 高坏 (SD02)
- 11 弥生土器 高坏 (SD02)

写真図版27 遺物 第50次調査……………115

- 1 弥生土器 台付甕 (SD02)
- 2 弥生土器 台付甕 (SD02)
- 3 弥生土器 壺・甕 (SD02)
- 4 弥生土器 壺 (SD08)
- 5 弥生土器 壺 (SD08)
- 6 弥生土器 高坏・鉢 (SD08)
- 7 弥生土器 台付甕 (SD08)
- 8 弥生土器 高坏 (SD08)
- 9 弥生土器 蓋 (SD08)
- 10 紡錘車 (SD08)
- 11 土製品 (SD08)
- 12 土製品 (SD08)

写真図版28 遺物 第50次調査……………116

- 1 弥生土器 台付甕 (SD08)
- 2 弥生土器 台付甕 (SD08)
- 3 弥生土器 甕 (SD06)
- 4 弥生土器 壺 (北端)
- 5 中世陶器 甕・山茶碗 (SD01)
- 6 磁器 蓋 (P110)
- 7 磁器 碗 (P111)
- 8 歯ブラシ (P111)
- 9 電纜 (SD06)

写真図版29 遺物 第51次調査 A区……………117

- 1 弥生土器 壺 (SD02)
- 2 弥生土器 壺 (SD02)
- 3 弥生土器 壺 (SD02)
- 4 弥生土器 壺 (SD02)
- 5 弥生土器 壺 (SD02)
- 6 弥生土器 壺 (SD02)

写真図版30 遺物 第51次調査 A区……………118

- 1 弥生土器 壺 (SD02)
- 2 弥生土器 壺 (SD02)
- 3 弥生土器 壺 (SD02)
- 4 弥生土器 壺 (SD02)
- 5 弥生土器 壺 (SD02)
- 6 弥生土器 壺 (SD02)
- 7 弥生土器 壺 (SD02)
- 8 弥生土器 壺 (SD02)

写真図版31 遺物 第51次調査 A区……………119

- 1 弥生土器 甕 (SD02)
- 2 弥生土器 台付甕 (SD02)
- 3 弥生土器 台付甕 (SD02)
- 4 弥生土器 台付甕 (SD02)
- 5 弥生土器 高坏 (SD02)
- 6 弥生土器 高坏 (SD02)
- 7 弥生土器 高坏 (SD02)
- 8 弥生土器 高坏 (SD02)
- 9 弥生土器 高坏 (SD02)

写真図版32 遺物 第51次調査 A区・B区……………120

- 1 弥生土器 蓋 (SD02)
- 2 弥生土器 蓋 (SD02)
- 3 弥生土器 蓋 (SD02)
- 4 弥生土器 壺 (SD01・SD02)
- 5 貝刃 (排土 SD02)
- 6 石器 磨石 (SD02)
- 7 石器 磨石 (B区 SD01)
- 8 石器 磨石 (SD08)
- 9 青銅製品 (SD02)
- 10 石器 火打石 (南西隅)

写真図版33 遺物 第51次調査 A区・B区……………121

- 1 弥生土器 壺 (SD08)
- 2 弥生土器 台付甕 (SD08)
- 3 弥生土器 高坏 (SD08)
- 4 弥生土器 高坏 (SD08)
- 5 弥生土器 台付鉢 (SD08)
- 6 弥生土器 ミニチュア土器 (B1区 SD01)
- 7 弥生土器 甕 (B1区 SD01)
- 8 弥生土器 高坏 (B1区 SD01)
- 9 弥生土器 壺 (B2区 SD01)
- 10 耐火煉瓦 (A区 竈付近)

写真図版34 遺物 第51次調査 A区・参考資料 三王
山遺跡……………122

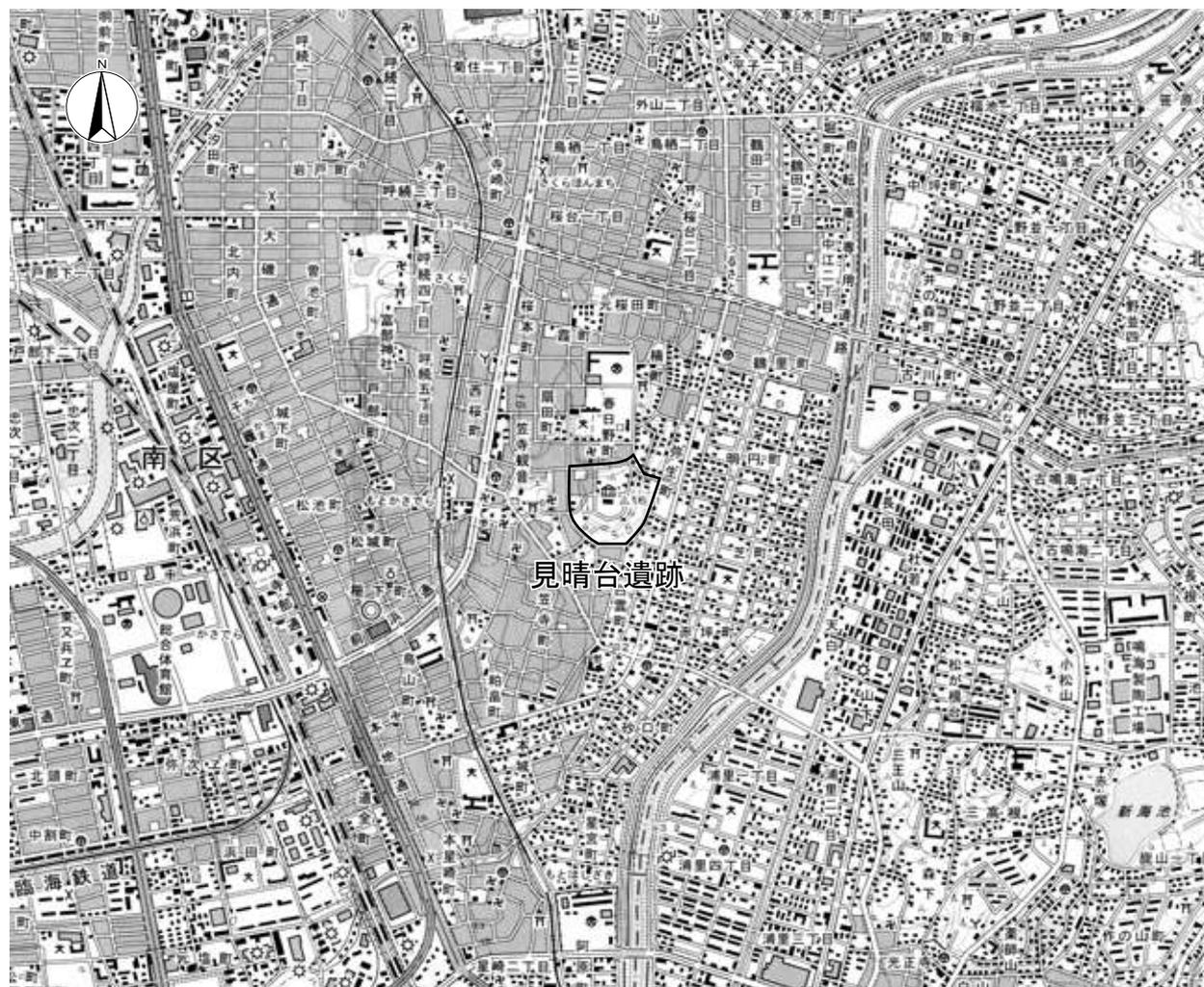
- 1-1 舟形土製品 (SD02)
- 1-2 舟形土製品 (SD02)
- 1-3 舟形土製品 (SD02)
- 2-1 舟形土製品 (SD02)
- 2-2 舟形土製品 (SD02)
- 2-3 舟形土製品 (SD02)
- 3-1 舟形土製品 (三王山遺跡)
- 3-2 舟形土製品 (三王山遺跡)
- 3-3 舟形土製品 (三王山遺跡)

第1章 遺跡の環境

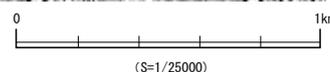
1 遺跡の立地

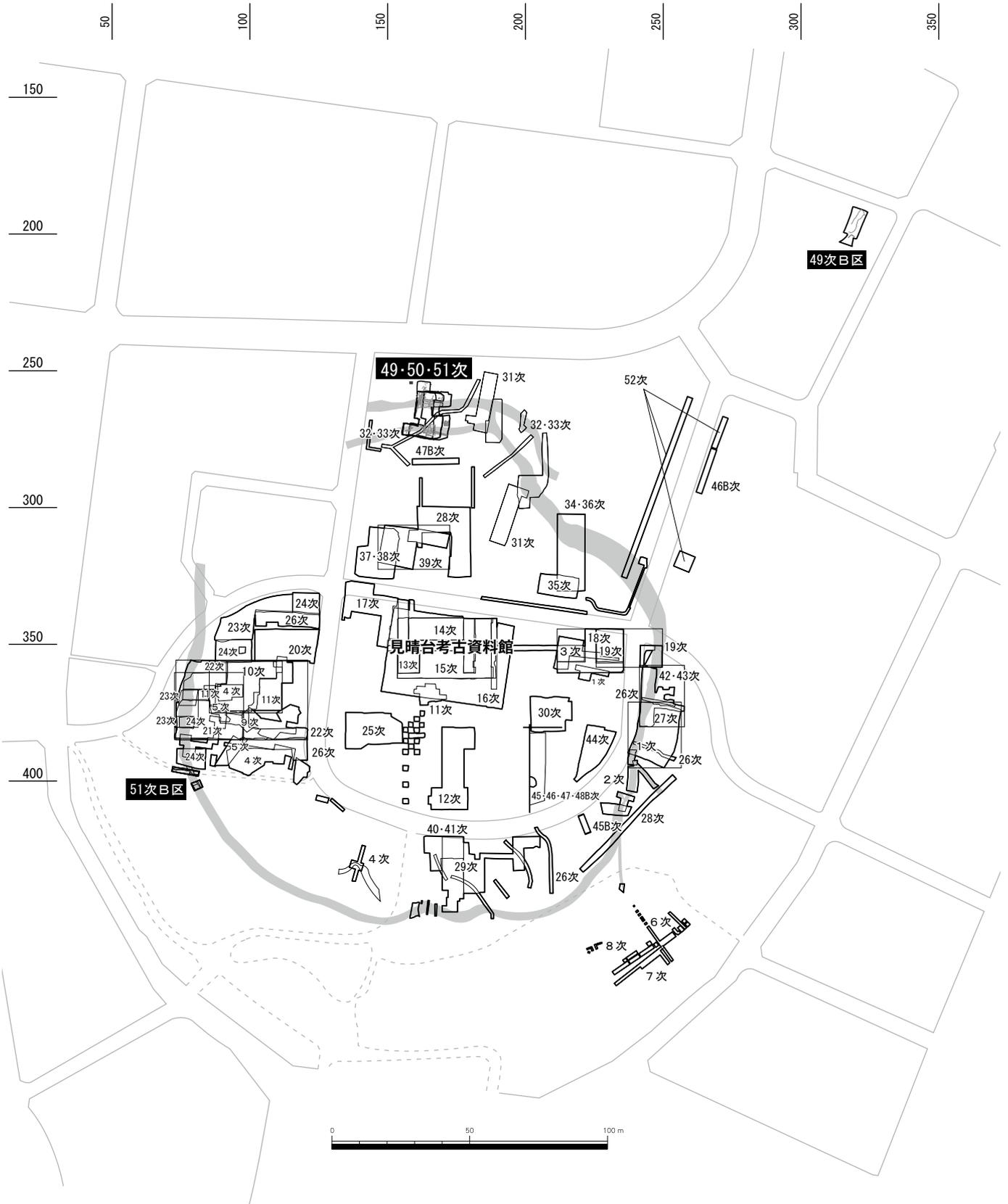
見晴台遺跡は、名古屋市東南部に位置し、東部丘陵地帯の西に接している熱田台地上に立地している。熱田台地は、更新世後期（およそ15万年から6万年前）に堆積されたとされる、熱田層と呼ばれる中段丘である。熱田台地は、旧精進川や山崎川等の開析浸食作用により分かれ、大曽根低地の東側を御器所台地、旧精進川以東を瑞穂台地、山崎川南側を笠寺台地と呼ぶ場合がある。見晴台遺跡は、笠寺台地の東縁に立地し、標高約15m、旧水田面との比高差約12mである。遺跡から東方に天白川をはさんで鳴海丘陵を眺望することができる。発掘調査が開始された昭和30年代から40年代は、まだ台地下の天白川流域には水田が広がり、近世以来の景観を見ることができた。

見晴台遺跡のある見晴町は、昭和3年（1928）12月15日に設置された町名である。耕地整理事業が実施され、眺めがよいことから名付けられた。近世には桜村と呼ばれた地域で、集落は塩付街道沿いに本郷があり、南に分野、東に迎ひ山、六本松、大地欠と4つの小集落があった。桜村は、明治11年（1878）12月28日に山崎村、新屋敷村、戸部村と合併して愛知郡千竈村になり、明治22年（1889）10月1日に千竈村と豊田村が合併して愛知郡呼続村大字千竈となった。明治30年（1897）7月12日に呼続町、大正10年（1921）8月22日南区呼続町となった。



第1図 見晴台遺跡の位置





第2図 調査区の位置

2 歴史的環境

旧石器時代～縄文時代草創期

見晴台遺跡では、角錐状石器が1点出土している。この石器は、およそ25,000年前に噴出堆積した始良丹沢火山灰層の上位から、ナイフ形石器と共伴して出土する。本来は西日本で使用された石器のようで、国府型ナイフ形石器とともに東方へ伝播したと考えられている。市内では熱田区玉ノ井遺跡、瑞穂区大曲輪遺跡で出土している。

縄文時代

見晴台遺跡では、台地南東の低地部で晩期の貯蔵穴が出土している。台地上では、縄文土器の出土は少ないが、舟底状のピットが見つかっている。遺物を含まないため、時期は不明であるが、縄文時代以前の可能性もある。笠寺台地では、見晴台遺跡の南方に、市場遺跡（晩期前半）、下新町遺跡（晩期後半）、本城町遺跡（晩期）、粕畑貝塚（早期後半）がある。東方の天白川対岸の鳴海丘陵西縁には、上ノ山貝塚（早期後半・前期初頭）、銚ノ木貝塚（早期後半・前期中頃）、大根貝塚（前期前半）、丘陵に清水寺遺跡（前期・中期）、光正寺貝塚（中期後半）、雷貝塚（晩期）がある。

弥生時代

見晴台遺跡では、中期末から後期の遺構、遺物が出土する。中期末の遺構は、方形周溝墓と想定される溝状遺構があり、後期に至り竪穴住居跡が多く造られている。台地縁に濠を巡らす環濠集落である。笠寺台地では、前期は条痕文系土器が下新町遺跡から出土するが、遠賀川系土器の出土は知られていない。中期は下新町遺跡、見晴台遺跡の北方に、東郷梅遺跡（中期末）がある。後期には、桜台高校遺跡、六本松遺跡、桜田貝塚・貝塚町遺跡、桜小学校遺跡、扇田町遺跡など遺跡数が増す。環濠集落としては、桜田貝塚・貝塚町遺跡、鳴海丘陵の三王山遺跡、城遺跡、山崎川対岸の瑞穂遺跡が知られている。

古墳時代

見晴台遺跡では、前期の竪穴住居跡が出土し、弥生時代以降も居住地であった。中期以降は規模縮小の傾向がある。周辺の集落跡は、桜本町遺跡、扇田町遺跡、曾池遺跡、春日野町遺跡、呼続遺跡などが知られる。古墳は、鳥栖八剣社古墳、鳥栖神明社古墳、桜神明社古墳、野屋古墳が知られている。六本松遺跡では方形周溝墓（方墳）、扇田町遺跡で古墳の周溝が出土している。

古代・中世

見晴台遺跡では、古代の竪穴住居跡が出土し、須恵器、灰釉陶器、古瀬戸陶器、山茶碗、古銭などが出土する。近世に桜村であったことや万葉集（巻三雑歌271）の高市連黒人の歌「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市瀉潮干にけらし鶴鳴き渡る」や、和名類聚抄の作良郷は、当地付近と推定されている。周辺の遺跡では、桜本町遺跡、桜台高校遺跡、六本松遺跡、曾池遺跡などがある。特に桜本町遺跡では、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が出土し作良郷との関わりで注目されている。

見晴台遺跡の西に小谷をはさんで立地している笠覆寺（笠寺観音）は、奈良時代に前身寺院小松寺が南区粕畠三丁目付近にあったと伝えられている。延長8年（930）藤原基経の子兼平とその妻、玉照姫が現在地に笠覆寺を建立した。その後荒廃したが、嘉禎4年（1238）に再興し、現在に至る。今日に見る堂宇は江戸時代の建立で、『尾張名所図会』に描かれた境内地の様相を今に伝えている。見晴台遺跡で出土する古代から中世にかけての遺物は、笠覆寺との関係が推察されている。

近世

見晴台遺跡では、近世には畑地として利用されていたため、遺物は少ないが、土棒と呼ぶ円柱状の土製

品が出土している。これは製塩の竈に使用されたものと考えられている。伊勢湾に面する近隣の星崎七ヶ村では、19世紀中頃まで製塩が行なわれ、慶長13年（1608）には合わせて95.5haに及んでいた。星崎の塩は、戸部村、桜村、新屋敷村、山崎村を経て、古井村に至る塩付街道を利用して各地に運ばれた。

近代

大正末期から昭和初期にかけて、耕地整理組合が設立され、道路が新しく造られた。この耕地整理事業により東郷梅遺跡が発見されている。昭和にはいと、笠寺台地西方の水田地帯や海岸埋立地には重工業や化学工業、繊維工業などの工場が立地し、南部臨海工業地帯を形成していった。ここでは、満州事変以降兵器製造などの軍需工業が発達した。

昭和14年（1939）に第二次世界大戦が起きた。昭和15年に陸軍により関特演（関東軍特殊演習）が満州において計画されるなか、ソ連による渡洋爆撃に対する警戒が高まっていた。昭和16年7月には要地地上防空部隊が京浜地区、阪神地区などに配置された。名古屋では、名古屋防空隊が発足し、鶴舞、汐止、柴田などに配置された。昭和17年には笠寺（見晴台遺跡）、土古などにも高射砲陣地が設営された。これらの高射砲陣地は、熱田神宮や南部工場地帯の防衛が主な目的であった。見晴台遺跡では、現在も砲座が残り、発掘調査においても遺構や遺物が出土する。

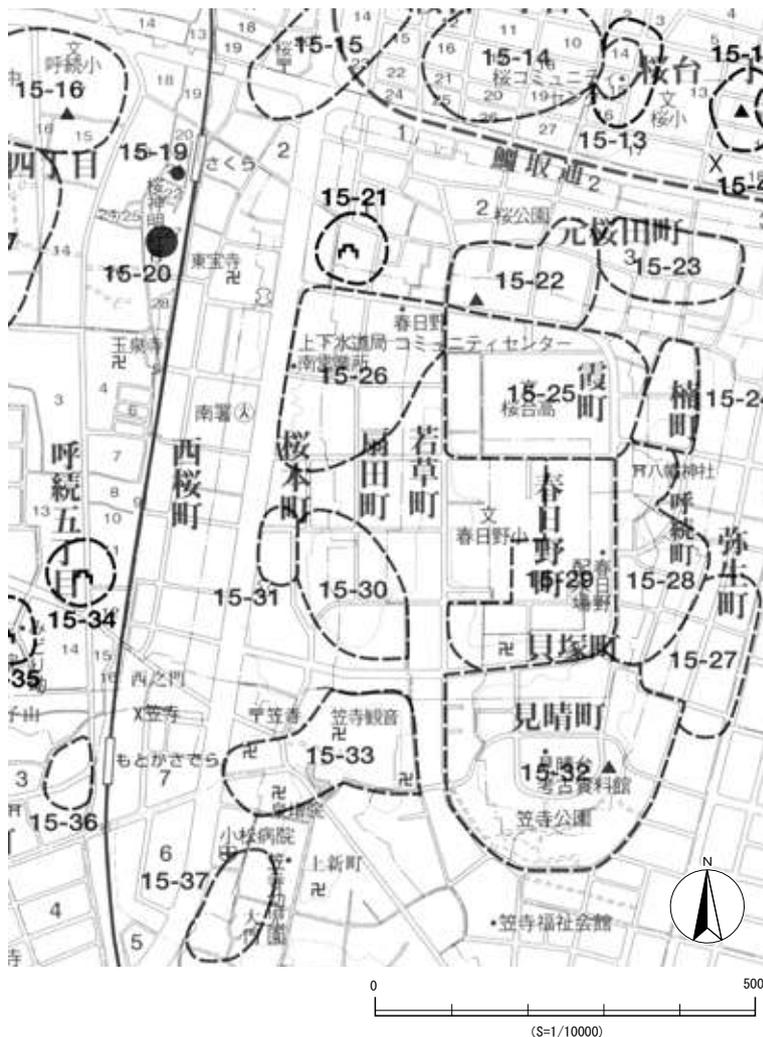


表1 遺跡名

遺跡番号	遺跡名	時代
15-13	桜小学校遺跡	弥生
15-14	桜台町遺跡	弥生・古墳
15-15	桜本町1丁目遺跡	弥生・古墳
15-16	呼統遺跡	弥生～中世
15-19	野屋古墳	古墳
15-20	桜神明社古墳	古墳
15-21	桜中村城跡	戦国
15-22	六本松遺跡	弥生～平安
15-23	元桜田町遺跡	弥生・古墳・中世・近世
15-24	楠町遺跡	弥生・古墳・平安・鎌倉
15-25	桜台高校遺跡	古墳～平安
15-26	桜本町遺跡	古墳～中世
15-27	弥生町遺跡	中世
15-28	桜田貝塚・貝塚町遺跡	弥生～中世
15-29	春日野町遺跡	縄文～古墳
15-30	扇田町遺跡	弥生～中世
15-31	桜本町低地遺跡	弥生～中世
15-32	見晴台遺跡	縄文～中世
15-33	笠寺観音遺跡	弥生・古墳・中世・近世
15-34	戸部一色城跡	室町～戦国
15-35	戸部城跡	戦国
15-36	松城町遺跡	平安
15-37	大門遺跡	弥生・中世
15-49	桜経塚	江戸

第3図 周辺の遺跡

3 明治17年の千竈村（前浜村）・笠寺村地籍図

愛知県公文書館に所蔵されている明治17年（1884）に作成された地籍字分全図（地籍図）は、土地の開発で大きく変貌する大正・昭和期前の土地利用を知ることができる。現在の地図と重ねあわせることで、当時の土地利用がどのように変化したのかがわかるが、ここでは道路と川、池、寺院、神社、塚を抽出して、現在の地図と重ねた。戸部城跡は土地造成により、位置がはっきりしないが、地籍図の地割から推定位置を示した。見晴台遺跡第50・51次調査で検出した溝SD101は、地籍図に記載された道跡と推定できた。発掘調査の成果とあわせて活用することにより、さらに具体的な地域の歴史が明らかにできると思われる。

使用地図 1：2500名古屋都市計画基本図（新瑞橋・笠寺・本星崎・野並・新海池）、地籍図：愛知県公文書館所蔵 愛知県千竈村・愛知県笠寺村（前浜村）（注）地図精度が異なるため場所によってずれが生じています。

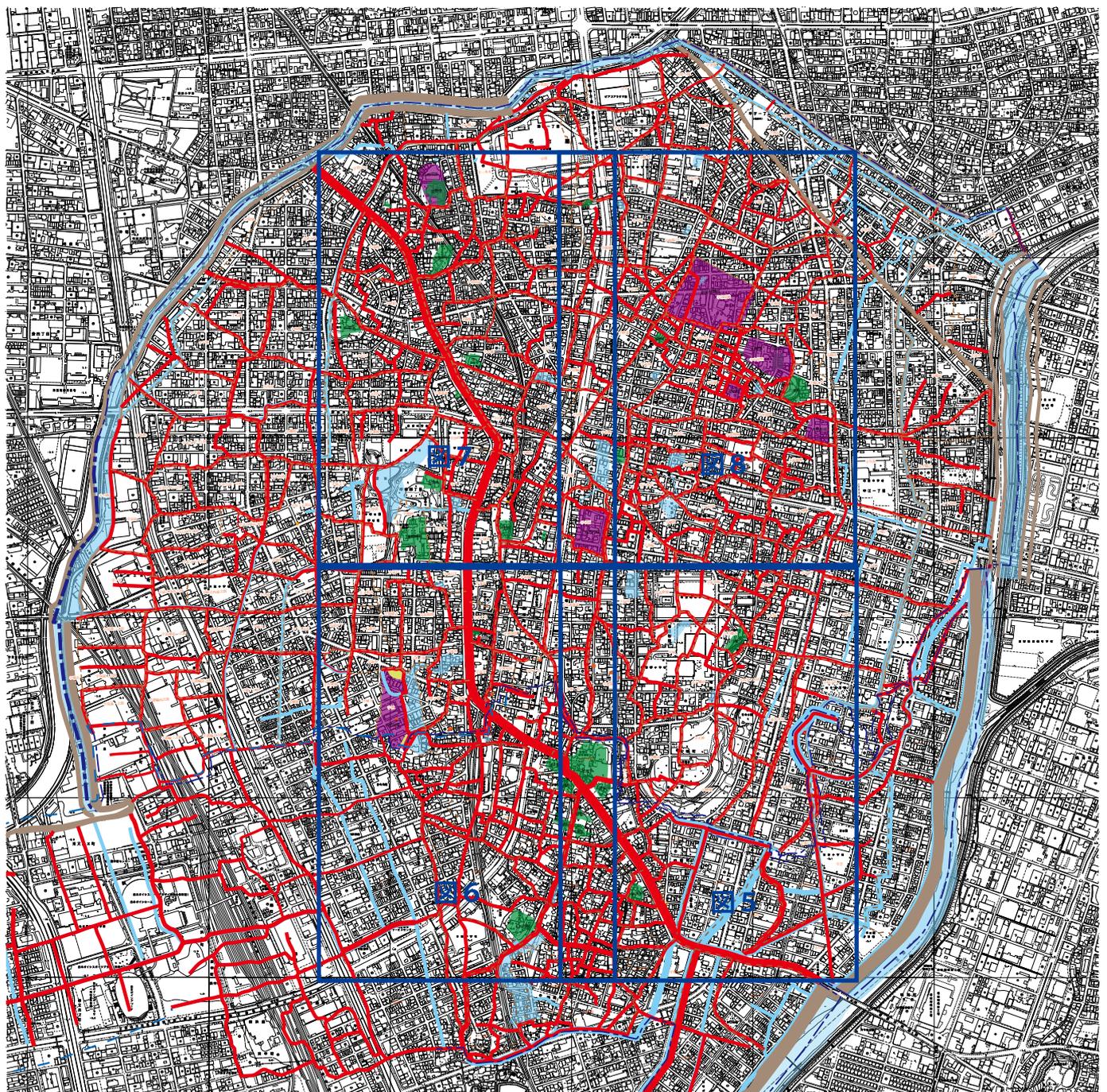
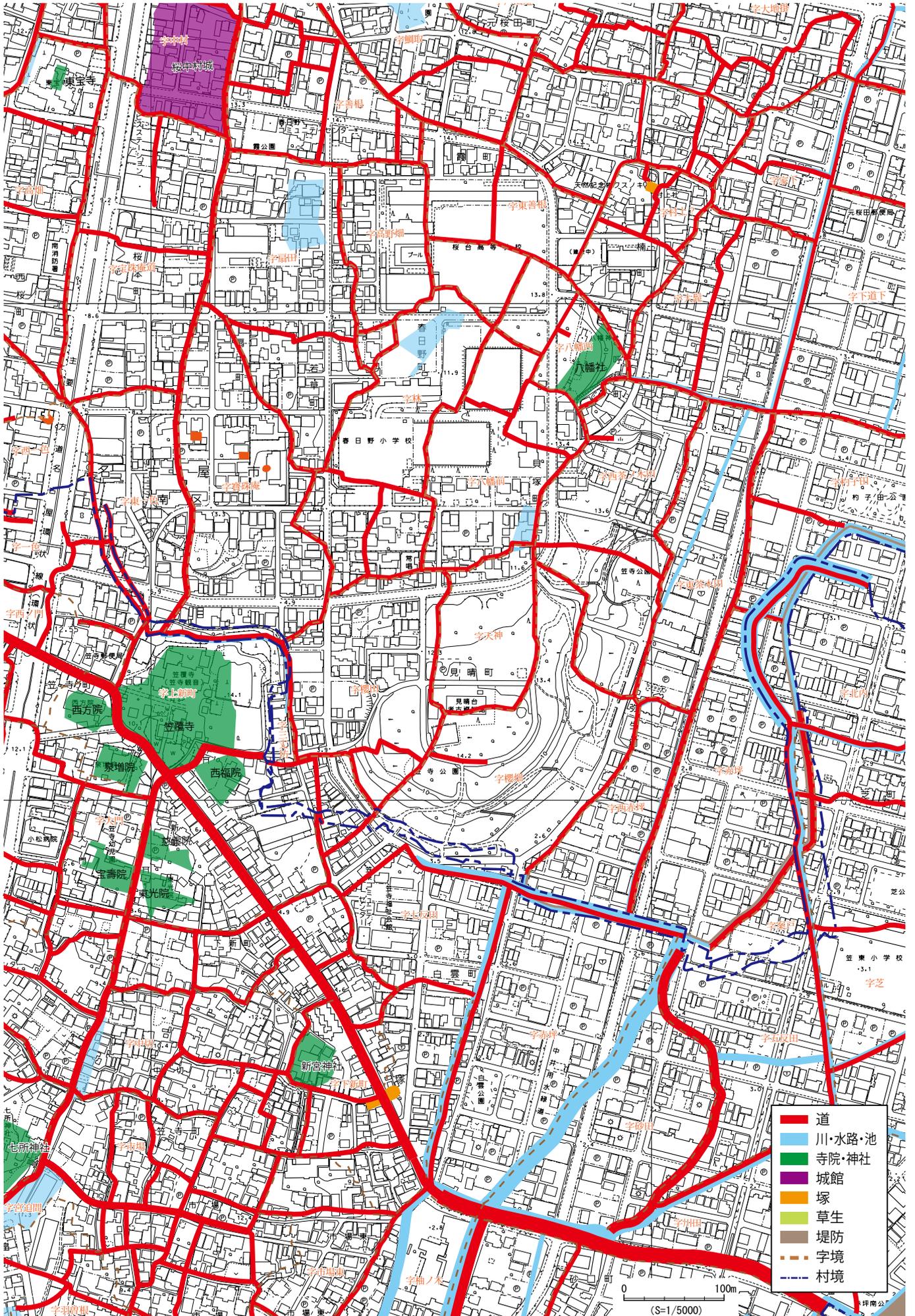


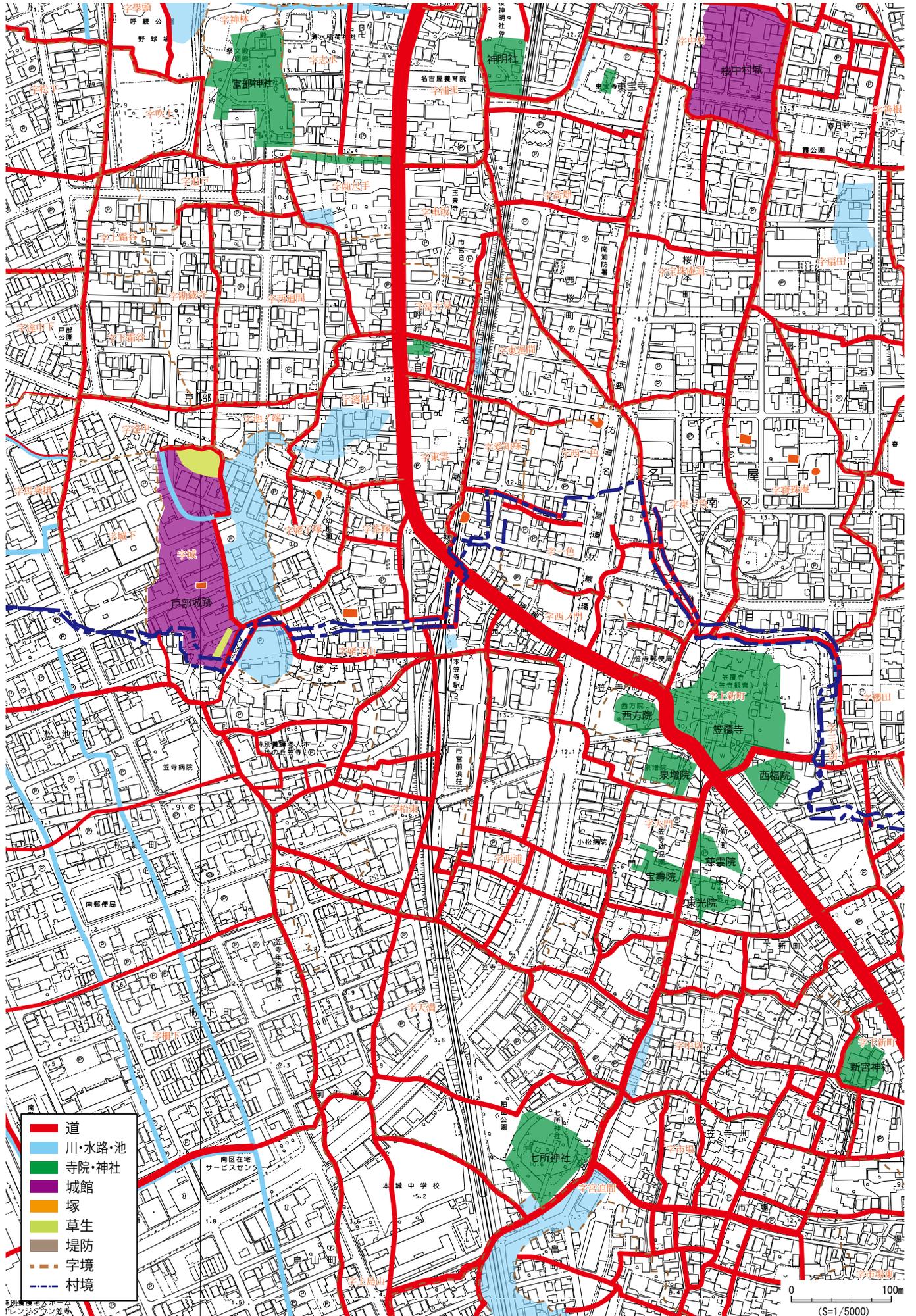
図4 地籍図と現代の地図を重ねた図の範囲

0 500m

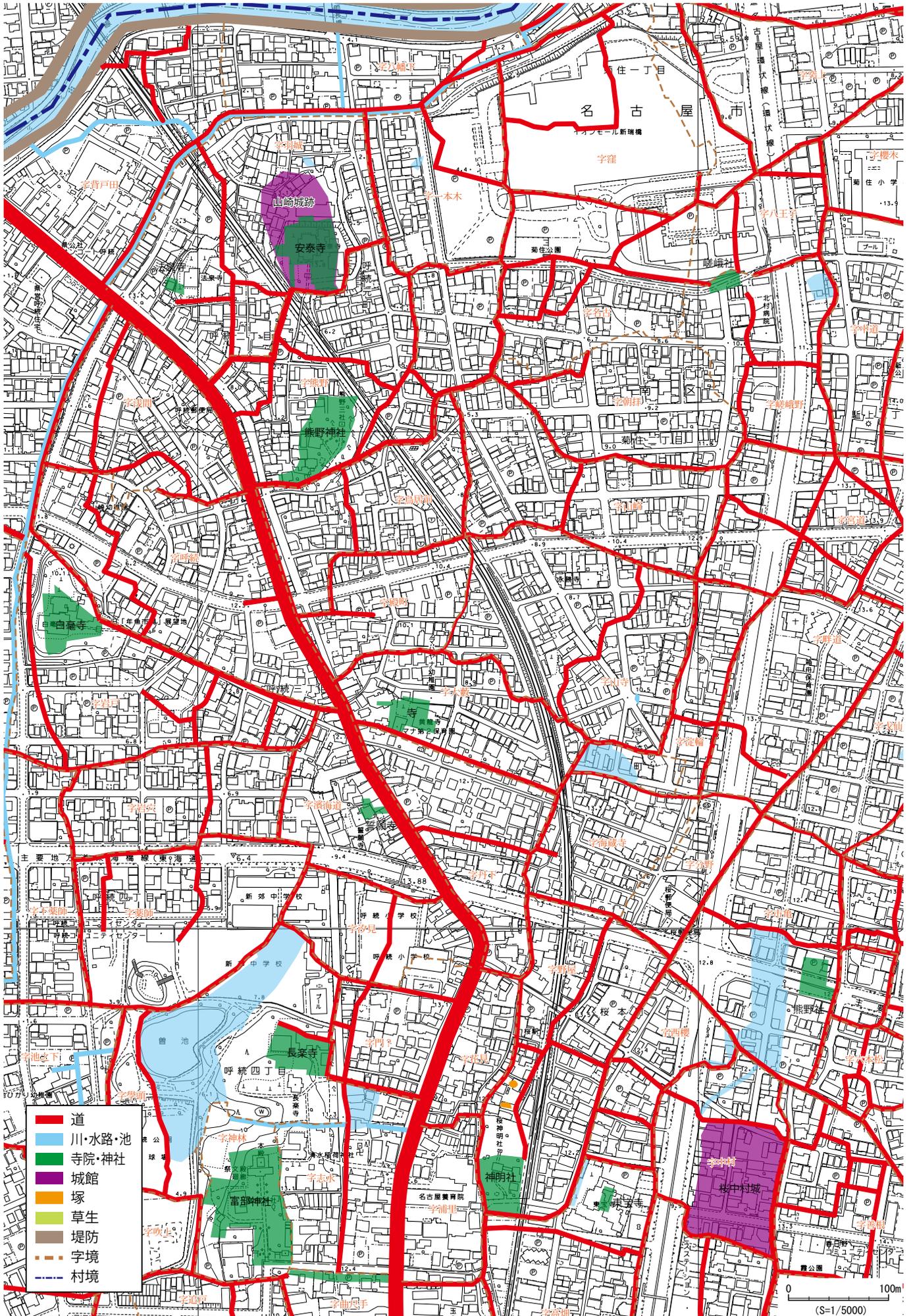


第5図 地籍図と現代の地図を重ねた図(1) 見晴町周辺

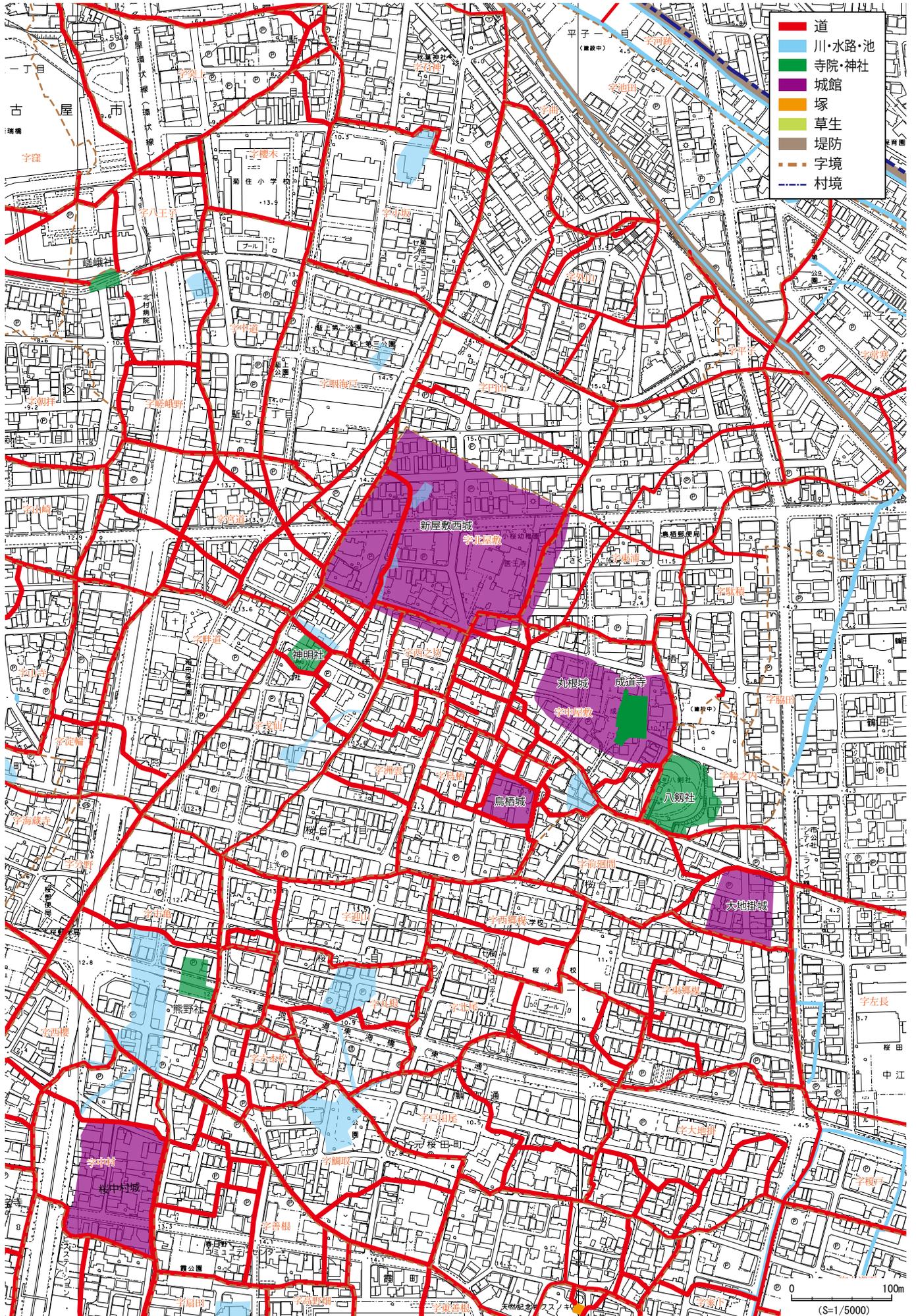
(注)村境は千竈村・笠寺村で別々に作成されたため、誤差がある。



第6図 地籍図と現代の地図を重ねた図 (2) 東海道・笠覆寺周辺



第7図 地籍図と現代の地図を重ねた図(3) 東海道・曾池周辺



第8図 地籍図と現代の地図を重ねた図(4) 鳥栖一丁目周辺

第2章 第49次発掘調査

1 調査の目的

平成16年度から平成20年度までの5か年の調査は、「見晴台遺跡の墓を探る」をテーマに掲げて取り組んできた。その成果は、第44次調査で溝SD01を検出し、周溝墓の分布に新たな知見を追加したものの、第45次～第48次調査では住居跡の検出が相次ぎ、周溝墓の調査は柵上げの状態となった。

平成21年度からは、「弥生時代の環濠の実態を明らかにする」を調査のテーマに掲げて取り組むこととなった。見晴台遺跡の濠状遺構は、早くも第1次調査に台地東縁部で検出して以来、数次にわたって断続的に調査が行われてきた。特に第31次調査で2条存在していることが判明したことは大きな進展であった。また第31次調査の西方の工事立会では、青銅器鑄造の際使用された送風管の破片が出土した。

こうした経緯から、居住地の北側を巡る環濠の規模や青銅器鑄造資料を得るため、第31次調査の西方に調査区A区を設定し、東西幅5～11m、南北長約20m、面積約140㎡を調査対象とした。また、公園整備が進められる公園北東隅の一画を対象に49B区を設定した。49B区は、桜田貝塚・貝塚町遺跡に位置する。高射砲陣地が置かれていた太平洋戦争中、大隊本部の神社が置かれていたところである。その南は電波標定機が設置された関係で、平坦に削平を受けていたが、神社跡地は削平をまぬがれて遺構が残っていると予想された。

2 調査の経過

第49次調査は、7月15日から8月16日までの調査の主要な全期間に、公募による市民参加を得て実施した。うち、中学生は7月22日から8月9日までの15日間で3日連続（水・木・金曜日）または2日連続（土・日曜日）の6つの日程から1つの日程を選択して参加した。高校生以上は希望する参加日数に制限はないが、一日あたりの参加者数をみて調整した。

7月8日 表土機械掘削。

7月15日 休憩用テント設営。A区 調査区壁面清掃。南東隅で玉石敷き面検出。貝殻の散布を確認。
49B区 表土機械掘削を始める。

7月16日 A区 南側で遺構検出。北側の西壁際にサブトレンチ設定し、地山を探す。

7月17日 雨天のため屋外作業中止。

7月18日 A区 水抜き後、遺構検出。現代の穴の跡の掘削。サブトレンチで環濠の土を検出。49B区 水抜き後清掃。

7月19日 A区 南側は既設電灯線の跡など検出し、遺構はまだはっきりしない。西端にサブトレンチ設定。北側ではサブトレンチ内で環濠検出。濠内に貝層があることを確認。49B区 試掘溝跡や家屋解体時の攪乱土を掘削。

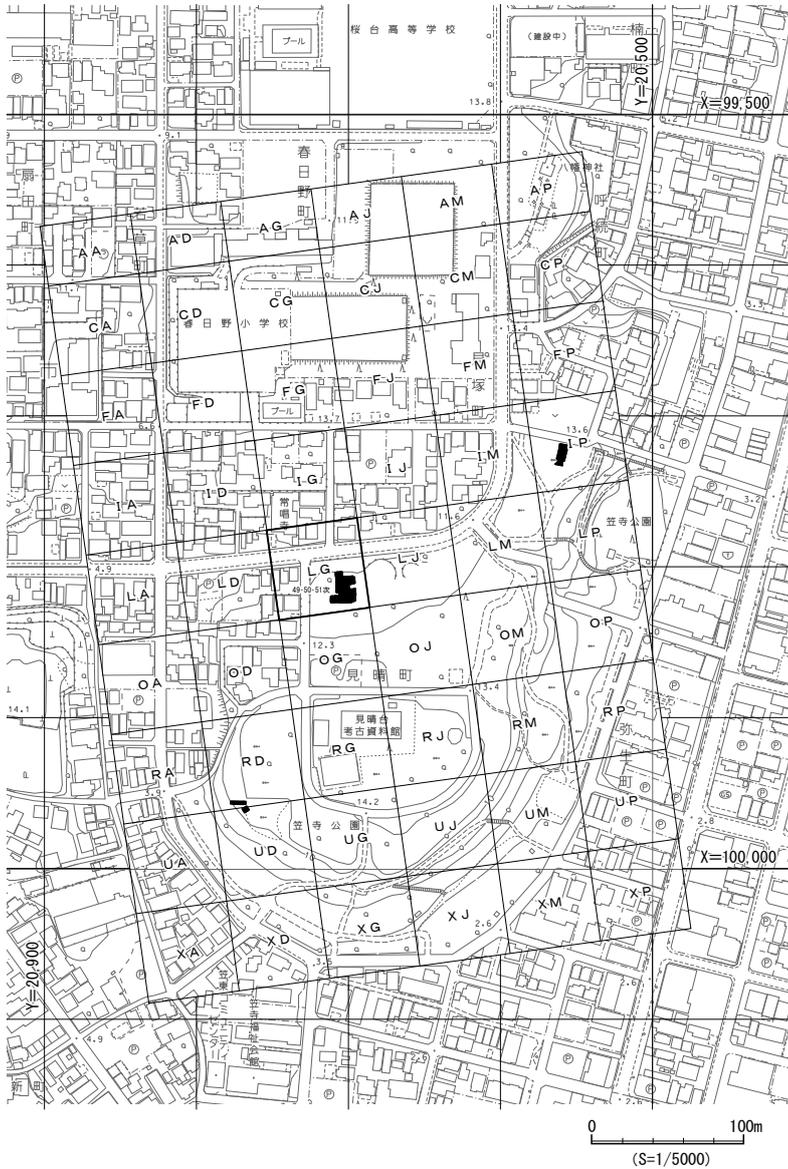
7月22日 本日から中学生参加。A区 南側は攪乱土掘削。北側は環濠の検出。49B区 現代の穴を掘り下げる。

7月23日 A区 南側は現代の穴を掘削。北側は環濠を切る中世の溝を検出し掘削。49B区 家屋の基礎

の穴を掘削。遺物包含層は無く、表土層の下で地山（熱田層）を検出する。東半分の黒い土の掘削を始める。

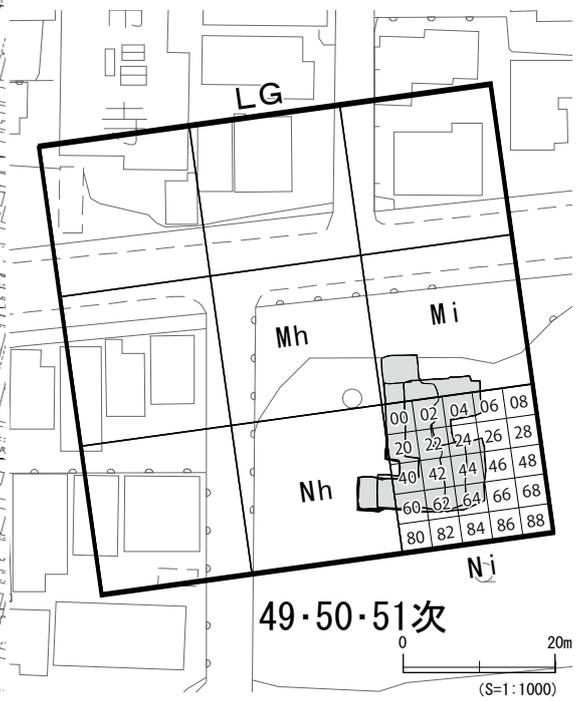
- 7月24日 A区 現代の穴や中世の溝の掘削を進める。49B区 黒い土の堆積した溝状遺構の掘削と、南斜面の神社の階段を埋めていた土を掘削する。
- 7月25日 A区 昨日に続き、現代の穴や中世の溝の掘削を進める。現代の大穴の壁面を清掃したところ、環濠の土層断面が観察できた。49B区 溝状遺構に掘り込まれた家の基礎を掘削。
- 7月26日 A区 南側は、南東部で現代の穴の掘削がほぼ終了する。北側は、これまで中世と考えていた溝から近世初頭の可能性の高い陶器が出土。49B区 溝状遺構の掘削。神社の階段の一番下の段を検出する。
- 7月29日 雨天のため屋外作業中止。室内で土器の水洗作業を行う。
- 7月30日 午前中は水の排水作業。A区 南側は、街路灯電線埋設溝の西側の穴を掘ったところ、通信ケーブル線（電纜）が出土する。北側は、環濠の一部の掘削を始める。北端では近世初頭の溝の延長部分が見えはじめる。49B区 溝状遺構のプラン検出。南北約10m、幅約2m。
- 7月31日 A区 濠の掘削。49B区 溝状遺構の東に重複する遺構を掘削する。
- 8月1日 雨天のため作業中止。出土品の水洗を行う。
- 8月2日 雨天のため作業中止。2時頃水抜き作業。
- 8月5日 梅雨明け。A区 南側の濠は、貝層付近を掘削する。北側の濠や北端の傾斜地に堆積した土を掘り下げる。B区 溝状遺構（溝1）の掘削。南端で溝2検出し掘削する。
- 8月6日 A区 南側の濠は、貝層を残して掘り下げる。北端の傾斜地に堆積した土を掘り下げる。49B区 溝1の掘削。弥生土器や石斧が出土する。
- 8月7日 A区 北端の傾斜地で地山検出し、近世の溝検出。濠の掘削。49B区 溝1掘削。弥生土器出土。
- 8月9日 A区 南側は、土器の出土状態の写真撮影や近現代の穴の記録をとる。北端は地山の検出。北の濠は戦後の大きな攪乱穴を清掃し、濠の北端を検出。49B区 溝1の掘削を進める。神社の階段を清掃する。
- 8月10日 午後市民見学会。A区 北側の濠は攪乱された部分を掘り下げる。49B区 溝の掘削。神社の階段を清掃し、写真撮影。
- 8月12日 A区 北端の溝はほぼ掘りあがる。南側では通信ケーブル線埋設溝の掘削。49B区 溝の掘削。
- 8月13日 A区 北端の溝から近世の遺物出土。写真撮影。北側の濠は、一部深掘り。南側の濠掘り下げ。
- 8月14日 A区 南側は、環濠周辺の清掃を進める。通信ケーブル線埋設溝掘り終える。北端の清掃。北側の濠は、一部深掘り。調査区壁面の断面図作成のための清掃や分層。49B区 溝1の断面図作成。
- 8月15日 A区 清掃後写真撮影。49B区 溝の清掃後写真撮影。調査区平面図作成。
- 8月16日 A区 環濠の断面写真撮影。近世の溝の土層断面図作成。貝層のブロックサンプリング。49B区 溝1土層断面図作成。調査区東壁土層図作成。平面図作成。出土遺物の取り上げ。
- 8月19日 平面図作成。調査区北端と東壁の断面図作成。西側道路での工事立会で高射砲陣地の通信ケーブル線出土。
- 8月20日 平面図作成。断面図作成。濠の遺物取り上げ。通信ケーブル線埋設溝写真撮影。

見晴台遺跡 大グリッド



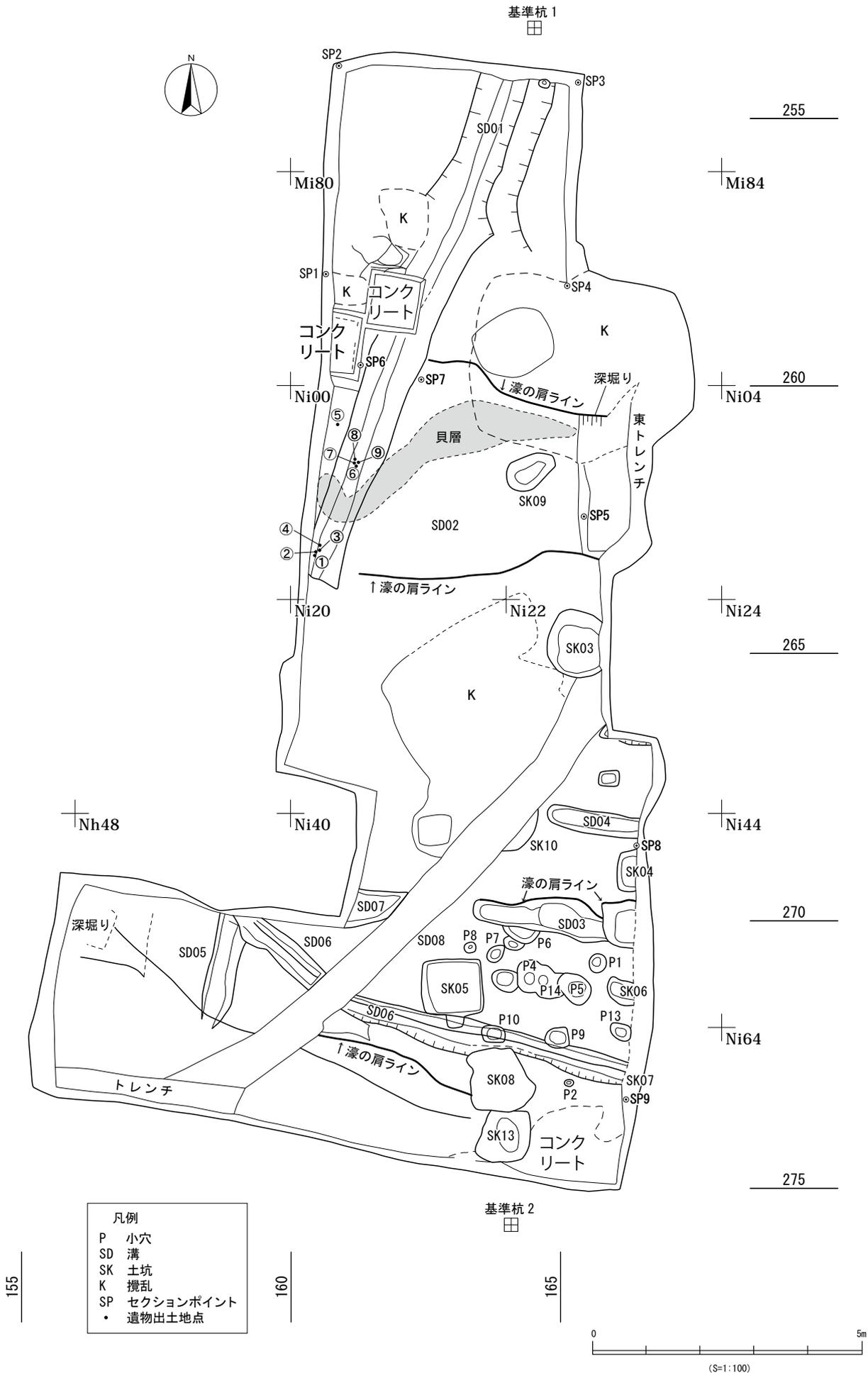
第9図 第49～51次調査区位置図

見晴台遺跡 中・小グリッド



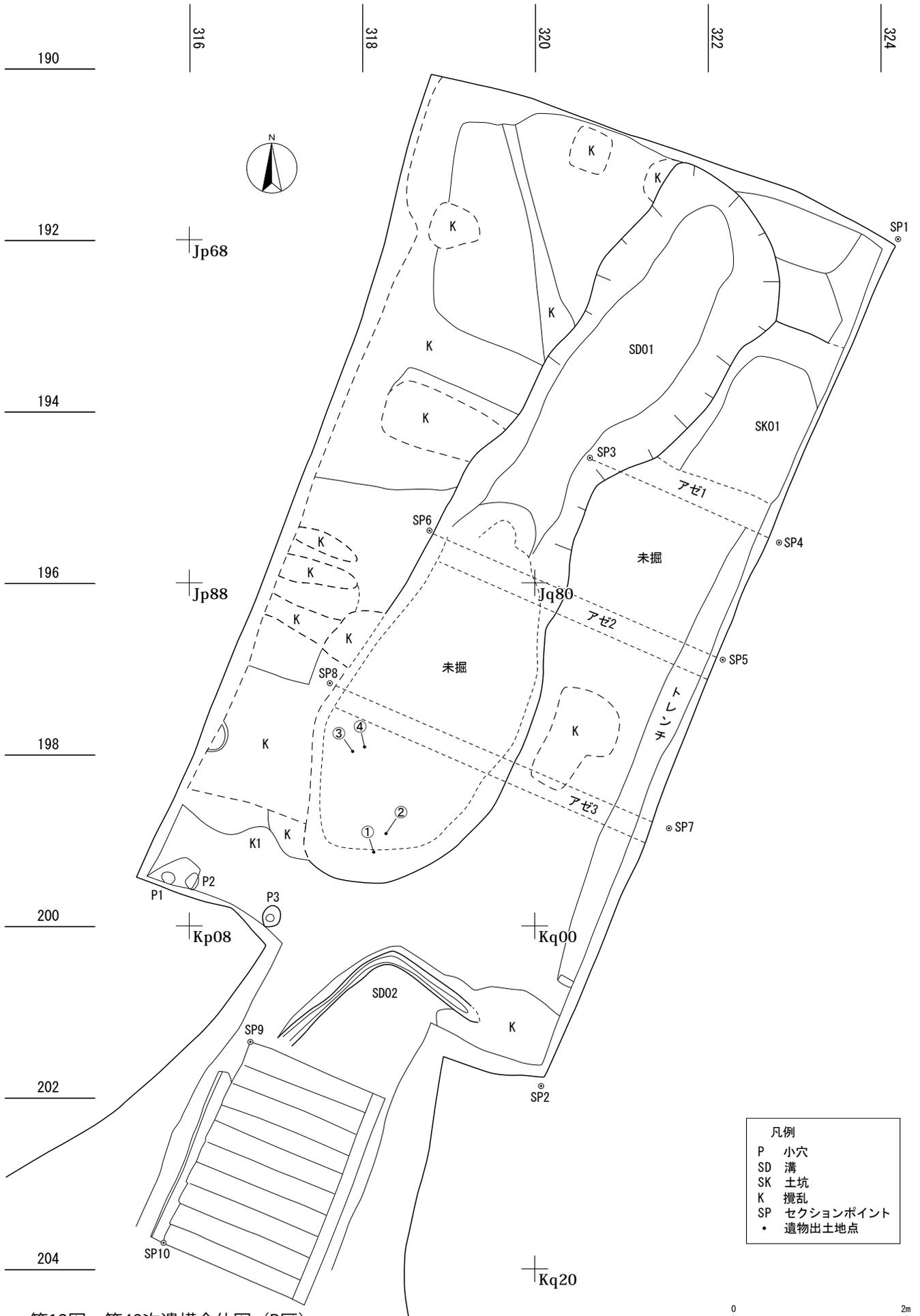
第10図 第49～51次調査区位置図(A区)

第49次 遺構全体図(A区)



第11図 第49次遺構全体図 (A区)

第49次 遺構全体図(B区)



第12図 第49次遺構全体図 (B区)

0 2m
(S=1/60)

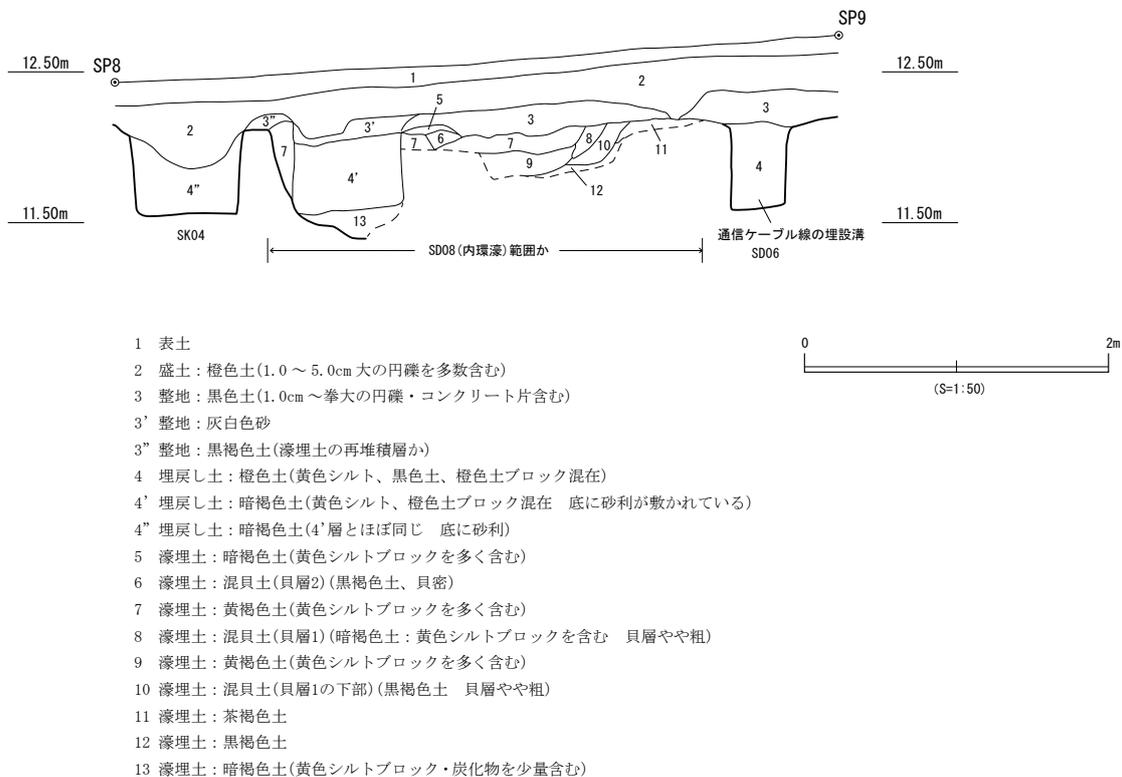
3 土層の説明

今回の調査地の基本的層序について、A区、49B区に分けて説明する。

A区 当地は台地上に立地しているが、北側に小規模な開析谷が東から西に向けてはいつている。したがって北端近くは緩やかに谷に向かって傾斜している。調査区北半西側の北壁の土層堆積を観察すると、地表から熱田層と呼ぶ地山（基盤）まで、約1.0mある。上位より、1層：表土（厚さ約0.25m）、2層：公園造成土・戦後の住宅の建設・取り壊しによる攪乱土（厚さ約0.15m）、3層：高射砲陣地に関する整地土（厚さ約0.45m）、4層：中世頃と思われる遺物包含層（厚さ約0.15m）で熱田層に至る。この北壁に接する西壁では、中世頃の遺物包含層は北端にみられるのみで、地山まで高射砲陣地に関する整地土が堆積している。一方、調査区南半東壁の土層をみると、厚さ約0.5mの堆積があり、1層：表土（厚さ約0.1m）、2層：公園盛土（厚さ約0.2m）、3層：整地土（約0.2m）で地山に至り、ほぼ同様な状況である。整地土は黒色土であることから、本来遺物包含層が存在していたものが、高射砲陣地設営に伴い、攪乱を受けたものと推測される。したがって、遺構は地山面で検出される。

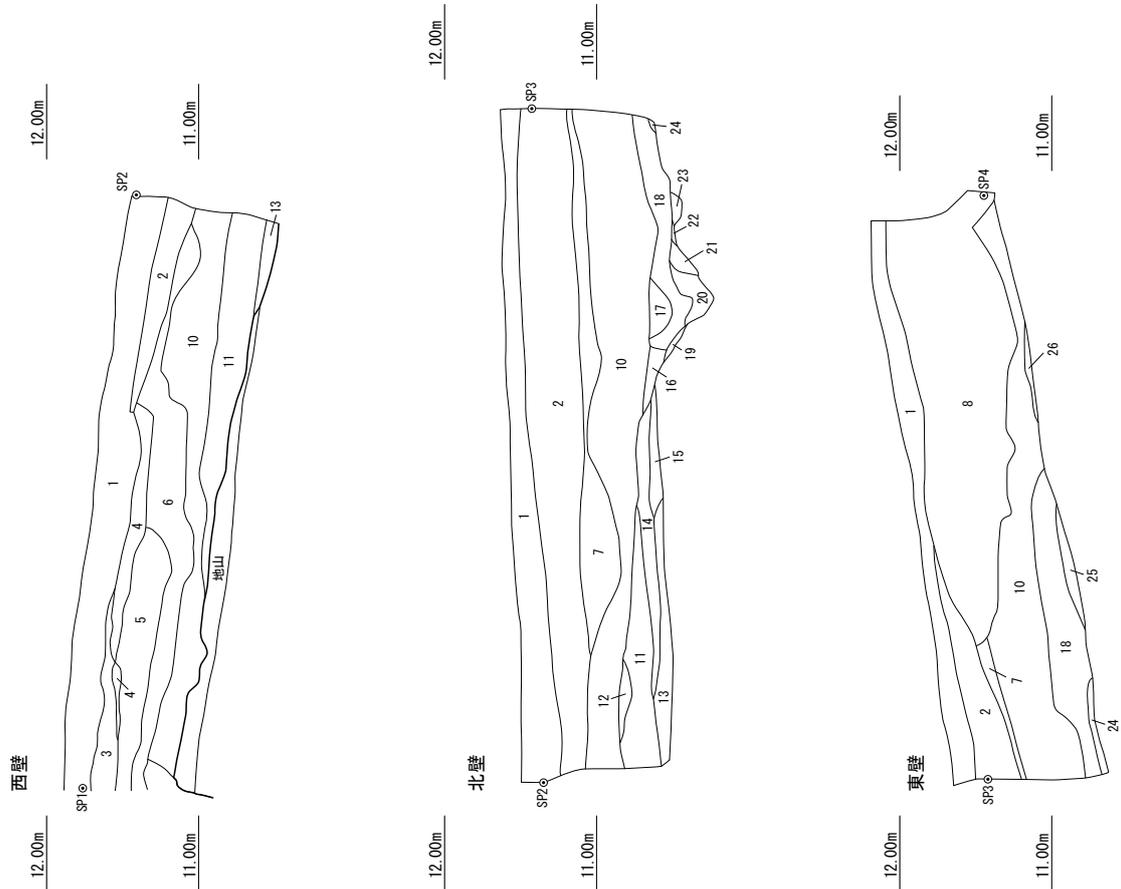
49B区 当地は、見晴台遺跡の北東部に隣接する桜田貝塚・貝塚町遺跡に位置する。見晴台遺跡に接し同じ台地上の東縁に立地しているが、高射砲陣地電波標定機設営の際、すぐ南側の台地上面を平らに削平したため、南から見ると当調査地付近が高台のように見える。調査区東壁の土層堆積を観察すると、地表から熱田層と呼ぶ地山（基盤）まで、0.15～0.35mで、表土層である。公園用地になる以前は、住宅が建っていたことから、上位の包含層は削平されたものと思われる。遺構は地山面で検出される。

第49次 土層図 (A区 東壁 (SD08))



第13図 第49次土層図 (A区 東壁 (SD08))

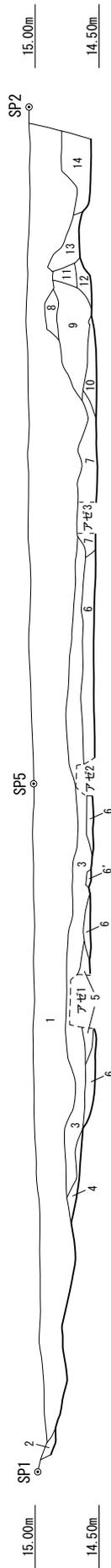
第49次 土層図(A区北端)



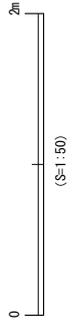
- 1 表土
 - 2 公團造成土
 - 3 戦後の住宅の建設・取り壊しにともなう堆積土
 - 4 3に同じ(地山の粘土ブロック・炭を含む)
 - 5 3に同じ(炭を多量を含む)
 - 6 3に同じ(地山の粘土ブロックを多量を含む)
 - 7 3に同じ(地山の粘土ブロックを多量を含む)
 - 8 3に同じ(地山の粘土ブロック・炭を多量を含む)
 - 9 3に同じ(地山の粘土ブロックを含む)
 - 10 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘度弱い 遺物を含む 石などは少なく比較的均質な土 特にしまりが強いということはない
 - 11 暗褐色土 10YR3/4 シルト 粘度弱い 遺物を含む 10と同じ石などは少なく比較的均質な土 特にしまりが強いということはない
 - 12 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘度弱い やや砂質 10や11と比べやや白味がかかる しまり弱い
 - 13 褐色土 7.5YR4/3 シルト 粘度弱い しまりあり 遺物を含む
 - 14 褐色土 7.5YR4/3 シルト 粘度弱い しまりあり 遺物を含む 13に比べやや赤味がかつた土
 - 15 褐色土 7.5YR4/3 シルト 粘度弱い しまりあり 遺物を含む
 - 16 褐色土 7.5YR4/4 シルト 粘度弱い しまり弱い 比較的均質な土 SD01埋土
 - 17 暗褐色土 10YR3/3 シルト 粘度弱い しまり弱い 比較的均質な土 SD01埋土
 - 18 褐色土 10YR4/4 シルト 粘度弱い しまり弱い 遺物を含む SD01埋土
 - 19 褐色土 7.5YR4/3 シルト 粘度弱い しまり弱い 16、18に比べやや黄味がかかる SD01埋土
 - 20 褐色土 7.5YR4/3 シルト 粘度弱い しまり弱い やや砂質(味の土) SD01埋土
 - 21 暗褐色土 10YR3/4 シルト 粘度弱い しまりあり 粘土ブロックをごく少量含む SD01埋土
 - 22 褐色土 7.5YR4/4 シルト 粘度ややあり しまりあり 地山の粘土ブロックを含む
 - 23 黒褐色土 10YR2/3 シルト 粘度あり しまりあり 地山の粘土ブロックを多く含む ピット埋土
 - 24 褐色土 7.5YR4/4 シルト 粘度なし しまりあり 赤味がかかる土
 - 25 明褐色土 7.5YR5/6 シルト 粘度なし しまりあり 赤味の強い土 遺物を含む
 - 26 褐色土 7.5YR4/4 シルト 粘度なし しまりあり 遺物を含む
- 10～12は近代以降の整地土か、13～15、24～26は中世頃の包含層の可能性あり

第14図 第49次土層図 (A区北端)

第49次 土層図(B区 東壁)



- 1 表土 攪乱 石、コンクリート、ガラスなど住宅解体時の土
 - 2 灰褐色土 地山ブロック土を含む(表土)
 - 3 黒褐色土 砂質強い、地山ブロック含まず
 - 4 黒褐色土と橙黄色地山土混じる(地山多い)
 - 5 黒褐色土 地山ブロック少し混じる 3層とよく似ている
 - 6 黒褐色土 地山ブロック1cm大 多く含む 色調は3に似る
 - 6' 橙黄色土器細粒含む
 - 7 黒褐色土 シルト質やや強い、地山ブロック含まず
 - 8 淡黒褐色土 やや砂質 地山ブロック含まず
 - 9 黒褐色土 シルト質強い、地山ブロック少し含む
 - 10 黒褐色土 地山土を多く含む
 - 11 黒褐色土 9層と色調は同じ やや砂質
 - 12 橙黄色土 地山土を多く含む
 - 13 黒褐色土 地山ブロックを多く含む 14層よりしまる
 - 14 黒褐色土 地山ブロックを多く含む 土坑埋土
- 3~12はSK01埋土 13、14は近代戦前の攪乱か？



第15図 第49次土層図 (B区 東壁)

4 遺構と遺物

(1) A区の遺構（第11・13・14・16・17図・写真図版2～4）

今回検出した遺構には、弥生時代、近世～近代、太平洋戦争中、戦後の時期があり、小穴、溝・濠、土坑、コンクリート造枡、玉石敷きコンクリート打設面（池）がある。

P4

調査区南部で検出した。埋土は灰褐色土、黄灰色土塊多く混じる。直径0.5×0.4m、深さ0.08mである。

P5

調査区南部で検出した。埋土は灰褐色土、黄灰色土塊は少ない。直径0.65×0.5m、深さ0.06mである。鉄製品（ネジか）、磁器、土器小片が出土した。

SD01

調査区北部で検出した、溝状遺構である。検出長9.85m、幅0.8～0.9m、深さ0.1～0.5mである。この付近は、地山面が北側へ傾斜しており、溝底も北に下がる。溝の年代は、当初は中世の溝と考えられたが、磁器が出土したことにより近世以降と推定される。ほかにミニチュア土器（赤彩）、山茶碗、陶器が出土。東方で検出した第31次調査SD4、第33次調査SD5につながるとされる。

SD02

調査区中央に位置する弥生時代の濠（外濠）である。遺構検出中にはコンクリート、釘、タイル、煉瓦が出土したが、東端にサブトレンチを設定し、濠であることを確認し南肩を検出する（第16図）。北東部の戦後の攪乱穴を掘削し北肩を確認した。検出長5.8m、幅4m、内濠SD08との間隔は約6mである。埋土上位層では須恵器（高坏）も出土した。

SD03

調査区南部で検出した。検出長3m、幅0.4～0.65m、深さ0.12mである。溝の北壁がSD08の肩と一致することから、SD08の埋土の一部とも考えられる。

SD04

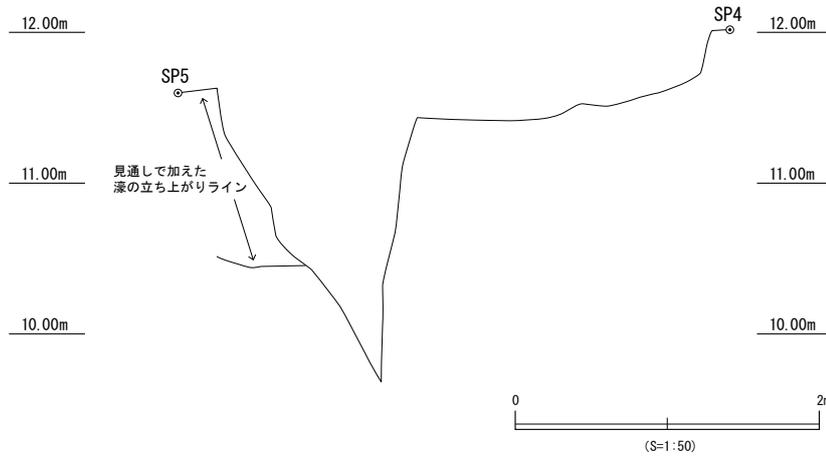
調査区南部東寄りで検出した。検出長1.8m、幅0.35m、深さ0.02m。土器片、貝が出土した。

SD05

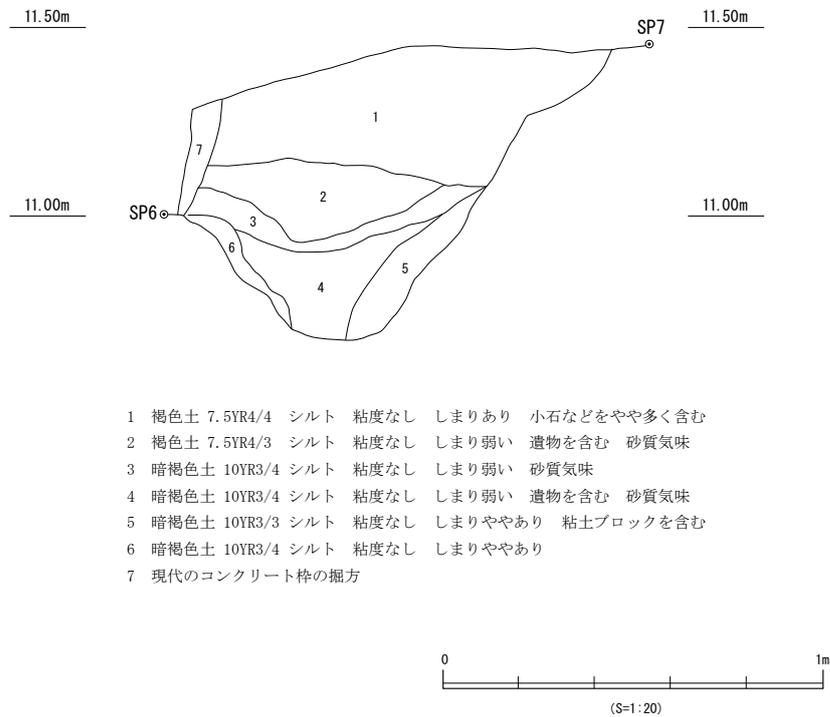
調査区南西部で検出した。南北方向の溝状遺構である。埋土は暗灰黄褐色土である。検出長1.8m、幅0.5m、深さ0.13mである。SD08より新しく、SD06より古い。SD01の一部の可能性が高い。

SD06

調査区南端で東西方向に検出した溝状遺構である。検出長約8m、幅0.6m、深さ約0.4mで断面箱形をしている。底面に直径1.2cmの鉛管が入れられていた。この鉛管は、電纜と呼ばれる通信ケーブル線である。第37次・38次調査では、鉛管は出土しなかったが、南北方向に幅1m、深さ0.8mの溝SD01が検出されている。当地はこの北方延長上に位置する。通信ケーブル線は、高射砲陣地の通信事務所と市街地の電柱を繋いでいたといわれている。当地西方で電柱に繋がっていたと推定されるが、同じ頃に行なわれた工事立会において二またに分かれた通信ケーブル線が出土した（写真図版4-4）。溝の埋土は、褐色土（黄色シルト、黒色土、橙色土ブロックが混じった土）で、濠SD08を掘って通信ケーブル線を埋設した後、すぐに埋め戻した状況である。弥生土器も出土している。



第16図 第49次エレベーション図 (A区SD02)



第17図 第49次土層図 (A区SD01)

SD07

調査区南部で検出した。検出長0.9m、幅0.7m、深さ0.3mである。埋土は、地山、灰黄褐色土、白色シルトブロックである。SD08の埋土の一部の可能性が高い。弥生土器出土。

SD08

調査区南端に位置する弥生時代の濠（内濠）である。ピットや溝等検出掘削するなかで、検出した。東西方向に掘削されており、幅約4m、検出長約10m。埋土中に貝層が堆積している。貝層付近を掘削した。

SK03

調査区中央部東寄りで検出した。直径0.95×1.2mの円形を呈し、深さ0.16mである。埋土は灰褐色土、灰白色地山土塊であった。弥生土器（長頸壺）が出土した。

（2）49B区の遺構（第12・15・18・19図・写真図版5～7）

今回検出した遺構には、溝状遺構、溝または土坑1基、住居跡1基、コンクリート製階段、小穴がある。調査区西側は、家屋の解体に伴う攪乱が多かった。

SD01

調査区中央で南北方向に検出した。長さ9.3m、幅1.4～2.3mである。北半分は完掘し、深さ約0.3mである。南半分は完掘していない。埋土は黒褐色土である（第18図）。弥生土器、石斧が出土した。方形周溝墓の溝と推定される。

SK01

調査区東側で検出した土坑または溝状遺構である。掘削したのは北端部分のみである。調査区東壁際にトレンチを設定して土層を観察した結果、南北7.5m以上、幅1.2m以上、深さ約0.3mと推定できた。埋土は黒褐色土である。弥生土器が出土した。土層断面の観察から、SK01→SD01の前後関係が推定できた。溝状遺構とすると、SD01同様に方形周溝墓の一部と推定される。

SD02

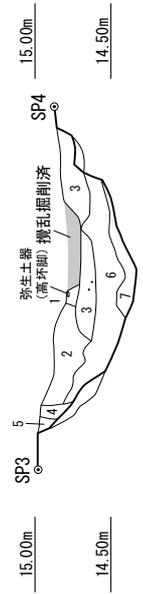
調査区南端で検出した。L字形に検出され、幅0.2～0.25mであることから、竪穴住居の周溝の一部と推定される。東西長1.3m、南北長1.7mである。埋土は黒褐色土である。

階段

平成20年度に実施した試掘調査において検出し、存在が確認されていた、コンクリート製階段である。高射砲第二大隊本部（通称名いすず隊）が構築した営内神社（いすず神社）の階段である。削平を免れていた台地の南端斜面で検出した。戦後の住宅地の石垣構築により最下段2段分を失っていたが、残りの10段分と、一番下に離れて一段分が出土した。高さ1.18m、一段の高さ0.122～0.144m、全幅2.1m、内幅1.6mである。神社施設や参道などは戦後の削平により失われていた。

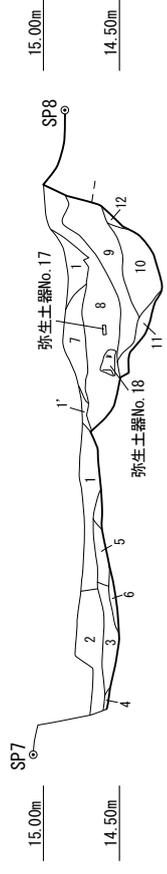
第49次 土層図(B区 SD01)

SD01 アゼ1 南面



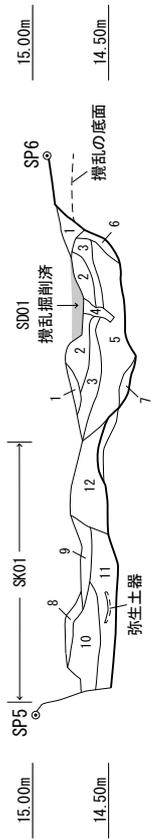
- 1 攪乱の残り 褐色土 砂質 (住宅基礎溝埋土)
- 2 黒褐色土 砂質 地山ブロック含まず 10YR2/2 黒褐
- 3 黒褐色土 2層に比べシルト質強い 10YR2/1 黒
- 4 黒褐色土 2層より砂質強い 堅くしまる
- 5 黒褐色土 4層より砂質強い
- 6 黒褐色土 シルト質強く堅くしまる 10YR3/1 黒褐
- 7 黒褐色土と1~3cm大の地山ブロック多く混じる

SD01 アゼ3 北面



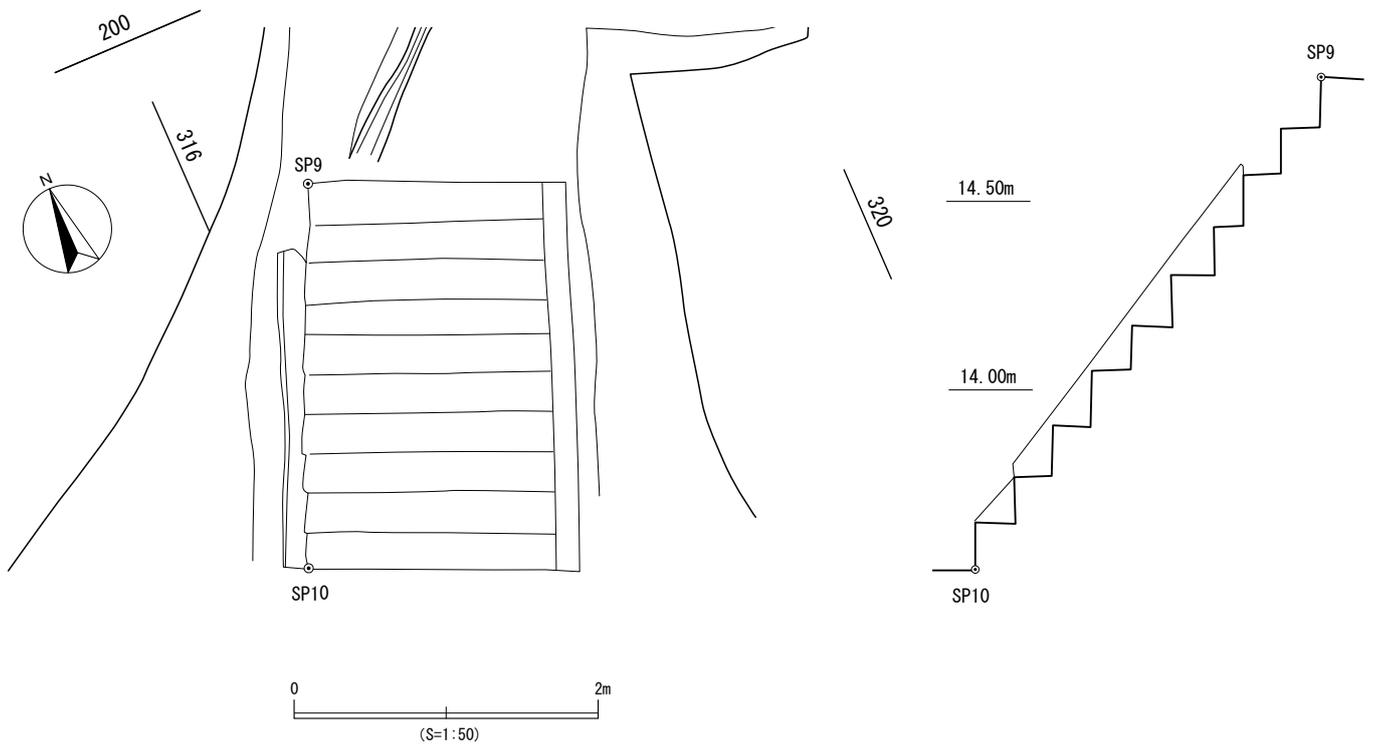
- 1 攪乱 黄褐色土 (砂質) 地山ブロック多く含む
- 1' 攪乱 地山土ブロック含む 灰褐色砂質土
- 2 黒褐色土 砂質強い 10YR3/1 黒褐(SK01埋土2~6層)
- 3 黒褐色土 シルト質強い 0.5cm大の地山粒まばらに含む 10YR3/1 黒褐
- 4 黒褐色土 地山ブロック多く含む
- 5 黒褐色土 地山ブロックを密に含む
- 6 地山土に黒褐色土が混じる
- 7 黒褐色土 砂質土 堅くしまる 5Y3/1 オリーブ黒
- 8 黒褐色土 ややシルト 堅くしまる 10YR3/1 黒褐色
- 9 黒褐色土
- 10 黒褐色土 シルト質 10YR2/1 黒
- 11 黒褐色土 黄褐色地山ブロックを多く含む シルト質
- 12 黒褐色土 黄褐色地山ブロックを多く含む シルト質

SD01 アゼ2 北面



- 1 攪乱 砂質土
- 2 黒褐色土 砂質強い 白色砂粒混じる 1cm大の褐色土ブロック 地山ブロック含まず
- 3 黒褐色土 2層と5層の間 やや砂質強い
- 4 攪乱 地山ブロックが多く含まれる
- 5 黒褐色土 シルト強く堅くしまる 0.5cm大の地山砂ブロックをわずかに含む 10YR3/1 黒褐
- 6 黒褐色土 地山ブロック密 0.5~1cm大の地山ブロック
- 7 黒褐色土 地山ブロック密 大半が地山土
- 8 黒褐色土 砂質土 堅くしまる 淡黒褐色土 部分的に地山土砂礫粒を含み攪乱の可能性
- 9 黒褐色土 砂質土 堅くしまる
- 10 黒褐色土 砂質土 極めて堅くしまる
- 11 黒褐色土 砂質土 極めて堅くしまる 灰砂ブロック含む 地山ブロックは含まない 遺物は少ない
- 12 黒褐色土 砂質土 11層に比べ黒味が薄い、堅さや質はほぼ同じで分層困難 10YR2/1 黒

第49次 B区 階段平面図・断面図



第19図 階段（第49次B区）

(3) A区の遺物（第20・21図・写真図版21～23）

コンテナ数19箱あり、内訳はA区10箱、B区9箱である。

SD01（第20図）

20は弥生土器のミニチュア土器である。14、15は弥生土器台付甕の脚部である。写真図版22-8は山茶碗（中央、右下）、磁器（右上）、陶器土瓶底部（左下）、加工円盤（中世陶器）（左上）である。弥生土器はSD02からの混入品と思われる。

SD02（第20図）

弥生土器 1、2、4、5、10は壺の口縁部である。1、2、4、10は赤彩されている。3、12、13は甕の口縁部である。3、12の口唇部に刺突文が施されている。6は甕の頸部である。16は台付甕の脚部である。11は高坏の坏部か。17、18、19は高坏脚部で18は三方透かしである。19は赤彩されている。8は小形の鉢（ミニチュア土器）と思われる。9は小形の壺（ミニチュア土器）である。口縁部の一部が欠損するがほぼ完形品である。

時期は、13はIV様式（高蔵式）、19はVII様式（欠山式）と幅がある（土器の編年観は村木誠の観察及び加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年』2002年 木耳社による）。

SD03

コンクリート、弥生土器、貝がある。

SD04

土器片、貝がある。

SD05

第22図－2は弥生土器台付鉢の脚部である。赤彩される。この土器は南西部包含層出土の可能性はある。陶器播鉢がある。弥生土器は混入品と思われる。

SD06

弥生土器壺の口縁部がある。赤彩される。弥生土器高坏がある。

SD07

土器小片がある。

SD08 (第20図)

弥生土器 21は壺で口縁部と体部の一部が欠損する。23は直口壺の頸部から体部の破片である。24、26は壺の体部である。26は楕円直線文と波状文が交互に施文される。25、27は壺の底部である。31は小形の甕（ミニチュア土器）である。28は甕の口縁部である。口唇部を丸く収める。内面ヘラケズリ調整を施す。32、33は台付甕の底部である。33は脚端が外方に広がる。22は高坏の坏部である。内外面ヘラミガキ調整を施す。34は器台の口縁部である。口唇部を内側に折込んでいる。35は蓋である。摘み部分は指でつまみ上げている。写真図版22－9は赤彩された土器片である。

SK08

写真図版23－2は弥生土器甕の口縁部である。ほかにタイル、基石、砥石、プラスチック製品などがある。

SK09

弥生土器、耐火煉瓦片がある。

SK11

弥生土器壺の体部（第21図－1）がある。色調が灰黄褐色を呈している。第50次調査SD102出土の破片と接合した。

P5

弥生土器、陶器（植木鉢か）、鉄製品（ネジか）、ガラスがある。

P9

近現代の瓦、弥生土器がある。

P13

近現代の瓦、弥生土器、コンクリートなどがある。

SX01 (第21図－3)

写真図版23－1は陶器皿である。3は火打金である。ほかに瓦、タイル、碇子、磁器、コンクリートなどがある。

表土・検出・攪乱 (第20・21図－4)

弥生土器 写真図版23－9（左）は壺の口縁部である。赤彩される。7は壺の底部である。SD02検出中出土。39、40は台付甕の脚部である。40は外面にタテハケ調整を施す。写真図版23－9（右）は高坏の坏部である。赤彩される。36、37は、高坏の脚部である。37は透かし孔3か所が残る。41は土器片の縁を打ち欠いて円形にした加工円盤である。

須恵器 43は脚付壺の脚端部である。SD02検出面～－50cm掘削深から出土した。

磁器 写真図版23－12右上は、湯飲である。写真図版23－12右下は、削り出し高台である。内外面

に透明釉がかかる。昭和戦後か。写真図版23-12（左）は皿、写真図版23-12（中央）は坏で内面見込みに「寿し白米 青森市大一和田精米所」とある。

石器 第21図-4は養老瀧産チャート製火打石である。

（4）B区の遺物（第21図・写真図版24・25）

SD01

弥生土器 5は壺の口縁部である。6～8は壺の底部である。9は甕である。口唇部、頸部に刺突文を施す。11は小形の高坏である。脚部に三方透かしがある。12～14は高坏の脚部である。写真図版24-6は坏部、12は脚部に赤彩されている。写真図版24-6は外反し、波状文が施されている。写真図版24-4は小形の高坏である（ミニチュア土器）。10は台付鉢である。15は蓋である。

時期は、10、12はⅥ様式（山中式）である。

石製品 17は磨製石斧の刃部の一部である。18は磨石で焼けて赤化している。

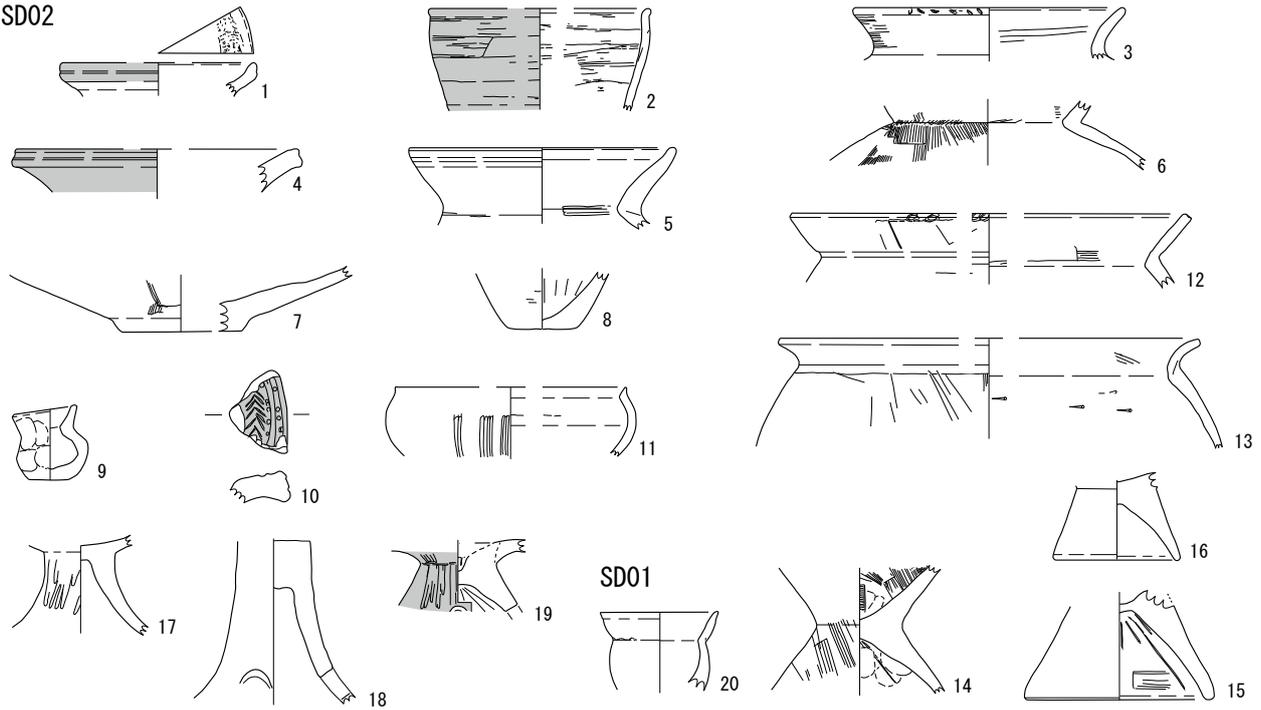
SK01

21は小型壺である。口縁部の一部が欠損するがほぼ完形品である。赤彩されている。写真図版25-1は壺の口縁部である。口唇部がわずかに垂下する。25は小型の鉢である。口縁部を内側に折返す。外面ハケ調整を施す。写真図版25-2は甕の口縁部である。23は台付甕の脚部である。外面ハケ調整を施す。写真図版25-6は高坏の脚部で櫛描直線文を施す。22は甕の口縁部である。24は高坏の口縁部である。器壁が磨滅しているため、施文は確認できない。26は器台の脚部で、櫛描直線文を施す。三方透かしである。

表土・攪乱

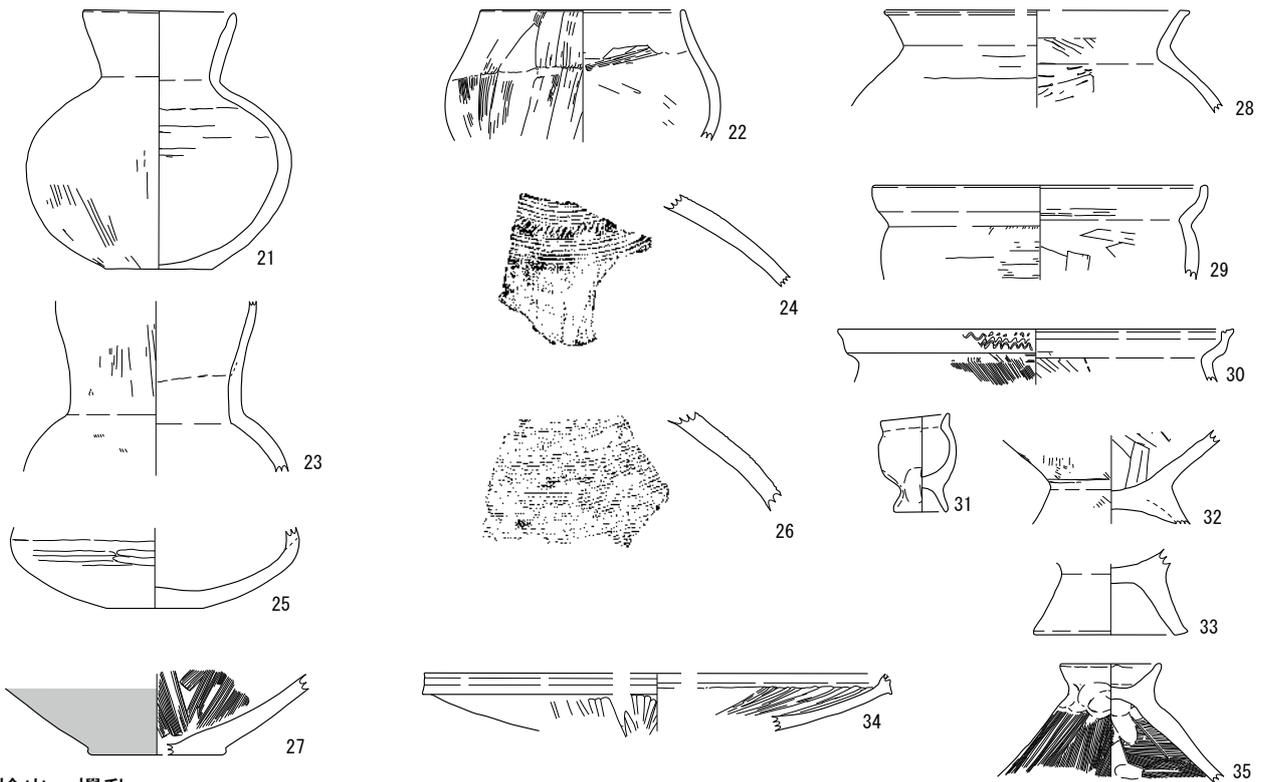
写真図版25-8は、玩具のラバードールの象の頭部で体部を欠失する。鼻は桃色、後頭部から背中中は水色、白目は黄色と彩色がされていた。ゴム製品であるが、経年劣化により硬くなっている。写真図版25-9は貝形土製品で、彩色されている。このほか、歯ブラシは、表面に「STERILIZED johnson Johnson U.S.A. Tek MEDI (CAL)」裏面に線刻で「L#5、96」とある（STERILIZEDは滅菌済み（CAL）は磨滅のため推定）。階段下埋土中から出土したコンクリート片は、階段の一部かもしれない。

A区
SD02

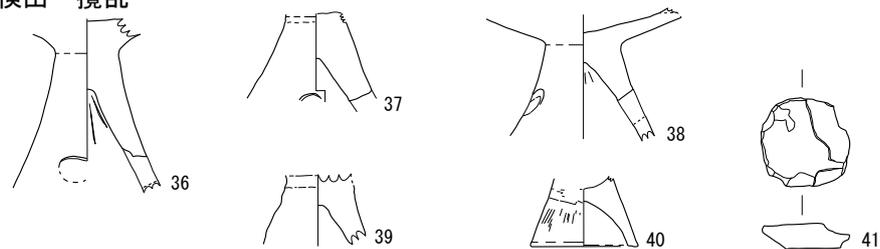


SD01

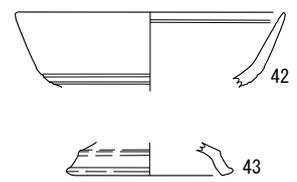
SD08



検出・攪乱



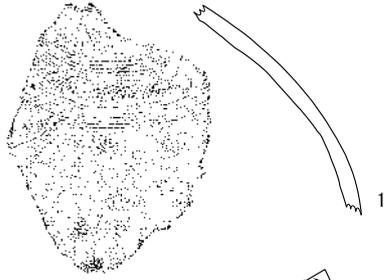
SD02 須恵器



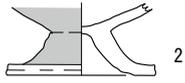
赤彩



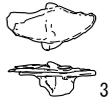
A区
SK11



SD05



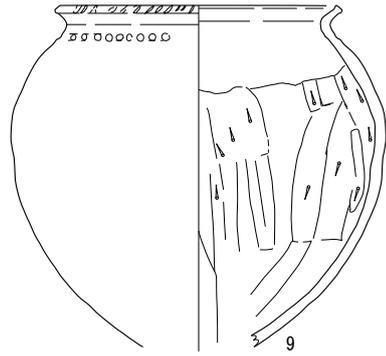
SX01



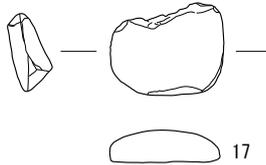
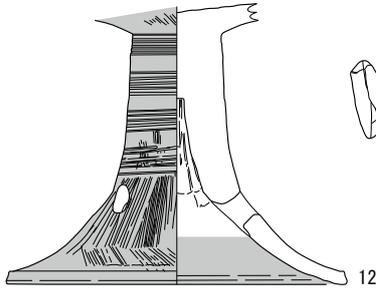
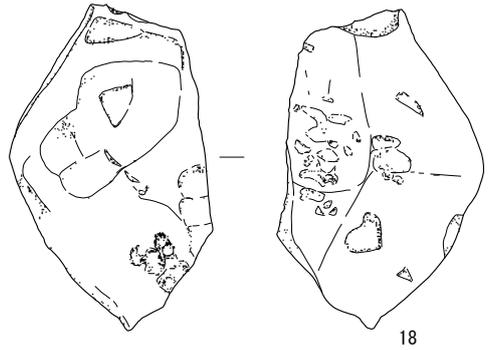
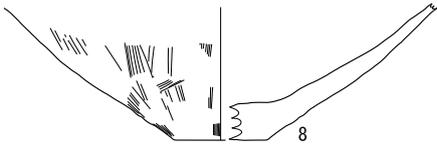
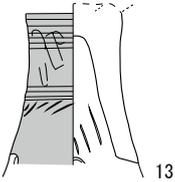
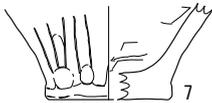
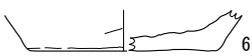
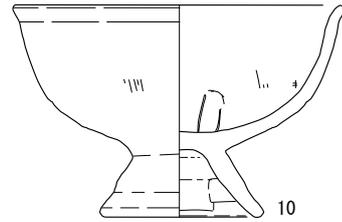
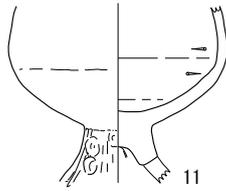
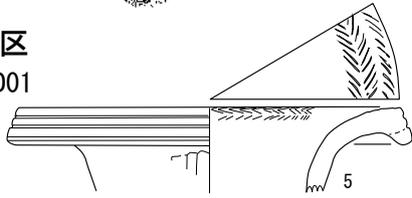
北端



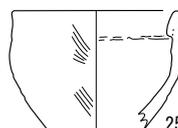
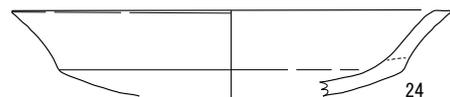
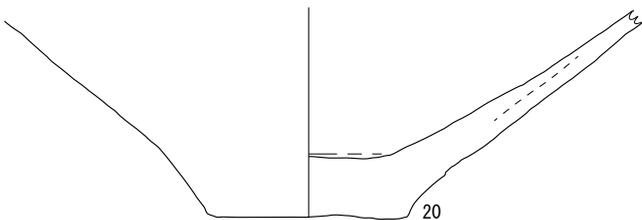
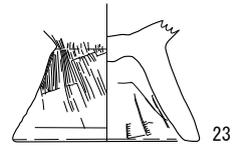
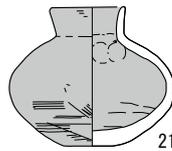
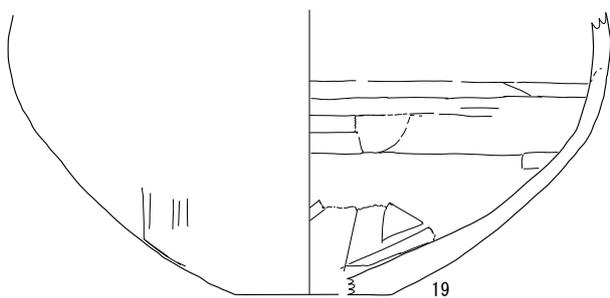
B区



B区
SD01



SK01



赤彩



第21図 遺物図 (2)

第3章 第50次発掘調査

1 調査の目的

昨年度の調査に引き続き、同一か所で調査を実施し、環濠が掘られた状況について調べを進めることにした。調査区は昨年度のA区とほぼ同じであるが、東側に約5m拡張した（第49図）。

2 調査の経過

第50次調査は、7月5日から9月3日までの期間で実施したが、このうち市民参加期間は、7月14日から8月15日までであった。中学生は、7月21日から8月8日まで6つの日程に分かれて参加した。

7月8日 フェンス設置。重機による表土掘削を始める。

7月9日 重機による表土掘削。

7月10日 重機による表土掘削。東部でコンクリート枡出土。戦時中の可能性があり残す。

7月12日 表土掘削終了。北東隅に建物基礎が残る。

7月14日 テント設営。雨天のため資料館で展示解説、48次調査出土遺物の水洗作業。

7月15日 現場の状態が悪く、館内で遺物の水洗作業や注記作業を実施する。

7月16日 排水作業、調査区壁面の清掃作業を行う。

7月17日 昨年同様に南側、北側に班を分けて南区、北区とし、新たに拡張した東側を拡張区とした。

南区は遺構検出作業を行い、西側から環濠を検出。北区側は調査区壁面を清掃し、近世溝SD01の清掃を行い、環濠の肩を確認した。拡張区は、遺構検出作業を行い、戦時中の炊事場と考えられる遺構検出。

7月18日 遺構検出作業。

7月21日 南区は南端の溝から弥生土器出土。西端の溝から戦後の磁器出土。北区は遺構検出作業。拡張区は、竈2基検出。炊事場の柱穴確認。

7月22日 北区はSD103掘削。ガラス、釘など出土。拡張区は竈掘削。SK04は遊具の基礎か。



第22図 調査風景 7月31日

- 7月23日 南区は西端の溝から電球のソケット出土。北区は、環濠掘削。
- 7月24日 南区は西端で溝底確認する。北区は濠の北肩確認。SD01の延長部分掘削。拡張区は、南端で埋め甕、通信ケーブル線埋設溝の延長部分出土。
- 7月25日 南区は南端の溝で底を確認する。北区は環濠の掘削。拡張区は、通信ケーブル線埋設溝完掘。
- 7月28日 南区は南端の溝から近世初期の染付磁器出土。北区は濠SD02掘削。拡張区は南東隅で新たな溝検出。
- 7月29日 雨天のため、現場作業中止。館内において第48次・49次出土遺物水洗作業。
- 7月30日 午前中は排水作業。泥取り。午後から遺構検出、掘削作業。
- 7月31日 南区は溝の掘削。北区は濠の掘削。拡張区はトレンチにおいて溝の肩を確認した。
- 8月1日 南区は、西端の溝の底で環濠の肩を確認した。南端の近世の穴でも東端を確認した。北区は環濠の掘削。最上層の黒色土の掘削を終える。
- 8月4日 南区は環濠部分に設定したトレンチを拡張した。西端溝の断面図作成。北区は環濠の掘削。ミニチュア土器出土。
- 8月5日 南区は西端、南端の溝の図面作成。北区は環濠掘削。
- 8月6日 南区は西端溝掘削。南端の溝の一部を残してほぼ掘り終える。北区は環濠の西端に新たにトレンチを設定した。貝層の貝殻を採取した。拡張区は、環濠の南肩を探すがはっきりせず。
- 8月7日 南区、北区は環濠に設定したトレンチ内掘削。貝殻を採取した。
- 8月8日 北区の西側トレンチの掘削。土器が多量に出土。午後は見学会実施。
- 8月11日 昨日までの雨のため、屋外作業中止。館内において第50次調査の出土遺物・貝殻の水洗作業。
- 8月12日 雨天により屋外作業中止。第50次調査の出土遺物水洗作業。
- 8月13日 南区は濠の掘削。北区は環濠内出土遺物の取り上げ。拡張区は濠に設定したトレンチの掘削。北肩から壁面を検出。
- 8月14日 南区は清掃。北区は西トレンチ遺物取り上げ。拡張区は濠の南肩を確認。
- 8月15日 貝層のブロックサンプリング。市民参加最終日。
- 8月17日 平面図、断面図作成。
- 8月18日 平面図、断面図作成。
- 8月19日 平面図、断面図作成。
- 8月20日 竈部分の平面図作成。



第23図 市民見学会 8月8日



第24図 作業後のミーティング 8月1日

3 遺構と遺物

(1) A区の遺構 (第25～28図・写真図版9～13)

今回検出した遺構は、昨年検出した遺構を再度発掘した関係から、弥生時代、近世～近代、太平洋戦争中、戦後の時期があり、小穴、溝・濠、土坑、竈、コンクリート造枡、玉石敷きコンクリート打設面（池）がある。

P110・111・113～116

調査区西端で検出した。前年度第49次調査の攪乱坑の底部分に位置する。いずれも近現代の小穴である。

SD02 (写真図版9-3・11-6～8)

調査区北側で検出した濠(外濠)である。前年度第49次調査に引き続き検出、掘削を行った。濠肩ははっきりと検出でき、中央付近と西側でトレンチ状に掘り下げた。土器のほか、多量の貝殻が出土した。土層断面の観察から貝層は北側から濠内に廃棄された状況であった。

SD06 (写真図版12-5・6)

調査区南側、前年度第49次調査で検出した通信ケーブル線埋設溝である。東側拡張部約5mを新規に掘削した。

SD08 (写真図版10-6・11-1～5)

調査区南側、前年度第49次調査で検出した濠(内濠)である。SD02と異なり、埋土の上位は地山土が多く、土塊として埋まっており、検出が困難を極めた。2か所でトレンチ状に深く掘り下げた。土層断面の観察から大きく2層に分層できる。南側から埋められた後、北側半分が溝状にあいていた時期があったか、幅を縮小して機能していた時期があった様相を示している。その後北側から埋められたようである。

SD101 (写真図版10-1・2・4)

調査区南側西端で検出した。検出位置からSD01と関連する可能性が高いが、幅2.4mと幅広である。戦後の磁器出土。

SD102 (写真図版10-3)

調査区南端で検出した。埋土は褐色土で、地山ブロックが多く含まれている。近世初期の染付磁器出土。

SD103

調査区北側で検出した。検出長1.6m、幅0.6mである。埋土は暗茶色シルトで、地山土を多く含む。

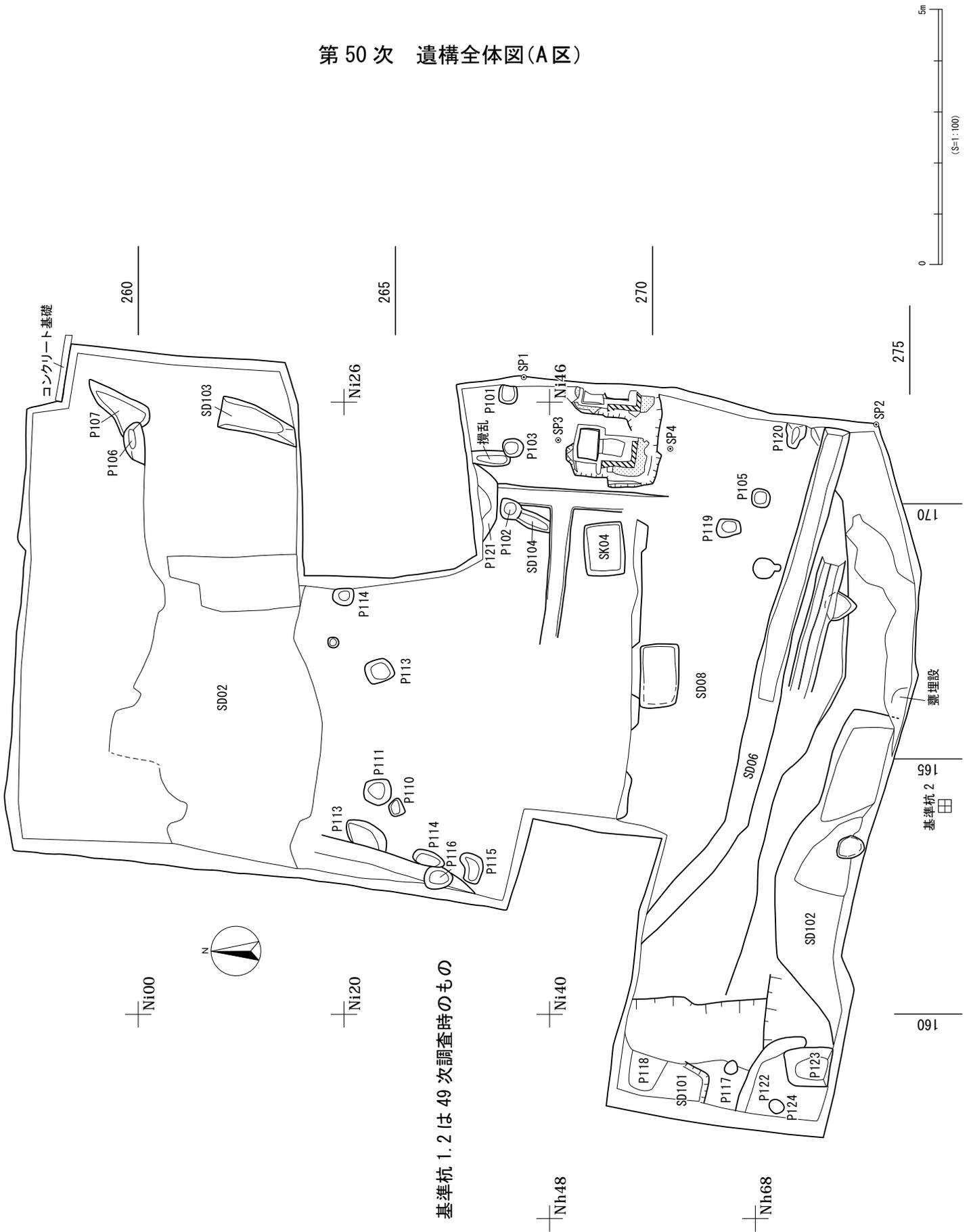
竈 (第27・28図・写真図版12-1～4)

東側拡張区で検出された。東西に並んだ2基のうち、1基は調査区東壁に半分がかかっている。北側一辺内法0.58m×0.4mの長方形と、南側一辺内法0.4×0.3mの長方形に幅0.16mの炭がら入りセメントブロックを組んで構成されている。北側が0.07～0.08m低く造られており、焚口にあたる。表面はセメントモルタルが約0.5cmの厚さで塗られている。焚口正面(南側)には鉄板が取り付けられていた。煮炊きの鍋を置く方が南側にあたる。上部は壊されて、焚口下部は灰、上部は焼土、耐火煉瓦などが厚く堆積していた。掘り方底部には、ブロックに使用したセメントが垂れ流しの状態で固まっていた。

玉石敷きコンクリート打設面 (写真図版13)

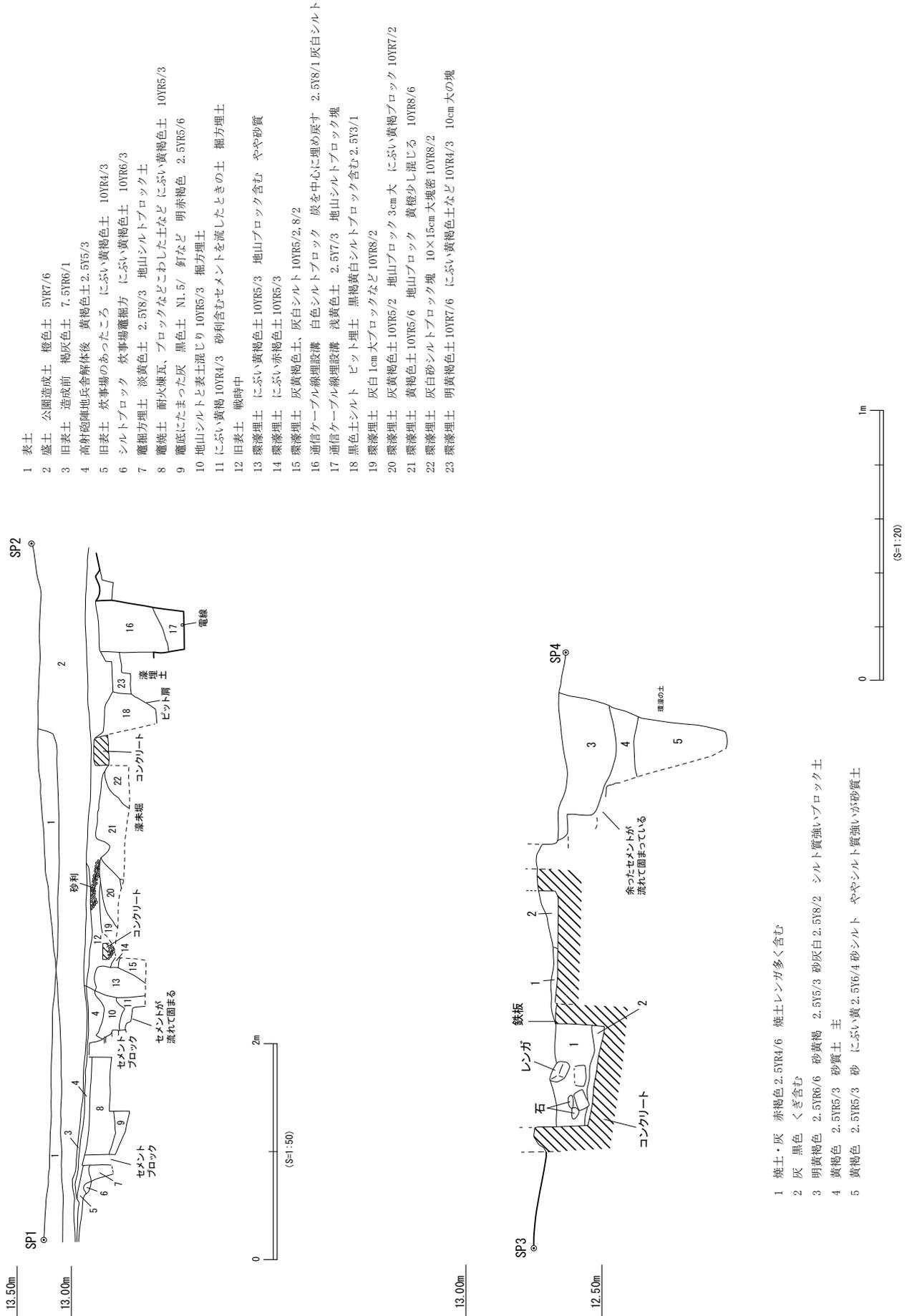
調査区南端で検出した。平たい河原石を敷き詰めコンクリートを打設している。南壁中央付近でコンクリートが立ち上がっており、その脇に常滑焼の甕が埋設されていた。したがって、この玉石敷きは、池の

第50次 遺構全体図(A区)

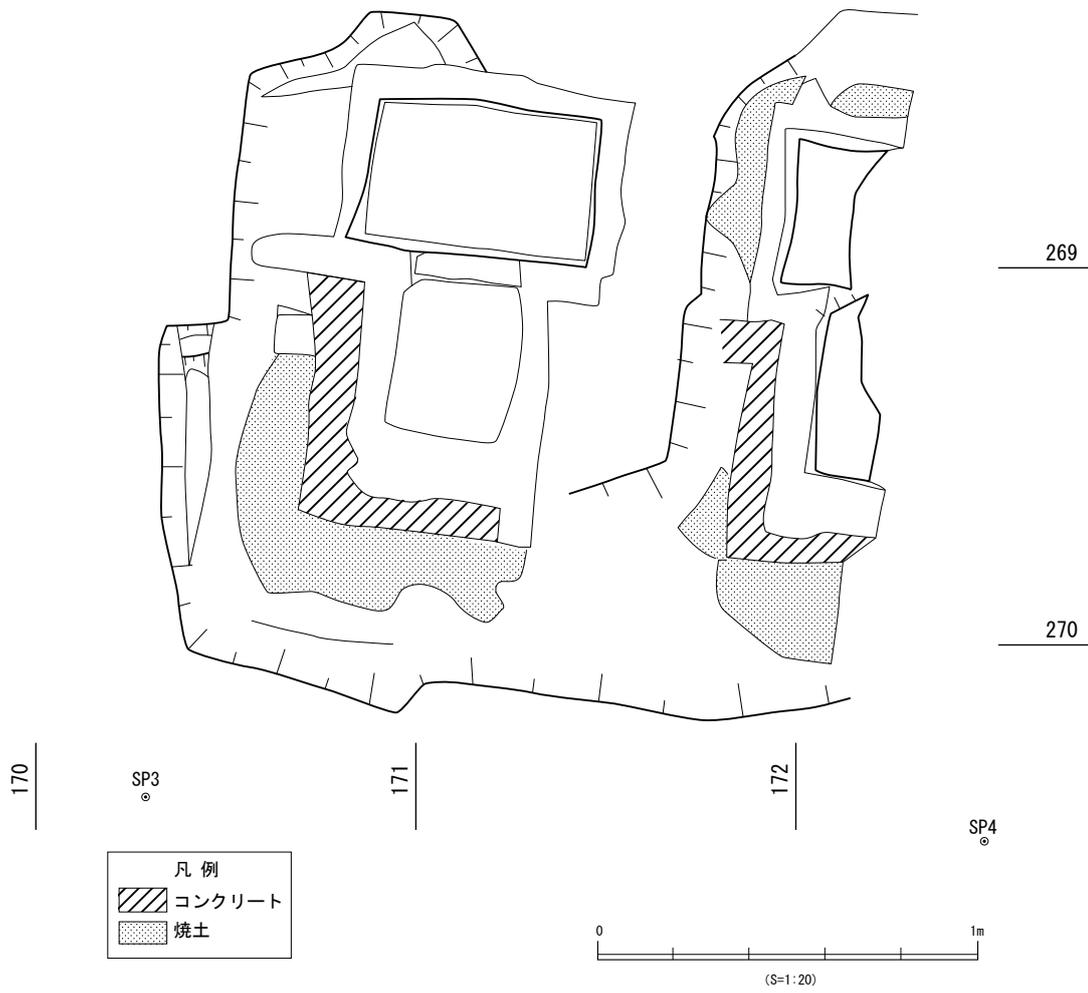


第25図 第50次遺構全体図 (A区)

第50次 土層図(A区 拡張区 東壁)



第26図 第50次土層図 (A区 拡張区 東壁)



第27図 第50次遺構平面図（竈）



第28図 竈

底に敷き詰められたものと推定される。戦後に建てられた家（神宮）の池であろう。

(2) A区の遺物（第29・30図・写真図版26～28）

コンテナ数12箱あり、内訳は土器類10箱、電線ケーブル線1箱、竈の耐火煉瓦等1箱である。

P110

磁器の蓋がある。時期は昭和戦後か。ほかに磁器、ガラス製品がある。

P111

写真図版28-7は磁器の碗で、写真図版28-8は歯ブラシで「資生堂シセイ歯刷子」とある。ほかに陶器、針金、アルミ製銭貨？がある。

P113

弥生土器、陶器の小片がある。

P114

常滑産赤物の甕がある。

P119（第30図）

40は弥生土器壺の底部である。鉄釘、コンクリート片がある。弥生土器はSD08の混入と考えられる。

SD01（第30図）

28は山茶碗・碗の底部である。高台端部に粗殻痕がある。27は常滑焼甕の口縁部である。29は須恵器坏身である。にぶい黄橙色を呈している。底面に糸切痕がある。SD02を掘り込んでいることから弥生土器が多い。23は壺の底部である。底面が少し窪む。24は台付甕の脚部である。体部との接合面で剥離している。端部がわずかに内側に折れている。25は高坏の口縁部である。26は高坏の脚部である。25、26は外面が磨滅している。このほか陶器小片がある。

SD02（第29図）

弥生土器 2は壺である。口縁部を体部の内側に入れ接合している。体部はヘラミガキ、内面ヘラケズリ調整を施す。3、4は短頸壺である。4は体部の一部を欠損するが完形品である。7は小型壺である。1は壺の口縁部である。1、2ともに口唇部を外方へ折曲げた後上方へつまみ上げて成形する。5、6、は壺の体部である。5は楯描直線文、波状文を交互に施す。6は山形文を施す。8は小形の壺（ミニチュア土器）である。現存高2.5cmである。9、10、11、12、13、14、15は壺の底部である。10は外面に赤彩されている。17、20は甕の口縁部である。20は受口状口縁で端部外面に刺突文を施す。18、19は台付甕の脚部である。18はやや内彎して下方へのびる。粗いハケ調整を施す。19は外方へ開く。21は高坏の坏部、25～32は高坏の脚部である。25は楯描直線文を施す。28は透かし孔が2段三方にあげられている。30、32は三方透かし孔のうち2孔が確認できる。22は坏部が椀形になる。23、24、33は有稜高坏で、23、24は坏部、33は脚部である。16は甕の口縁部である。外面に刺突文を施す。34は器台か。口縁端部は粘土を足し、つまみ上げて成形している。

時期はⅥ様式（山中式）のもの（1、2、19、21）、Ⅶ様式（欠山式）のもの（16、18、20、22、23、24）がある。

SD03

弥生土器の小片7点が出土。壺の小片3点は赤彩される。

SD06 (第30図)

43は電纜（通信ケーブル線）の一部である。鉛管の内側に紙に覆われて銅線が入っている。42は弥生土器甕の口縁部である。SD08からの混入と考えられる。

SD08 (第30図)

弥生土器 埋土中に貝殻が含まれている関係からか、器壁面の施文や調整痕がよく残っているものが多い。1、2は壺の口縁部である。1は端部がわずかに垂下する。頸部に沈線が巡る。P119出土破片2点と接合した。2は外反する。3は直口壺の口縁部である。端部に沈線が巡る。5は、壺の頸部から体部である。文様や調整痕がはっきり残る。頸部に櫛描直線文と刺突文を施す。6、7は壺底部で、6は体部に、7は体部から底部にかけて黒斑がある。13、14は甕の口縁部である。端部に刺突文を施す。外面ハケ、内面ヘラケズリ調整を施す。16、19は台付甕の脚部である。16は外面ハケ調整、19は外面ヨコナデ調整を施す。17は台付甕の脚か。端部が丸く収まる。8、9は高環の口縁部である。8は外面に波状文を施す。11は高環の脚部である。円形透かし孔が2か所確認できるが本来は三方透かしである。外面ヘラミガキ調整を施す。10は高環の脚部。端部外面に直線文を施す。山中式。18は鉢の口縁部から体部である。4は台付鉢の体部である。外面に赤彩されている。12は蓋である。端部に小孔が焼成後穿たれている。本来は二孔1対の紐用の孔である。内外面ヘラミガキ調整を施す。15は残存高10.3cmあり、小形の台付甕（ミニチュア土器）である。外面ハケ、内面ヘラケズリ調整を施す。

時期は、甕や高環の特徴からVI様式（山中式）と考えられる。

土製品 20は紡錘車か。底面は平滑である。21は用途不明である。長さ3.4cm、直径1.6～1.85cm。重さ9.39g。22は器形、用途ともに不明である。胎土中に1mm程の砂粒を多く含む。

SD101 (第30図)

33は弥生土器壺底部である。SD08からの混入と考えられる。ほかに磁器湯呑（時期は昭和戦後期か）、戸の鍵、鉄釘がある。

SD102 (第30図)

遺構の一部がSD08と重複するためSD08からの混入した弥生土器が多い。38は鉢口縁部である。39は、台付甕の脚部である。体部との接合面で剥離している。41は甕口縁部である。口縁端部に刺突文を施す。3点とも良好な状態である。ほかにコンクリート、炭の固形物（燃料）がある。

SD103 (第30図)

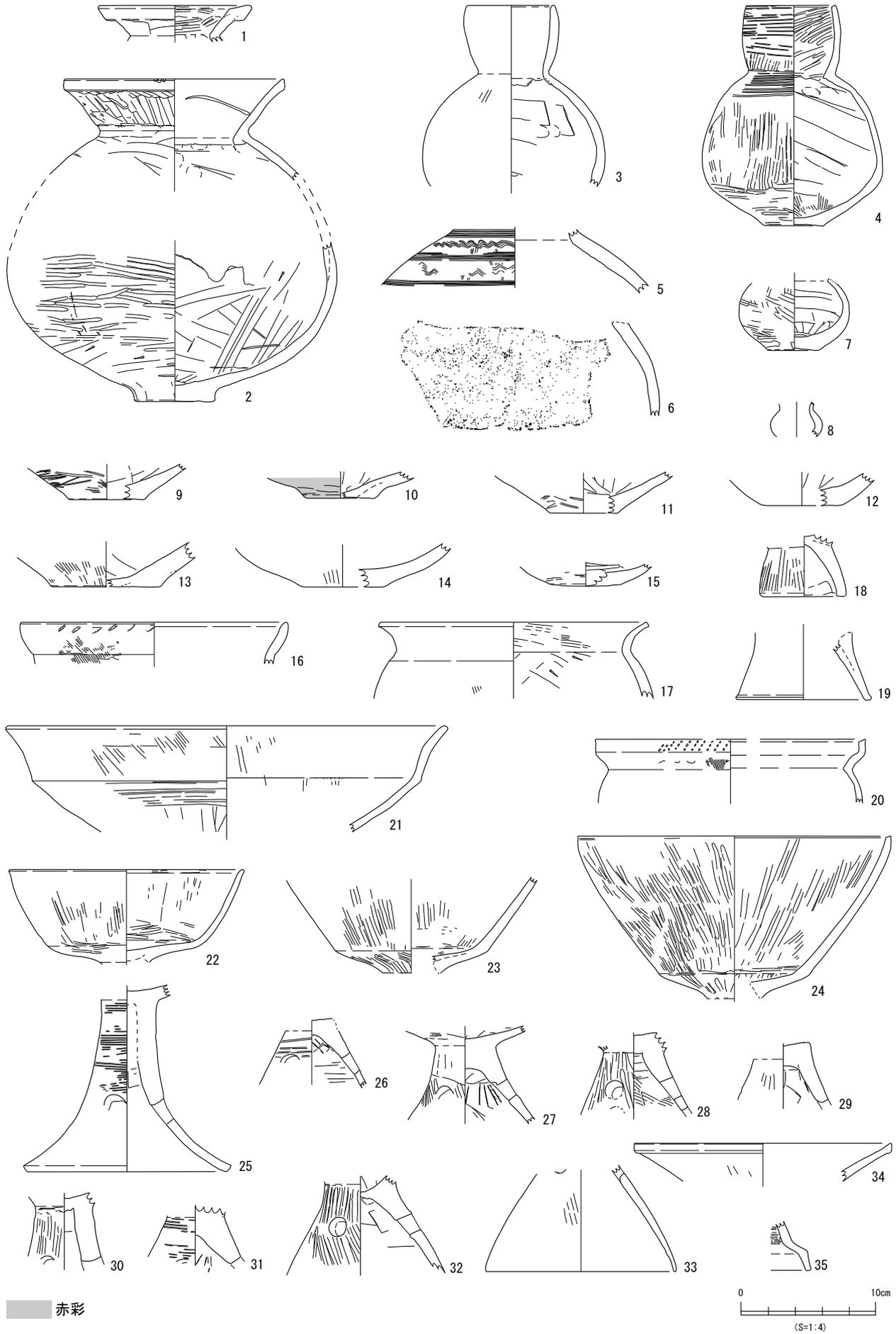
SD02を掘り込んでいるため、弥生土器が多い。30は台付甕の脚部である。外反してふんばった形状である。31は高環の脚部である。胎土に雲母が含まれている。32は、高環口縁部である。外反して端部は丸くおさめる。VI様式（山中式）。3点とも外面が磨滅している。ほかに陶器、磁器、ガラス、針金がある。

表土・検出ほか (第29・30図)

須恵器 第29図－35は、台付直口壺の脚である。SD02検出中の出土である。

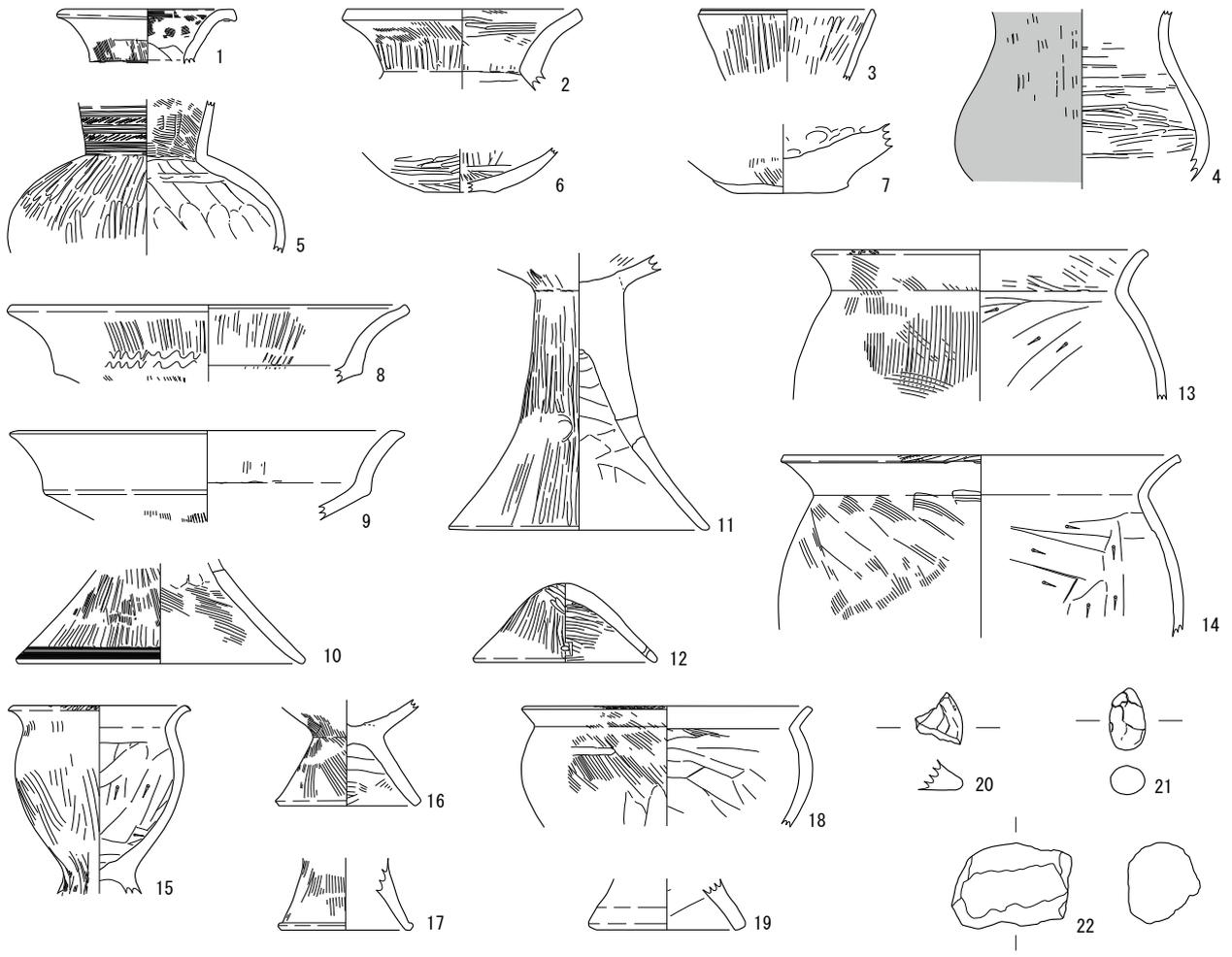
弥生土器 第30図－34は、壺口縁端である。垂下外面は5条の沈線、上面に矢羽根状刺突文が施文される。検出中出土した。35は壺口縁部である。器壁が薄い。36、37は、壺底部である。36は外面に黒斑がある。37は外面の調整は不明であるが、内面にヘラナデ痕が残る。排土中より採集した。

SD02 弥生土器・須恵器

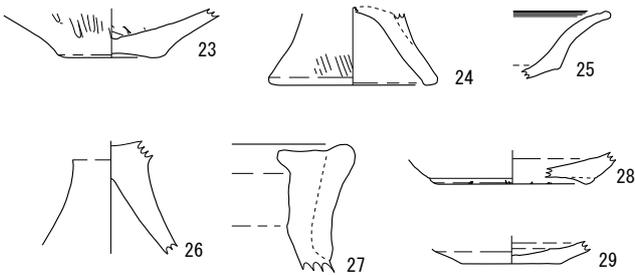


第29図 遺物図 (3)

SD08



SD01



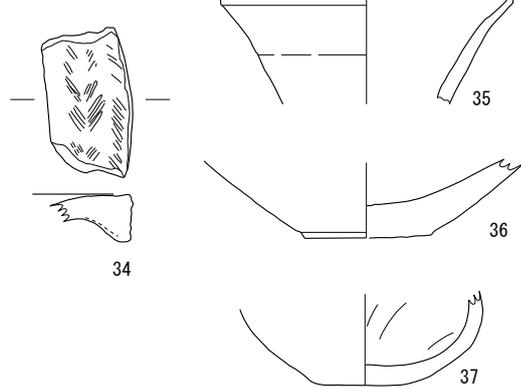
SD103



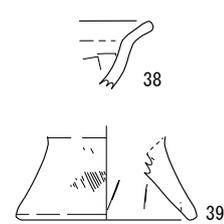
SD101



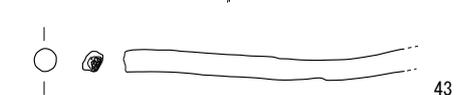
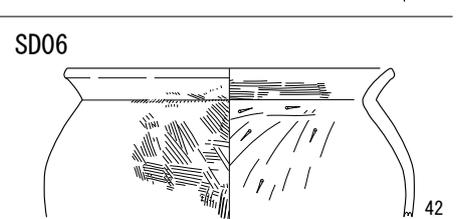
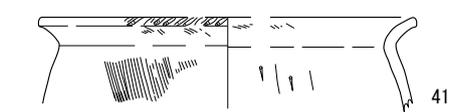
表土・検出ほか



SD102



P119



赤彩

0 10cm
(S=1:4)

第4章 第51次発掘調査

1 調査の目的

本年度は、「弥生時代の環濠の実態を明らかにする」を調査のテーマに掲げて取り組む3年目である。同一か所での調査であり、北側に掘られた濠の形状や規模についてさらに明らかにしていくことを目的とした。

2 調査の経過

- 7月13日 テント設営。保護砂除去。
- 7月14日 保護砂除去。北側半分は遺構面が出る。南区は除草。本書では混乱を避けるため51B区とする。
- 7月15日 保護砂除去。3班体制で調査。1・2班は昨年までの調査区(A区)。3班は公園の南方に南区(51B区)を設定し、表土掘削を行う。草の根除去。
- 7月16日 1班は外側の環濠(SD02)の範囲を確定させる作業。環濠内の掘削。2班は埋戻し土の除去。西部ではSD101・102、SK102・103の遺構検出。3班は表土掘削。
- 7月17日 1班は、西側の貝層付近から完全な形になりそうな壺や高坏が出土。出土状況の写真撮影。2班は埋戻し土の除去。トレンチ掘削。3班は、表土掘削。環濠と思われる幅1.7mの溝検出。
- 7月20日 台風、大雨警報により作業中止。南側水抜き。
- 7月21日 朝、雨。水抜き、泥取り。
- 7月22日 1班は、環濠(SD02)の土層断面の観察。北側から土が流入していることを確認。2班は、環濠(SD08)の東部掘り下げ。3班は環濠の検出状況の写真撮影。南側に新たな調査区(南2区)を設定する。本書では51B2区とする。
- 7月23日 1班は環濠(SD02)の東西両端で深掘り。中央部では上位からすこしずつ掘り下げ。台付甕、パレス壺など出土。2班は環濠(SD08)のトレンチ掘削。SD101の脇にトレンチ設定。3班は、環濠と重なる攪乱(K1)を掘削。
- 7月24日 1班は環濠(SD02)の掘削。北東側から埋まった状況を確認。2班は環濠(SD08)の掘削。トレンチ3本設定して掘り下げる。3班は、近現代の溝や攪乱の掘削。環濠SD01の掘削。
- 7月27日 水抜きと泥取り。環濠の掘削。環濠の肩部の検出は、地山なのか埋土に地山の崩落土が入っているのか見極めが困難。2班はSK102とSD08西側トレンチの掘り下げ。3班は51B1区で環濠の掘削。51B2区の表土掘削。
- 7月28日 1班は環濠(SD02)の掘削と出土土器の図化作業。2班は環濠内トレンチの掘削。東側・中央トレンチでは検出面から約1.5m掘削。地山由来の粘土質の土が埋土。環濠の内側の壁が崩落した可能性が高い。3班は51B1区で環濠の掘削。51B2区は攪乱部分の掘削終える。
- 7月29日 1班は環濠(SD02)の西側と北側のトレンチを掘削。貝層の掘削により、北西側から南東側に向かって堆積したことが判明した。2班は環濠(SD08)のトレンチを掘削。検出面から約1.8mまで掘削。地山由来の粘土質の土が多く、大きな塊として埋まった可能性が高い。遺物もほとんど無く、SD02と対照的。3班は環濠の掘削。弥生土器が出土。51B2区は幅約0.7mの溝検出。

- 7月30日 1班は環濠（SD02）の西側トレンチの掘削。2班は環濠（SD08）の中央と西のトレンチを掘削。東側トレンチ断面写真撮影、実測図作成。3班は51B1区で環濠の掘削。51B2区は溝SD02の掘削。木炭の層やタイル片出土。
- 7月31日 1班は環濠（SD02）の西トレンチ、北トレンチの土層断面を観察しながら掘削。2班は環濠（SD08）の東トレンチの土層図作成。SK102、103の掘削始める。SK102B検出。SK102A→SK102B→SK103の順番に掘られたことが判明する。3班は、51B1区で環濠の分層。51B2区は環濠の土層観察のため、サブトレンチを掘削。SD02掘削。
- 8月3日 1班は環濠（SD02）北トレンチの掘削を進める。やや南西方向に曲がっていることが判明。2班は環濠（SD08）の掘削。3班は、近現代の排水溝K1を完掘。環濠、SD02掘削。
- 8月4日 1班は環濠（SD02）の掘削。貝層部分を掘りあげる。2班は環濠（SD08）の掘削。壁の立ち上がりを確認するため、壁際を掘削。3班は環濠の掘削。SD02完掘。
- 8月5日 1班は環濠（SD02）の掘削。西側のトレンチでは貝層の下の黒色土から大型の壺出土。北側のトレンチではミニチュアのパレススタイル壺や瓢形壺が出土。2班は環濠（SD08）の掘削。壁の判断が難しい。3班は環濠の掘削。サブトレンチで濠底部まで掘削。SD02完掘し、写真撮影。
- 8月6日 1班は環濠（SD02）の掘削。底付近まで掘り進める。舟形土製品出土。2班は環濠（SD08）の掘削。3班は環濠の掘削。市民見学会の準備。
- 8月7日 午前、市民見学会の準備。午後、市民見学会。C区は環濠の掘削。埋土下層から土器出土。
- 8月10日 1班は環濠（SD02）の掘削。トレンチの幅を広げる。2班は、写真撮影の準備。3班は環濠の掘削。
- 8月11日 1班は環濠（SD02）の掘削。図化作業に入る。2班は、写真撮影。中央トレンチでは断面図作成。3班は環濠の掘削。濠底に到達する。土器出土。
- 8月12日 1班は環濠（SD02）の掘削、平面図の作成。2班は土層図の作成。3班は環濠の掘削。
- 8月13日 1班は環濠（SD02）の掘削。サブトレンチを入れて濠底を確認する。2班は土層図の作成。3班は51B1区で環濠埋土の分層。51B2区は土層断面の写真撮影。
- 8月14日 1班は環濠（SD02）の西トレンチ写真撮影。道具の洗浄、テント片づけ。
- 8月17日 3班は清掃、写真撮影。
- 8月18日 3班は土層断面図作成。
- 8月23日 3班は土層断面図作成。



第31図 市民見学会 8月7日



第32図 作業後のミーティング 8月11日

3 遺構と遺物

(1) A区の遺構(第33～41図・写真図版15～18)

一昨年、昨年に続きほぼ同じ位置を調査した。今回新たに検出した遺構は、SD104、SK102～SK104である。

SD01

調査区北西隅で検出した。第49次調査で検出したが、本調査では調査区西壁で溝の南半部の土層を記録した。3層に分層でき、上層はにぶい黄褐色土、中層は褐色土、下層は灰褐色土で灰色土と茶褐色土が斑状に混じる。

SD101

調査区南西隅で検出した。第50次調査で検出したが、本調査では、調査区南壁、西壁、北壁で土層を記録した。埋土は大きく3層に分層でき、上層は地山土をブロック状に多量に含む土、2層は褐色土、3層は褐色土、淡褐色土である。東西検出幅2.5m以上、底面幅1.7m以上、深さ0.7mである。1層は人為的に埋めたものと思われる。堆積土の状況から、台地を削って切通しにした道の跡と推定され、3d・3e層が路面であったと思われる。地籍図と現代の地図を重ねた図(第5図)をみると、字櫻田と字天神の字境界に位置する南北道が該当する。この道は、現在の道路と同様に北側の開析谷(田)に向かって下り、開析谷を通る東西道につながっていた。

SD102

調査区南端中央で検出した。第50次調査で検出したが、本調査では、調査区南壁で土層を記録した。埋土は大きく3層に分層でき、地山ブロック土を含む。東から埋めた状況である。東西4.8m以上、幅0.45m以上、深さ1.0m、地山面からは深さ0.35mである。土坑状の遺構である。

SD104

調査区北東端で検出した。検出長4.3m、幅0.6m、深さ0.14～0.25m、底面は北に下がる。

SK102

調査区南西端で検出した。地山面で検出したが、調査区南壁の土層観察から、SD101と同様に表土層下から掘り込まれ、SD101に切られる。埋土は、2層に分層できる。上位層は淡褐色土、下位層は褐色土である。直径1～10cm大の地山ブロック土を大量に含む。

SK103

調査区南西端で検出した。埋土は淡橙褐色土である。SK102に切られる。

SK104

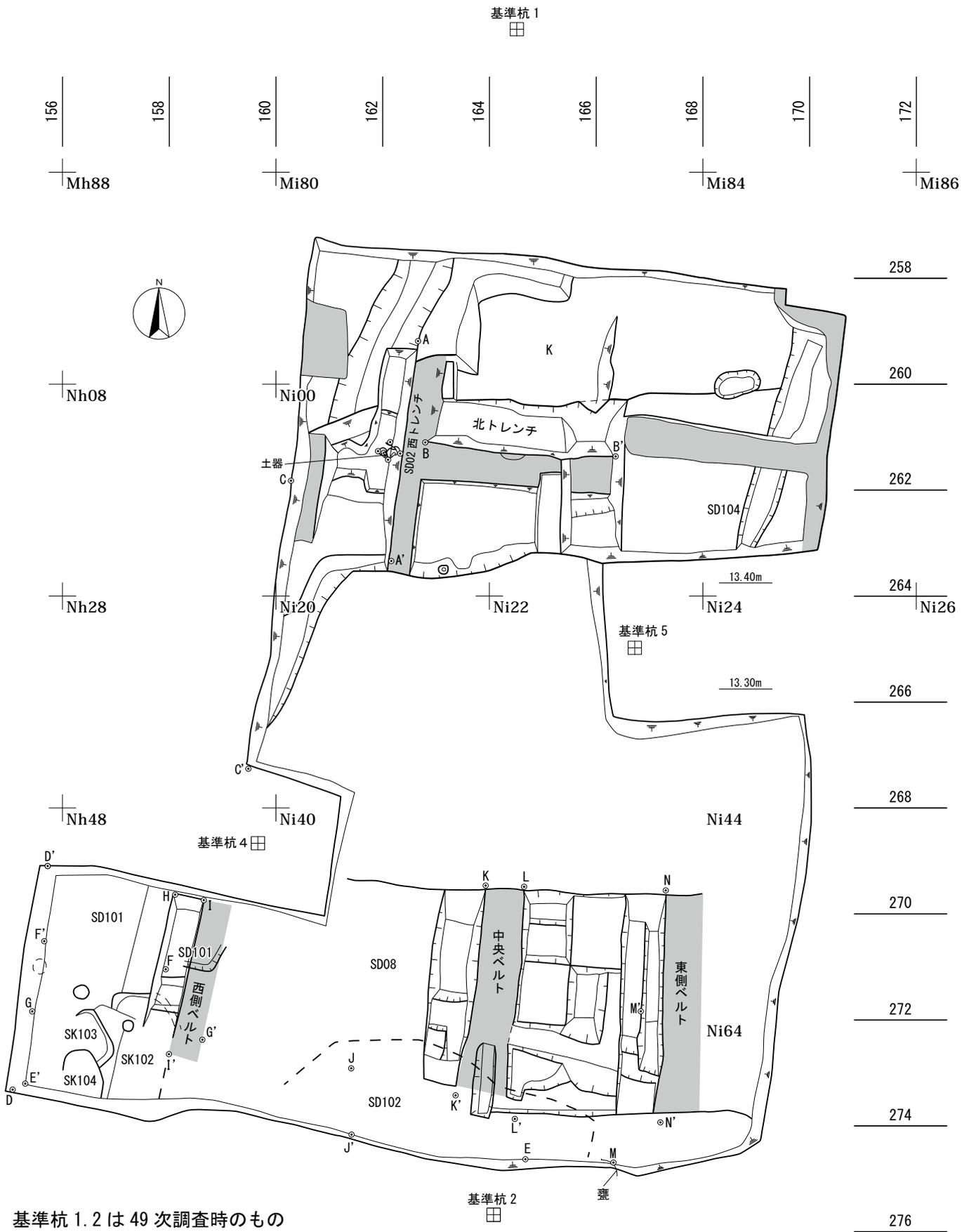
調査区南西端で検出した。上面はSD101に切られる。

SD02

調査区北側で検出した濠(外濠)である。昨年に引き続き検出、掘削を行った。遺構の規模が大きいいため、堆積土層を確認しながら掘削を進めるため、濠に直交して西トレンチ、東トレンチ、平行して北トレンチを設定して、それぞれ西区、中区、東区と分けて掘削した。

西トレンチでは、V字形の濠断面を把握した(第38図)。底面の標高は、8.76mである。その土層堆積は、大きく4層に分層され(I～IV群)、さらに細分される。IV群は、最初に堆積した土層で、下層(15～17層)はにぶい黄褐色土、中層(14層)は弥生土器を含む。上層(11～13層)は褐色土ないし黒褐色土で、弥生土器を含まない。上、中層は北側からの流入土である。III群は南側に堆積した土層(8～10層)で、

第51次 遺構全体図(A区)

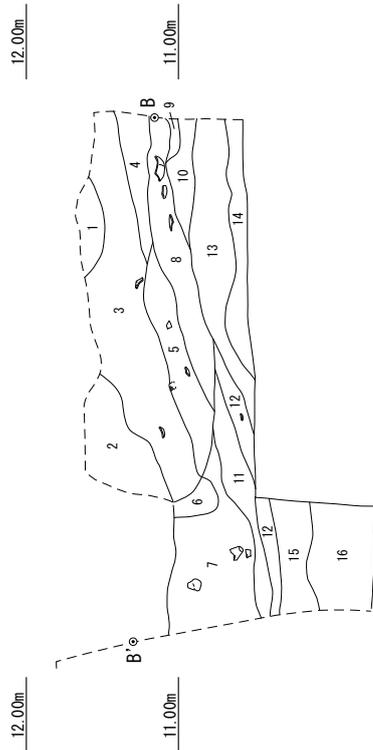


基準杭 1. 2 は 49 次調査時のもの

第33図 第51次 遺構全体図 (A区)

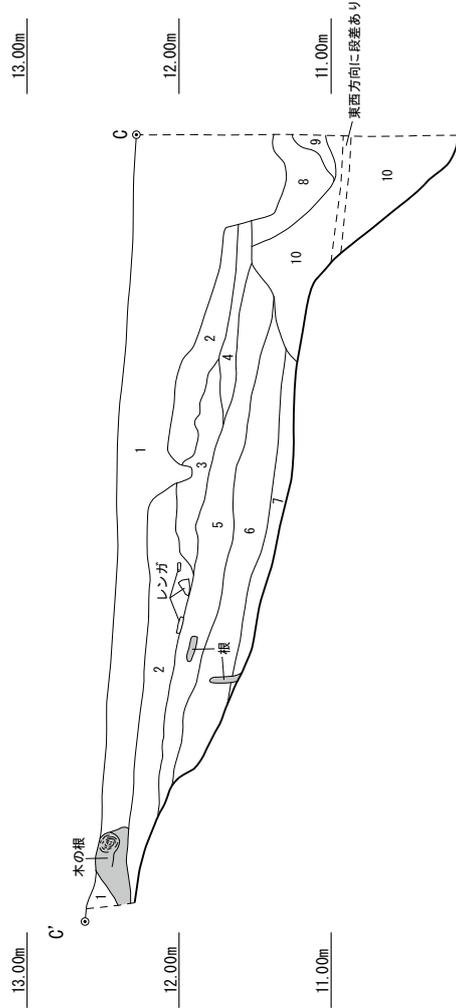
第51次 土層図(A区 北半西壁・SD02北トレンチ)

SD02北トレンチ

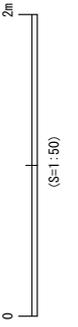


- 1 にぶい黄褐色土 10YR5/4 細粒砂 黒褐色土が3%混ざる
- 2 黒褐色土 10YR3/2 細粒砂 黄褐色地山ブロック1%混ざる
- 3 西トレンチ東壁断面の3層
- 4 西トレンチ東壁断面の5層
- 5 暗褐色土 10YR3/3 極細粒砂 貝殻を30%程度含む 弥生土器をやや多く含む
4と同一層の可能性あり 貝・土器の多少で区別
- 6 黒褐色土 7.5YR3/2 極細粒砂～シルト 黒み強くシルトの固まりになる攪乱
- 7 暗褐色土 10YR3/4 極細粒砂 長径1cm以下の炭を1%含む ※小型S字型など出土
- 8 西トレンチ東壁断面の6層
- 9 褐色土 10YR4/4 極細粒砂 長径2cm以下の黄色灰色地山ブロック混ざる 東壁断面の6層
- 10 西トレンチ東壁断面の6層
- 11 灰黄褐色土 10YR4/4 極細粒砂 長径5mm以下の炭、地山ブロックを含む
- 12 にぶい黄褐色土 10YR6/3 極細粒砂～シルト 地山ブロックの再堆積
- 13 褐色土 10YR4/6 極細粒砂 長径1cm以下の地山ブロックが斑状に混ざる(遺物なし)
- 14 13と黄褐色土 2.5Y5/4 中粒砂が混ざる 地山の再堆積
- 15 褐色土 10YR4/4 細粒砂～極細粒砂 シルト質地山ブロックを1%含む
- 16 にぶい黄褐色土 10YR4/3 極細粒砂 弥生土器をわずかに含む

西壁



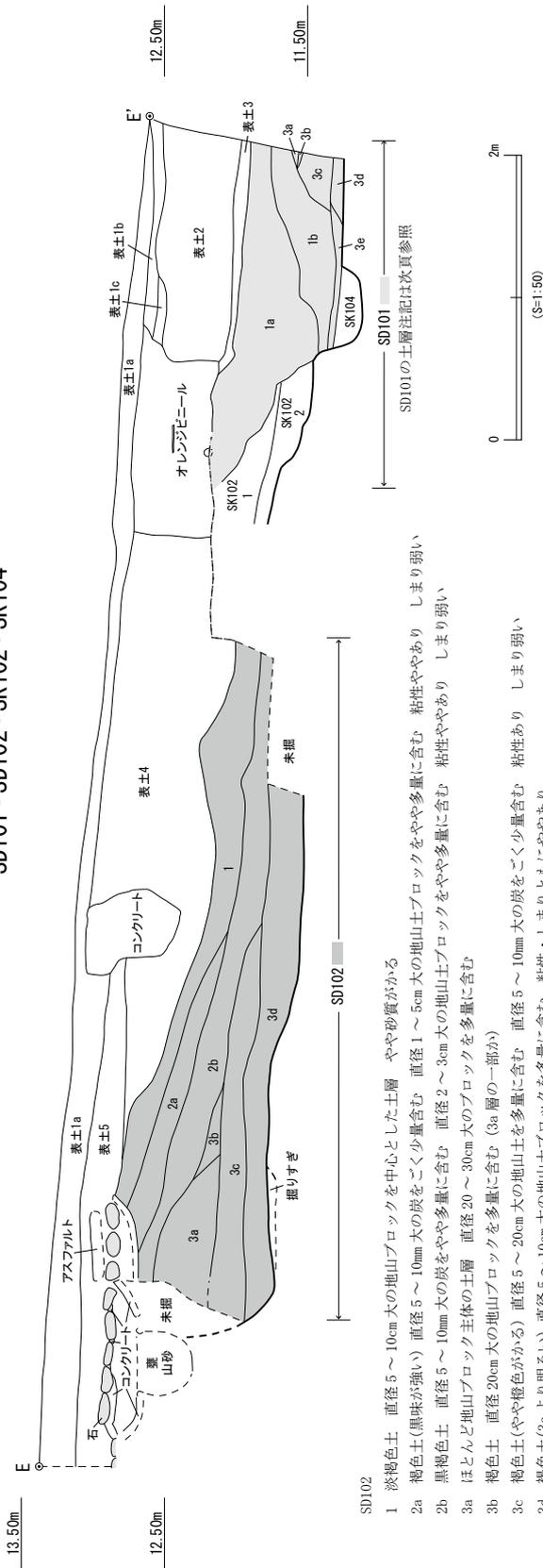
- 1 オリーブ褐色土 中粒砂 2.5Y4/4 (現代の攪乱)
 - 2 にぶい黄褐色土 中粒砂 10YR5/4 (近現代の攪乱)
 - 3 にぶい黄褐色土 細粒砂 10YR6/3 (近現代の攪乱)
 - 4 にぶい黄褐色土 細粒砂 10YR7/2 鉄分斑状に混じる(近現代の攪乱)
 - 5 にぶい黄褐色土 細粒砂 10YR4/3 近世遺物含む(SD01埋土)
 - 6 褐色土 極細粒砂 7.5YR4/4(SD01埋土)
 - 7 灰褐色土 極細粒砂 7.5YR4/2 灰色土と茶褐色土 斑状に混じる(SD01埋土)
 - 8 黒褐色土 極細粒砂 7.5YR3/1 弥生土器多量に含む(SD02埋土)
 - 9 黒褐色土 極細粒砂 10YR3/2 貝を多量に含む(貝層) (SD02埋土)
 - 10 にぶい黄褐色土 極細粒砂～シルト 10YR5/4(SD02埋土)
- ※10は分層可能だがしていない



第34図 第51次土層図 (A区 北半西壁・SD02北トレンチ)

第51次 土層断面図 (A区南半 南壁)

SD101・SD102・SK102・SK104



SD102

- 1 淡褐色土 直径5～10cm大の地山ブロックを中心とした土層 やや砂質がかかる
- 2a 褐色土(黒味が強い) 直径5～10mm大の炭をごく少量含む 直径1～5cm大の地山土ブロックをやや多量に含む 粘性ややあり しまり弱い
- 2b 黒褐色土 直径5～10mm大の炭をやや多量に含む 直径2～3cm大の地山土ブロックをやや多量に含む 粘性ややあり しまり弱い
- 3a ほとんど地山ブロック主体の土層 直径20～30cm大のブロックを多量に含む
- 3b 褐色土 直径20cm大の地山土ブロックを多量に含む (3a層の一部か)
- 3c 褐色土(やや橙色がかる) 直径5～20cm大の地山土を多量に含む 直径5～10mm大の炭をごく少量含む 粘性あり しまり弱い
- 3d 褐色土(3cより明るい) 直径5～10cm大の地山土ブロックを多量に含む 粘性・しまりともにややあり

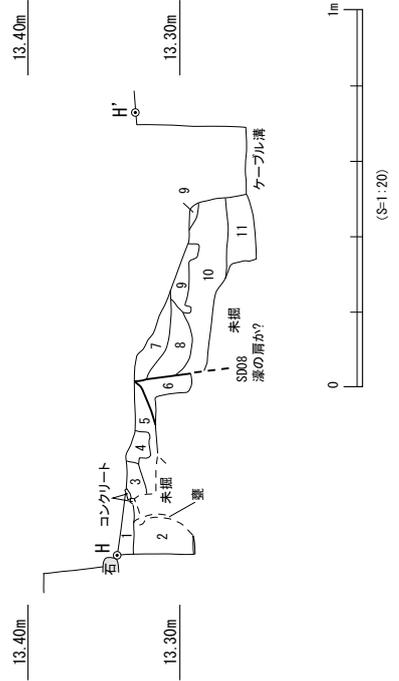
- 表土4 コンクリート、地山ブロックと混じる 礫乱土
- 表土5 褐色土(やや暗い) 直径1～2cm大の礫を少量含む 粘性・しまりともにややあり

SK102

- 1 淡褐色土(やや橙) 直径1～2cm大の地山ブロックを少量含む やや砂質がかかるがしまりあり
- 2 褐色土(やや灰 暗い) 直径1～10cm大の地山土ブロックを多量に含む 粘性・しまりともにあり

SK104埋土 褐色土(やや橙色がかる) 砂質で粘性・しまりとも弱い

南壁の池の甕～SD08掘り肩 南北アゼ

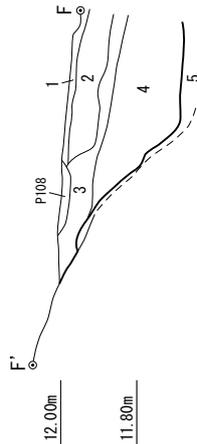


- 1 褐灰色土 10YR5/1～明赤褐色砂質土 5YR5/6 しまりなし 常滑甕をバツクしている
- 2 灰白色砂 N8/(花崗岩の風化砂) 最下層に松葉が1～2cmほど堆積
- 3 灰黄褐色砂質土 10YR5/2 堅くしまる 直径1～2cm大の地山粘土ブロックわずかに含む 池の細方埋土
- 4 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 堅くしまる 直径1cm大の地山粘土ブロックわずかに含む
- 5 浅黄緑シルト 10YR8/3～灰白色シルト 10YR8/1等のブロック土
- 6 灰白色粘質土 10YR8/2 地山と判断
- 7 灰白色粘質土 10YR8/2 ごくわずかに地山ブロック含む
- 8 灰白色土 10YR8/1～10YR8/2～黄緑シルトブロック土 10YR8/6
- 9 黒褐色粘質土 10YR2/3 堅くしまる 直径2cm大の地山粘土ブロックわずかに含む
- 10 灰白色シルト～粘質土 10YR8/1 堅くしまる ブロック土は含まない 一見地山
- 11 浅黄砂 5Y7/4 褐色粘質土 10YR4/4 黄土粘土 10YR8/6 等のブロック土 直径は5～10mm

第35図 第51次土層図 (A区南半 南壁)

第51次 土層断面図 (A区 SD101・SD102)

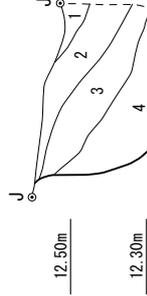
SD101ベルト北面



- 1 淡褐色土 直径1~2mm 大の炭化物粒をごく少量含む やや砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり
- 2 淡褐色土(やや黄味がかる) 直径2~10cm 大の地山土白色粘土をブロック状に多量に含む 粘性あり しまりややあり(3,4層より炭少ない)
- 3 褐色土(やや明るい) 直径5~20mm 大の炭化物を少量含む
- 4 褐色土(やや明るい) 直径5~20mm 大の炭化物を少量含む
- 5 白色粘土(3層より暗い) 直径5~20mm 大の炭化物を多量に含む

直径1~20cm 大の地山土ブロックをかなり多量に含む
粘性あるがしまりやや弱くやわらかい
P108 灰褐色土

SD102ベルト西面



- 1 淡灰褐色粘土 地山の粘土中心のブロック 粘性あり しまり弱い
- 2 褐色土(黒みが強い) 直径2~10cm 大の地山土粘土をやや多量に含む
- 3 褐色土(地山土ブロック中心の土層・赤みが強い) 直径1~30cm 大の地山土ブロックを多量に含む 粘性・しまりともややあり
- 4 褐色土(地山土ブロック中心の土層・白みが強い) 3層とよく似た土層か粘土が白色粘土中心 粘性強い しまりややあり

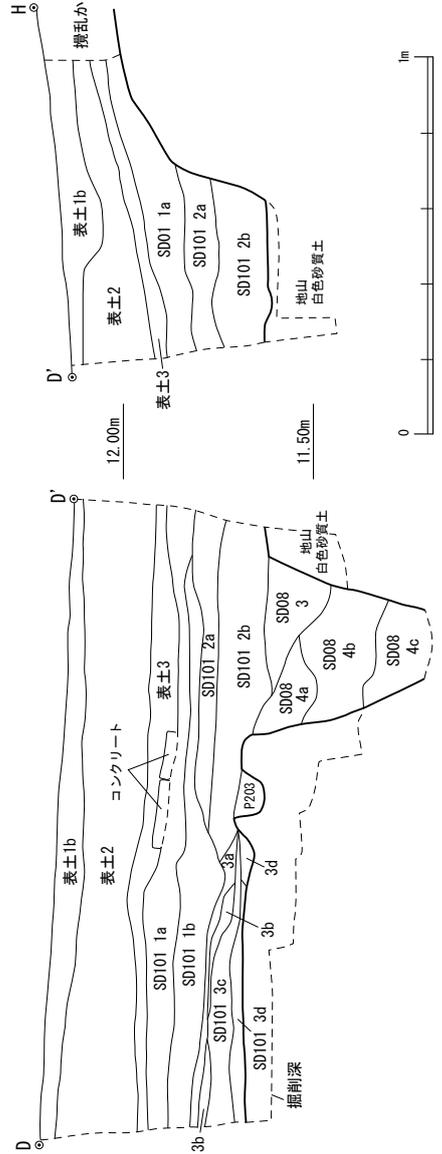
第36図 第51次土層図 (A区 SD101・SD102)

SD101ベルト南面

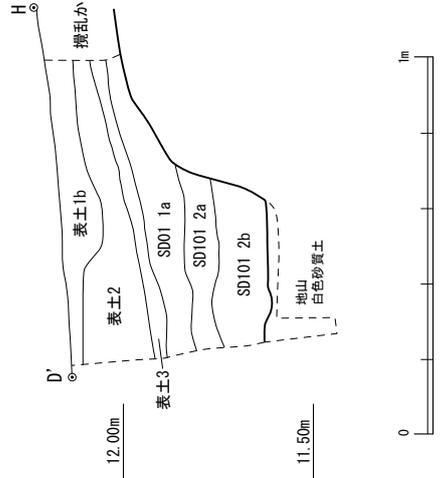


- 1 褐色土(やや明るい) 直径5mm 大の炭化物粒を少量含む 直径5~10mm 大の地山土ブロックを少量含む 粘性・しまりともにややあり
- 2 褐色土(やや灰色がかる) 直径1~2mm 大の炭化物をごく少量含む 粘性・しまりともにややあり
- 3 淡褐色土 直径1~5cm 大の地山土白色粘土・橙褐色砂質土などをブロック状にかなり多量に含む 粘性あり しまりややあり
- 4 淡褐色土(やや橙色がかる) 直径5~10mm 大の炭化物粒 直径1~2cm 大の地山土ブロックを少量含む やや砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり
- 5 淡褐色粘質土 地山の粘質土を中心とした土層
- 6 淡褐色土 4層とよく似ているが黒味が強い
- 7 淡褐色土 直径1~15cm 大の地山土ブロックを中心とした土層 粘性・しまりともにやや弱い 直径5mm の炭をごく少量含む
- 8 淡褐色土 直径5~10mm 大の炭化物をごく少量含む やや砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり 部分的に直径1~2cm 大の地山土ブロックを含む
- 9 褐色土 直径5~10mm 大の炭化物を少量含む 直径2~3cm 大の地山土ブロックをごく少量含む粘性・しまりともにややあり

南北土層断面 調査区西壁



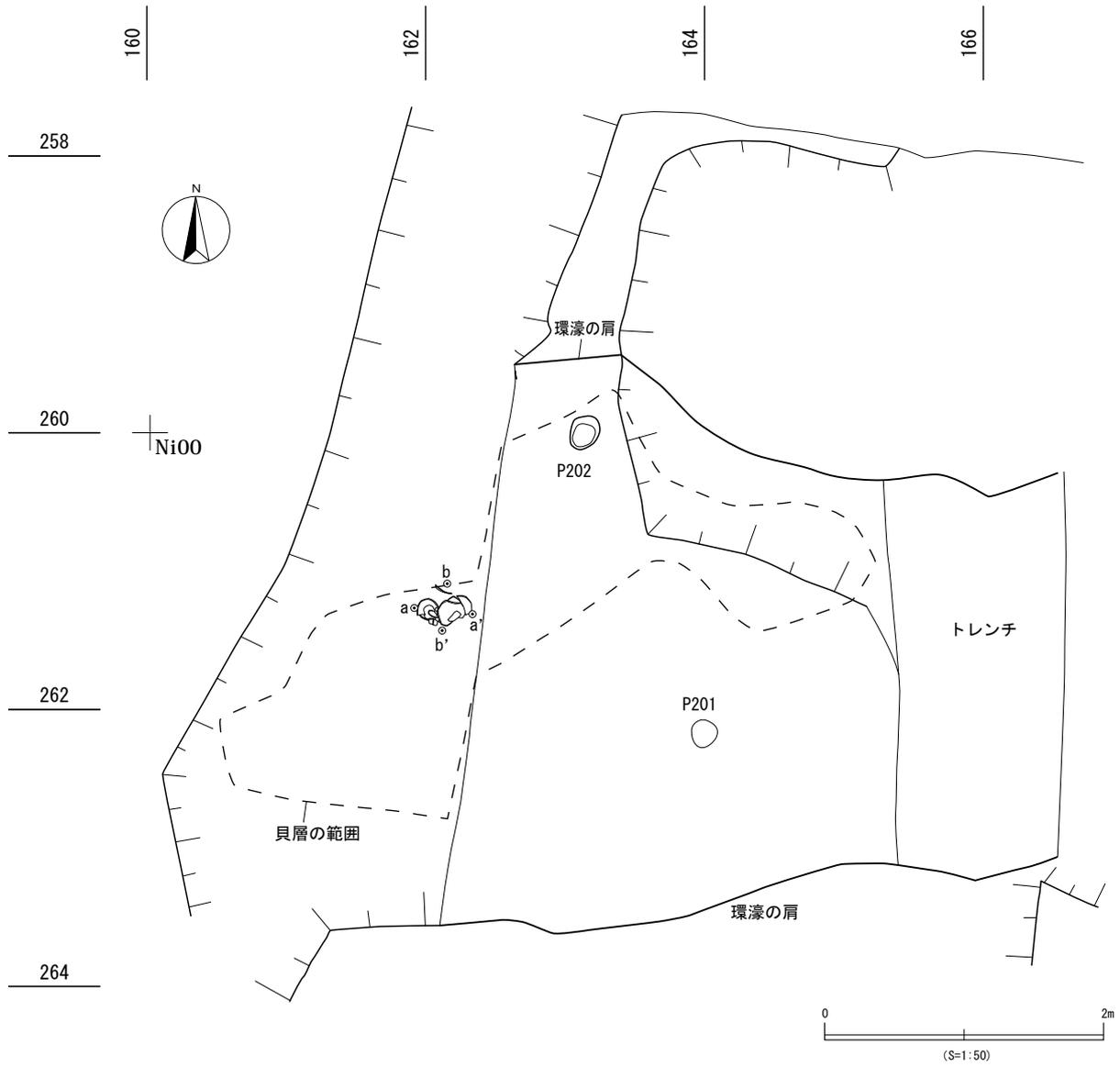
東西断面 調査区北壁



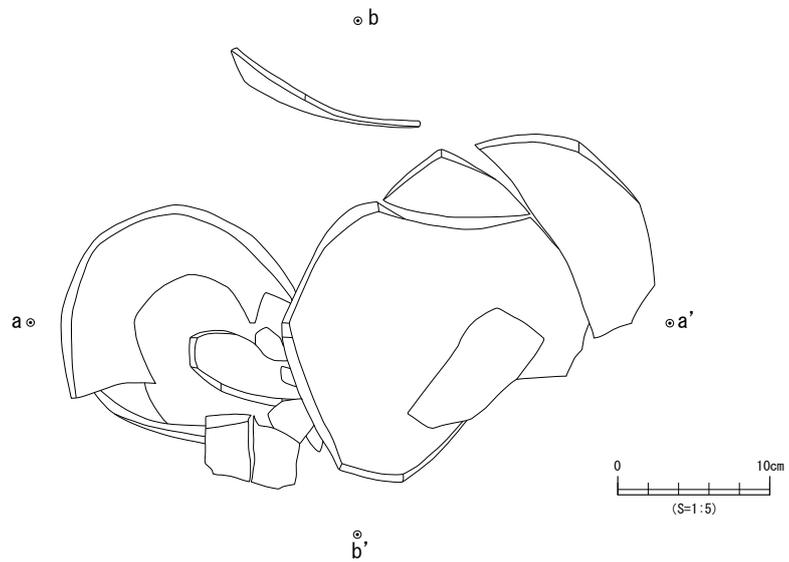
- 表土1 現状の表土 公園造成後の表土
 1a: 淡褐色土 部分的に造成土(八事層由来)や地山土ブロックを含む
 1b: やや黒味が強い淡褐色土を中心とした土層
 1c: 黒褐色土を中心とした土層
 表土2 90年代の公園造成時の客土 八事層由来か、直径1~10cm大のチャート礫を多量に含む 橙褐色土
 表土3 造成前の表土か、褐色土で黒味が強い、94年賞味期限の缶コーヒー一斗土

- SD101
 1層: 地山土をブロック状に多量に含む土層
 1a: 淡褐色土 直径1~5cm 大の地山土ブロックを少量含む 直径1~10mm 大の炭化物を少量含む 粘性・しまりともにややあり
 1b: 淡褐色土 直径1~20cm 大の地山土をかなり多量に含む 場所によっては地山土ブロックがほとんど
 粘性あるがしまりはややあり 直径5~20mm 大の炭を少量含む
 2層: 北側の深い部分埋土 炭化物多い
 2a: 褐色土 直径5~10mm 大の炭化物を多量に含む 粘性ややあり しまりあり
 2b: 褐色土 直径5~10mm 大の炭化物を多量に含む 直径1~10cm 大の地山土ブロックをやや多量(北では多量)に含む 粘性・しまりともにややあり
 3層: 南側の浅い部分
 3a: 褐色土(やや黄味がかる) 直径1~2cm 大の炭化物をごく少量含む 粘性・しまりともにややあり
 3b: 淡褐色土 地山黄色粘質土主体の土層 粘性・しまりともにあり
 3c: 褐色土(明るい) 直径1cm 大の炭化物を少量含む 直径1cm 大の地山土ブロックを少量含む 粘性・しまりともにややあり
 3d: 淡黄褐色土(3層より暗い) 直径5mm 大の炭化物をごく少量含む
 3e: 淡灰褐色土 粘質土 直径5mm 大の炭化物をごく少量含む 粘性・しまりともにあり
 SD08
 3層: 淡褐色土 直径5~20cm 大の地山黄褐色・橙褐色砂質土ブロックを多量に含む
 砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり
 4層
 4a: 白色粘質土 直径1cm 大の地山砂質土を少量混じる 粘性・しまりともにあるがやわらか
 4b: 白色粘質土 部分的に3層と同様の地山砂質土ブロックを含む 粘性・しまりともにややあり
 4c: 白色粘質土 4層とよく似た土層 直径5mm 大の炭化物をごく少量含む

第51次 平面図 (SD02 貝層周辺)

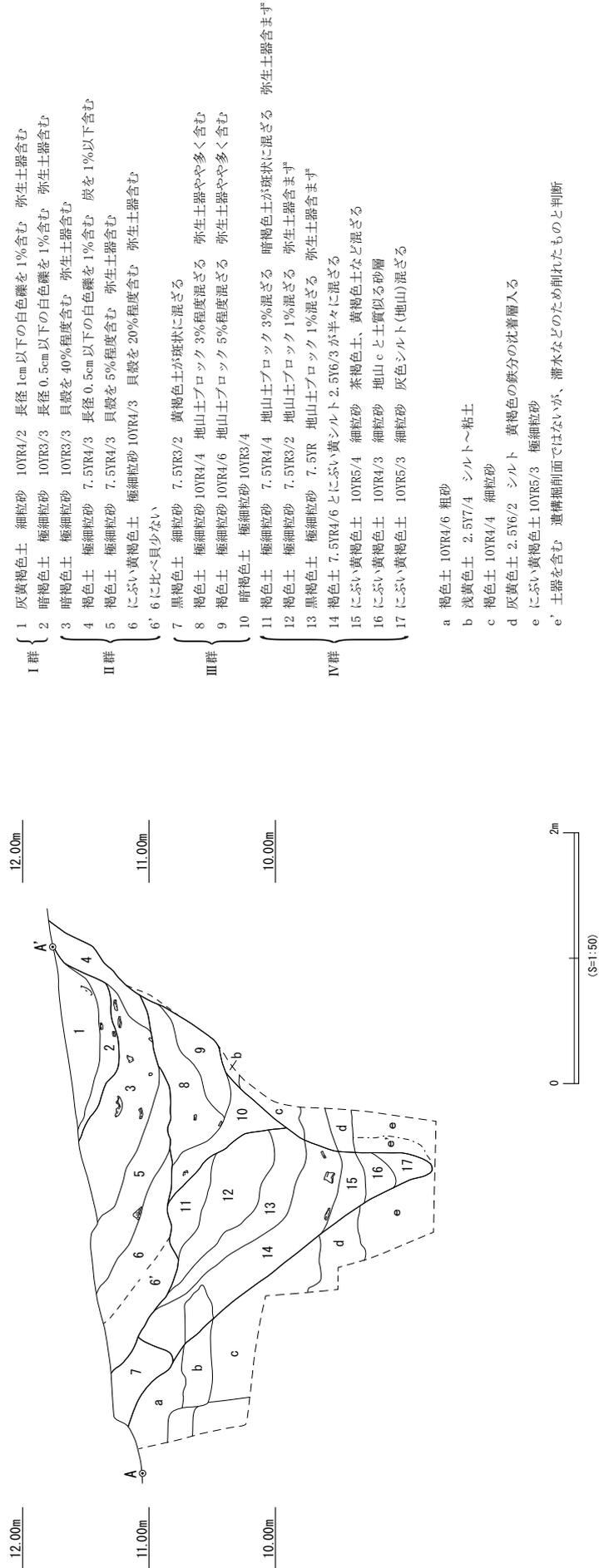


SD02 西トレンチ 土器出土状況



第37図 第51次 遺構平面図 (A区 SD02 貝層周辺・SD02西トレンチ土器出土状況)

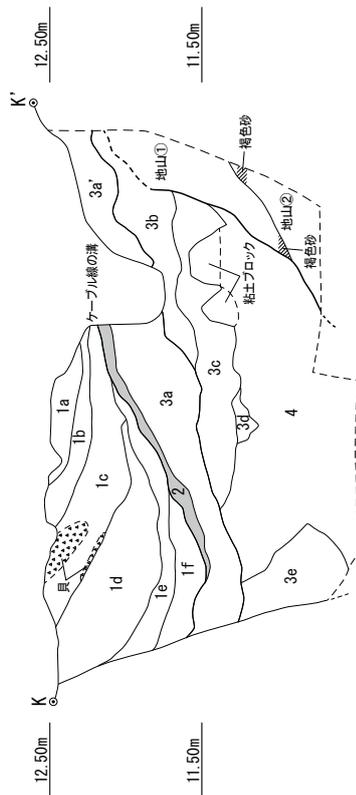
第51次 土層図 (A区 SD02 西トレンチ東壁)



第38図 第51次土層図 (A区 SD02西トレンチ東壁)

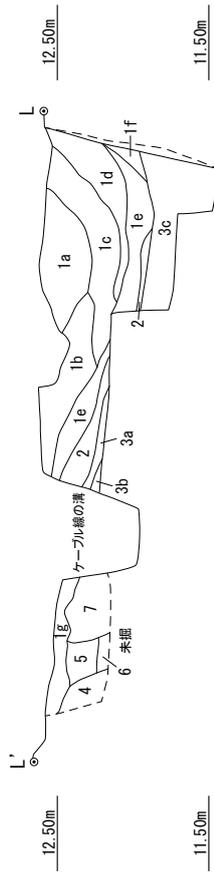
第51次 土層断面図 (A区 SD08 中央ベルト西壁・東壁)

中央ベルト 西壁(西脇トレンチ東面)

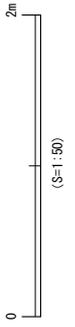


- 1a 淡褐色土 直径1~2cm大の地山土ブロックをやや多量に含む 直径5mm大の炭化物を少量含む 粘性・しまりともにややあり
 - 1b 黒褐色土 直径1~2cm大の地山土ブロックをごく少量含む 直径5mm大の炭化物を少量含む(1a層より多い) 粘性・しまりともにややあり
 - 1c 淡褐色土 直径1~5cm大の地山粘土ブロックを多量に含む 1c・1d層はいずれも土層中にさらに埋没単位ともとれる細かな筋状の土層が確認できる 1c層中では部分的にシジミを中心とした貝層が確認できる 粘性ややあり しまりややあり
 - 1d 淡褐色土 直径1~5cm大の地山粘土ブロックを多量に含む 直径1cm大の炭化物粒をごくまれに含む
 - 1e 淡褐色土 直径3~10cm大の地山粘土ブロックを多量に含む 粘性・しまりともにややあり
 - 1f 淡黄褐色土 直径1~10cm大の地山粘土を主体とした土層 ほとんどがブロック状の粘土 粘性強い しまりややあり
 - 2 褐色土 直径1~3cm大の地山土ブロックをごく少量含む 粘性ややあり しまりあり
 - 3a 褐色土 直径1~20cm大の大振りな地山土ブロック(砂質土が多い)を多量に含む 粘性ややあり しまりあり
 - 3a' 褐色土 3a層とほぼ同じ
 - 3b 淡黄白色粘土 ほとんど地山粘土で構成された土層 粘性強くしまる
 - 3c 褐色土 直径3~10cm大の地山砂質土ブロックを中心とした土層 粘性ややあり しまる
 - 3d 淡褐色土 地山土主体の土層 やや砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり
 - 3e 褐色土 直径1~20cm大の地山土を多量に含む やや砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり
 - 4 淡黄白色粘土 部分的に地山砂質土をブロック状に含む部分あり 粘性強くしまる
- 地山①・地山②ともに層理が観察できる ①②↑のズレのように見える

中央ベルト 東壁



- 1 淡褐色土
 - 1a: 直径1~10cm大の白色粘土ブロックをやや多量に含む シジミ中心 貝少量含む 粘性ややあり しまりややあり
 - 1b: 直径5~10cm大の白色粘土を多量に含む 粘性あり しまりあり
 - 1c: 破碎された貝殻を多量に含む混貝土層
 - 1d: 直径1cm大の地山土を多量に含む 貝はごく少量含む 粘性あり しまりあり
 - 1e: 直径5~10cm大の地山粘土を少量含む 粘性あり しまりあり
 - 1f: 直径1cm大の地山土ブロックをごく少量含む 1eより明るい
 - 1g: 直径3~5cm大の地山土ブロックを多量に含む 粘性あり しまりあり
- 2 黒褐色土 直径1cm大の地山土ブロックを多量に含む 粘性あり しまりあり
- 3 褐色土
 - 3a: 直径1~2cm大の地山粘土を少量含む 粘性あり しまりあり
 - 3b: 直径10cm大の地山土ブロックを多量に含む 粘性あり しまりあり
 - 3c: 直径5~20cm大の地山黄色砂質土を多量に含む 砂質がかかる 粘性あり しまりあり
- 4 淡黄色粘土 粘性あり しまりあり
- 5 淡黄褐色粘土 混入物少ない 粘性あり しまりあり
- 6 淡褐色砂質土
- 7 褐色土 直径5~10cm大の地山粘土を少量含む 粘性あり しまりあり

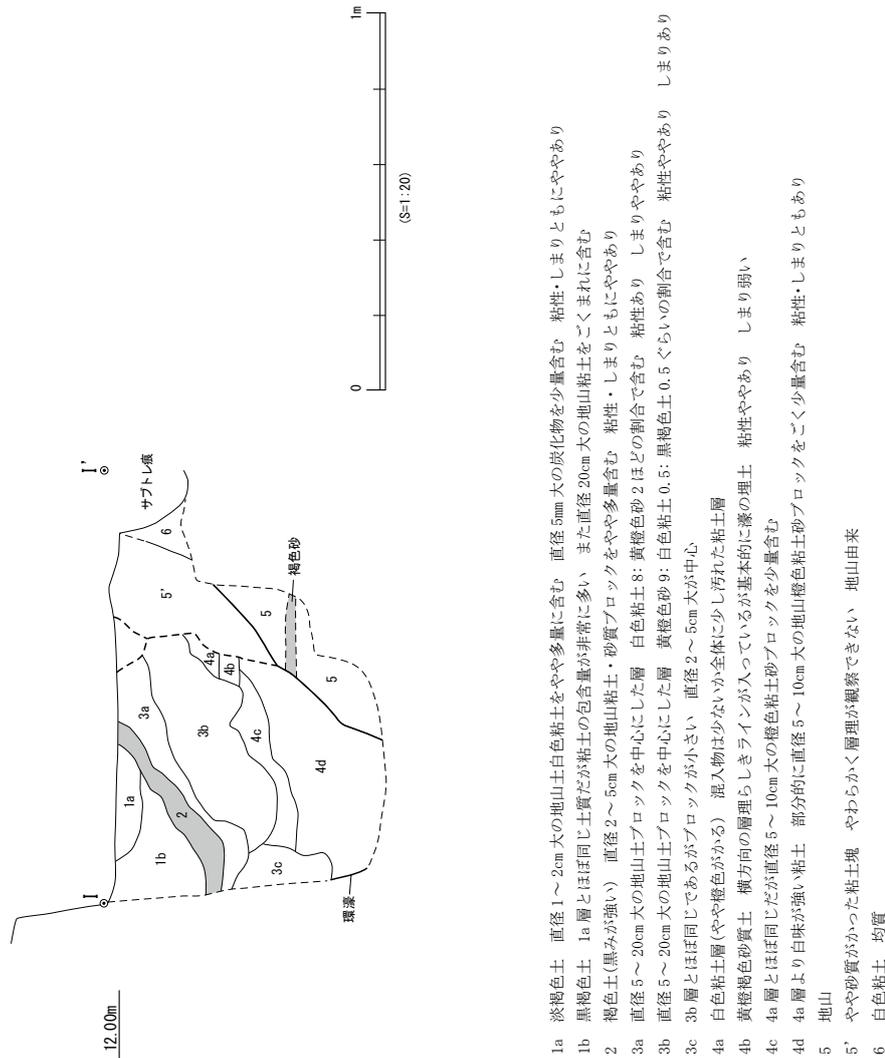


第51次 土層断面図 (A区 SD08 西トレンチ東壁)

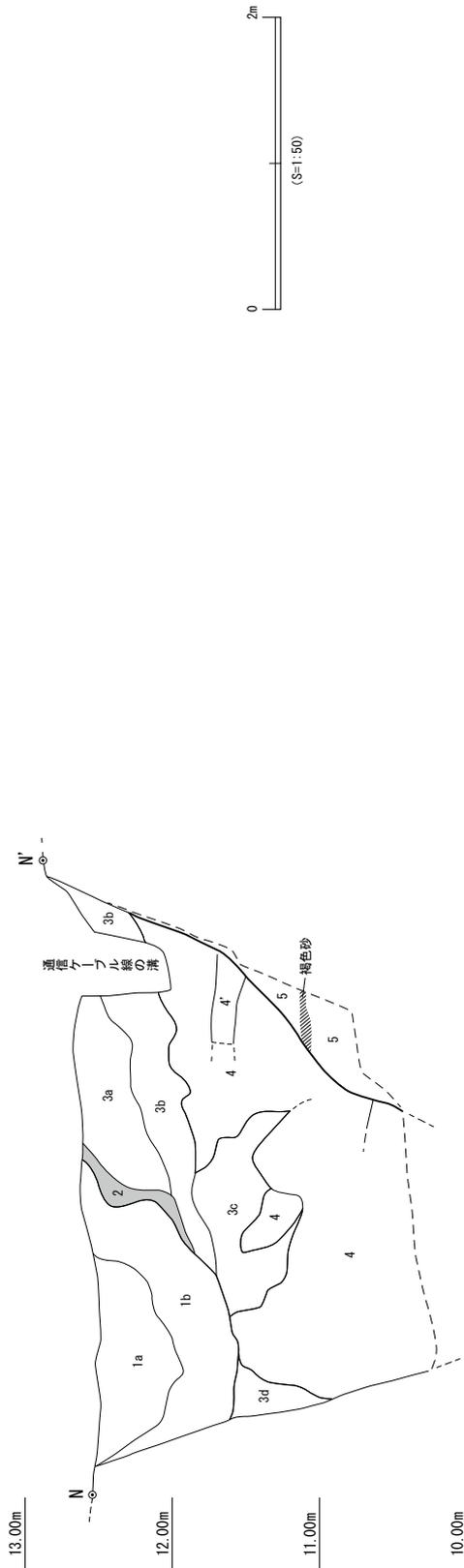
番号	科	名前	左右の区別	殻長(mm)	殻幅(mm)
1	マルスダレガイ科	オキシジミ	左殻	44	43
2	マルスダレガイ科	ハマグリ	左殻	—	44
3	マルスダレガイ科	ハマグリ	右殻	—	41
4	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	21.5	23
5	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	23	25
6	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	24	26.5
7	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	25	26.5
8	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	22	24
9	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	14	17
10	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	22.5	23.5
11	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	21	23
12	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	21.5	22.5
13	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	33	28.5
14	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	24	25.5
15	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	24
16	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	31
17	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	27.5
18	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	23
19	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	27
20	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	27
21	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	25.5
22	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	21.5
23	シジミガイ科	ヤマトシジミ	左殻	—	18.5
24	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	26
25	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	27
26	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	28
27	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	28.5
28	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	29
29	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	25
30	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	28
31	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	30
32	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	25.5
33	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	24
34	シジミガイ科	ヤマトシジミ	右殻	—	24.5
35	シジミガイ科	ヤマトシジミ	不明	—	26.5
36	シジミガイ科	ヤマトシジミ	不明	—	23.5

分類は村木望子による。

第40図 第51次土層図 (A区 SD08西トレンチ東壁)



第51次 土層断面図(A区 SD08 東トレンチ 東壁)



- I 群 { 1a 淡褐色土 直径1~2cm大の地山由来白色粘土粒を多量に含む 直径5mm大までの炭化物粒をごく少量含む 粘性・しまりともにややあり
- 1b 褐色土 直径1~2cm大の地山由来白色粘土・淡黄色砂質ブロックを少量に含む 部分的に20~30cm大の地山砂質ブロックを含む 粘性・しまりともにややあり
- II 群 { 2 黒褐色土 直径1cm大の地山土ブロックをごくまれに含む 粘性・しまりともにあり
- 3a 褐色土 直径5~30cm大の地山土ブロックを多量に含む
- 3b 褐色土 直径5~20cm大の地山土ブロックを多量に含む 砂質がかかるが粘性・しまりともにややあり
- 3c 褐色土 直径5~10cm大を中心にまれに50cm大までの地山砂質土ブロックを多量に含む 粘性・しまりともにあり
- 3d 褐色土 直径1~10cm大の地山砂質土ブロックをやや多量に含む 砂質がかかるが粘性・しまりともにあり
- III 群 { 4 淡黄白色粘土 地山土の崩落か 粘性・しまりともに強い
- 4' やや砂質部分
- 5 地山 淡黄白色砂質土

第41図 第51次土層図 (A区 SD08東トレンチ東壁)

弥生土器をやや多く含む。Ⅱ群（3～6層）は貝殻、弥生土器を含む土層で、北側からの流入土である。Ⅰ群は南側に埋まりきらず窪地状になっていたところに堆積した土層である。弥生土器を含む。

北トレンチ（第34図）では、埋土の堆積は、標高10.5～11.0mまでは西トレンチのⅣ群に当たり、その上位層（Ⅱ群）は西上方から東下方に流れ込んでいる。3層（貝殻40%程度含む）、4層（貝殻5%程度含む）、5層（貝殻30%程度含む）、8層（貝殻20%程度含む）には貝殻が含まれている。貝層は北トレンチから西トレンチにかけて堆積しており（第37図）、西トレンチの土層状況とあわせて考えると、北西側から廃棄されたものと推定できる（濠は、北東側から埋まっている）。規模は、検出長約8.5m、幅4.0m、深さ3.0mである。

SD08

調査区南側で昨年検出した濠（内濠）である。断面V字状を呈するが全貌を明らかにすることができなかった。濠に直交して西トレンチ（I-I'）、中央ベルト両側トレンチ（K-K'・L-L'）、東トレンチ（N-N'）を設定したが、SD06を完掘したことで、側壁で平行して設定するトレンチ同様の土層堆積状況を観察することができた。

中央ベルト西壁（K-K'）では、検出幅約3.7m、深さ2.0m（標高10.5m）まで掘削した。土層堆積は、大きくⅢ群に分層でき、さらに細分できる。Ⅰ群（1a～1f層）は北側からの流入土である。西面1c層、東面1a、1c層に貝殻が含まれていた。Ⅱ群、Ⅲ群は南からの流入土である。Ⅱ群とした土層のうち、2層は黒褐色土で、バンド状に堆積しており、この層を境に上位層（Ⅰ群）は細かな地山ブロック土を含んでいるのに対し、下位層は20cm大の地山土を多量に含んでいる。この状況は、西トレンチ（第40図 2層）、東トレンチ（第41図 2層）でも同様であった。東トレンチでは、検出幅4.0m、深さ2.3m（標高10.2m）まで掘削した。大きくⅠ～Ⅲ群に分層したうち、Ⅲ群は地山土の崩落と思われる土塊（淡黄白色粘土）であった。

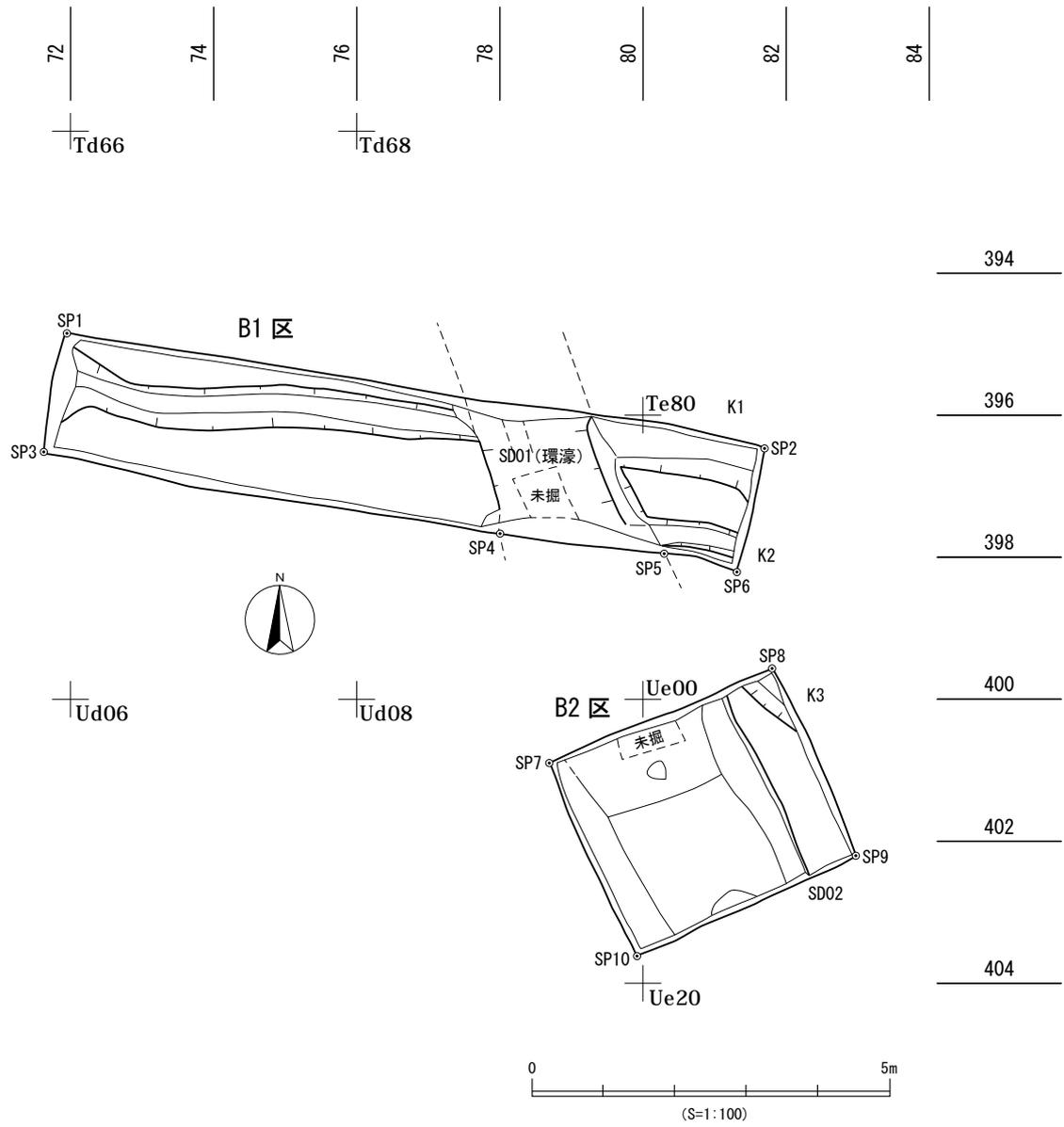
（2）51B区の遺構（第42～44図・写真図版18～20）

見晴台遺跡の環濠の南西部を調査した。当地の北側は、第21次～第24次調査で実施したところである。調査では南区（南1区・南2区）と呼んでいたが、本報告では51B区（51B1区・51B2区）とした。51B1区は、東西約10m、南北約1.8mの調査区で、台地が削られて崖となっているところの南に位置する。この崖面には濠の断面が露呈しており、その位置を参考に設定した。

51B1区では、表土・攪乱層の直下で地山面（熱田層）を検出した。遺構は、東寄りでSD01（濠）、北寄りで東西方向に走る攪乱溝（K1）、南東隅で攪乱溝（K2）がある。SD01は、幅約1.86m、深さ1.64mで断面V字形を呈している。検出面の標高は11.8m、底面の標高は9.96mである。土層断面の観察では、上位層の5、6層は茶灰褐色土、下位層の7～10層は黄灰褐色土、黄灰白色土、灰褐色砂質シルトである（第43図）。

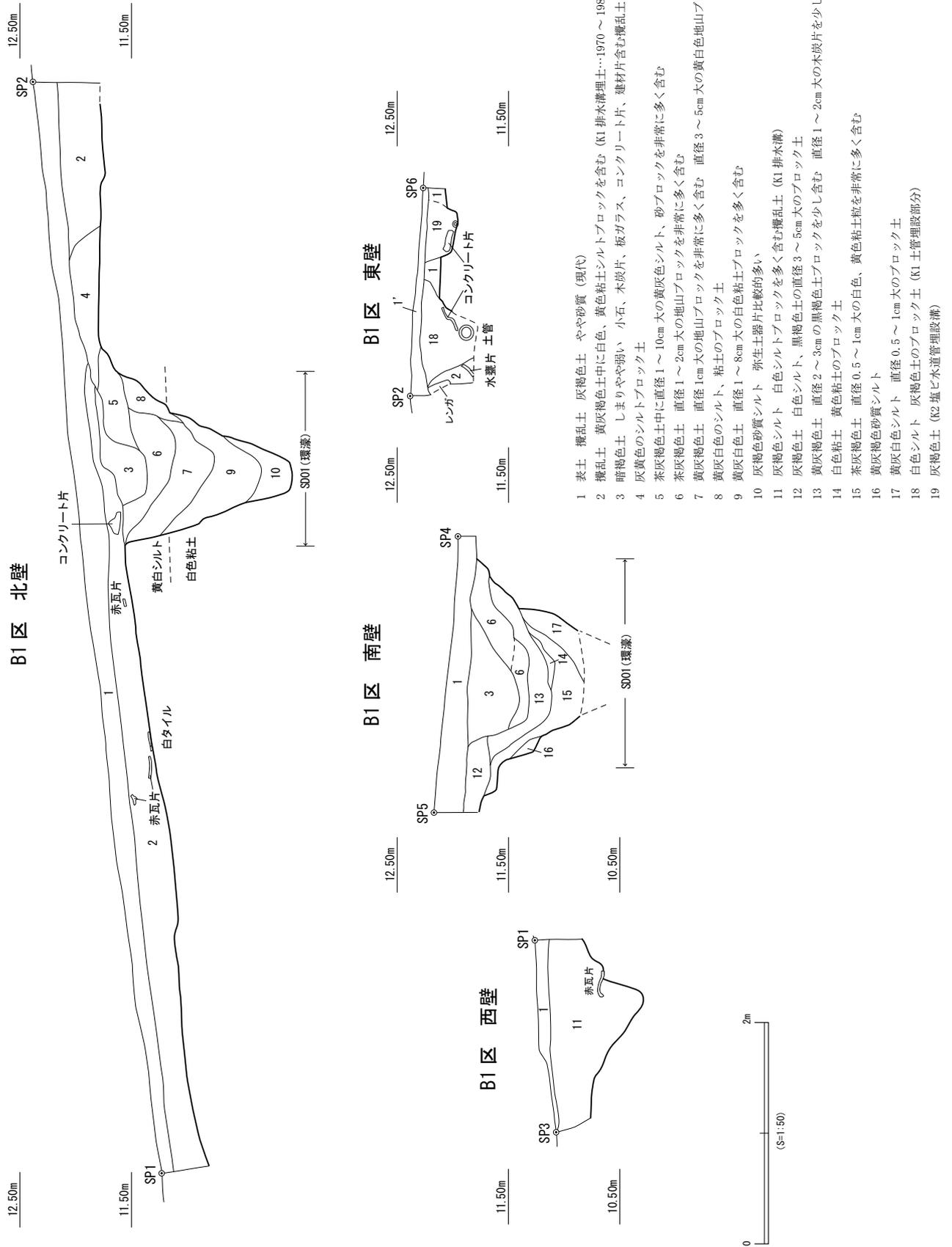
51B2区は、東西1.7m、南北1.5mの調査区で、SD01の検出後に方向をあわせて設定した。SD01の東肩を壊すようにSD02が検出された。SD02は近現代の溝で埋土中位に木炭層があった。

第51次 遺構全体図 (B区)



第42図 第51次遺構全体図 (B区)

第51次 土層断面図 (B1区北壁・西壁・南壁・東壁)



第43図 第51次土層図 (B1区北壁・西壁・南壁・東壁)

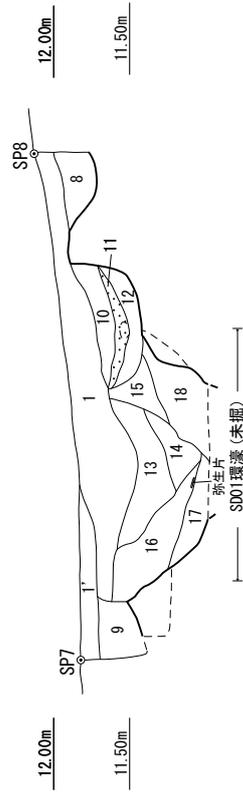
第51次 土層断面図 (B2区 南壁・北壁)

B2区 南壁

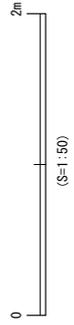


- 1 表土 礫乱 灰褐色土
- 2 礫乱土(ピットまたは溝状の掘り込み) 灰褐色土中に直径0.5~1cm大の黄色地山ブロックを含む
- 3 灰色砂質土 直径1~3cm大の黄色地山ブロックが多く混じる
- 4 明灰色砂質土 均質
- 5 明灰色砂質土 直径1~3cm大の黄色、白色地山ブロックを非常に多く含む
- 6 黄灰色砂質土 直径1~3cm大の黄色地山ブロックを非常に多く含む 直径1cm大の木炭片含む
- 7 黄褐色土 堅くしまる (環濠埋土) ……SD01

B2区 北壁



- 1' 表土 礫乱 灰褐色土 直径5~8cm大の黄色地山ブロックを含む
- 8 灰褐色土に黄色地山ブロック(直径3cm大)を多く含む (R3 近現代礫乱)
- 9 灰褐色土(近現代礫乱)
- 10 灰褐色土 直径3cm大の黄色地山ブロックを多く含む
- 11 木炭層 黄色、褐色土ブロック(直径3~10cm大)を少し含む SD02
- 12 直径2~4cm大の白色、黄色、灰色土のブロック土
- 13 灰褐色土 暗褐色土がまだらに入る コンクリート、板ガラス片混じる
- 14 灰褐色土 小石混じる
- 15 黄灰褐色土 堅くしまる
- 16 黄灰白色シルト 直径1~2cm大のブロック状 SD01 (環濠)
- 17 灰白色シルト質粘土直径0.5~1cm大の白色粘土ブロックを多く含む
- 18 黄灰褐色土 直径0.5~4cm大の黄白色地山ブロックを非常に多く含む



(3) A区の遺物(第45・46・47図・写真図版29～34)

コンテナ数22箱あり、おおよその内訳はSD02が14箱、SD08が2箱、その他3箱、B区が3箱である。

SD02(第45・46・47図)

弥生土器 第45図-1は壺の口縁部であろう。内外面赤彩される。3、4は長頸壺である。3は完形品(口唇部の一部を欠損する)で、外面ヘラミガキ調整を施す。4は口縁部が1/3残る。体部に穿孔が1か所ある。外面ヘラミガキ調整を施す。11、12は小形の壺(ミニチュア土器)である。11は外面全体に赤彩される。14はパレススタイル壺である。口縁部は素縁でハの字に開く。体部上半部に鋸歯文が赤彩されて施され、体部下半が赤彩される。赤彩との境に刺突文が施される。2、5～8、10は、広口壺の口縁部である。2は口唇部に1条の沈線を施すほか施文はない。5は内外面に赤彩される。口唇部上部に沈線が巡る。北陸系外来土器か。6は赤彩される。外面に円形浮文、竹管文など施す。8、10はヘラミガキ調整を施す。9は短頸壺である。13、15～19は壺の底部である。13は底部外面にヘラミガキ痕が残る。15は外面ハケ調整、内面ヘラケズリ調整。底面板ナデ調整を施す。16は外面ハケ調整、内面下半ハケ調整、上半板ナデ調整、底部ヘラケズリ調整を施す。施文はない。17は外面ヘラミガキ調整を施す。赤彩される。内面板ナデ調整を施す。19は外面に赤彩される。内面、底面板ナデ調整を施す。20、21、22は甕の口縁部である。21、22は口唇部に刺突文が施される。23、27、25、26は台付甕の脚である。23、27は外面ヨコナデ調整を施す。25は体部外面ハケ調整を施す。器壁が磨滅しているため、脚部の調整は不明である。26は小型品である。第46図-4～10は高坏である。4は高坏坏部である。波状文を施す。8、9は脚部に楡描直線文を施す。8の坏部は椀状を呈すると思われる。10はヘラミガキ調整を施す。5、7は有稜高坏である。7は脚端を欠く。三方透かしである。坏部内外面ヘラミガキ調整、脚部外面ヘラミガキ調整を施す。6は小形の高坏(ミニチュア土器)である。外面赤彩されている。脚部に楡描直線文を施す。11、12は鉢である。12は外面ヘラケズリ調整、内面板ナデ調整、底部ヘラケズリ調整を施す。類例がない。1～3は蓋である。1は内面に煤が付着する。2は外面ナデ調整、内面板ナデ調整を施す。3は内外面板ナデ調整を施す。

時期は、VI様式(山中式)(第45図-11)、VII様式(欠山式)(第46図-9、10、12)、欠山式後半～元屋敷式(第45図-14)。

舟形土製品 2点とも半分残存し、舟底は平で舳の先端が欠ける。第47図-1は、残存長5.8cm、残存高3.2cm、最大幅2.7cmを測る。外面に赤味を帯びた部分がある。胎土の色調は灰黄色である。2は、残存長4.3cm、残存高2.6cm、最大幅2.9cmを測る。外面に赤味を帯びた部分がある。胎土の色調は黄灰白色である。

貝製品 14は貝刃である。ハマグリの左殻で、腹縁の端部を鋸歯状にしている(破損の可能性もある)ほか内側を剥離させて刃部をつくる。排土中から採取したものであるが、SD02からの出土と思われる。

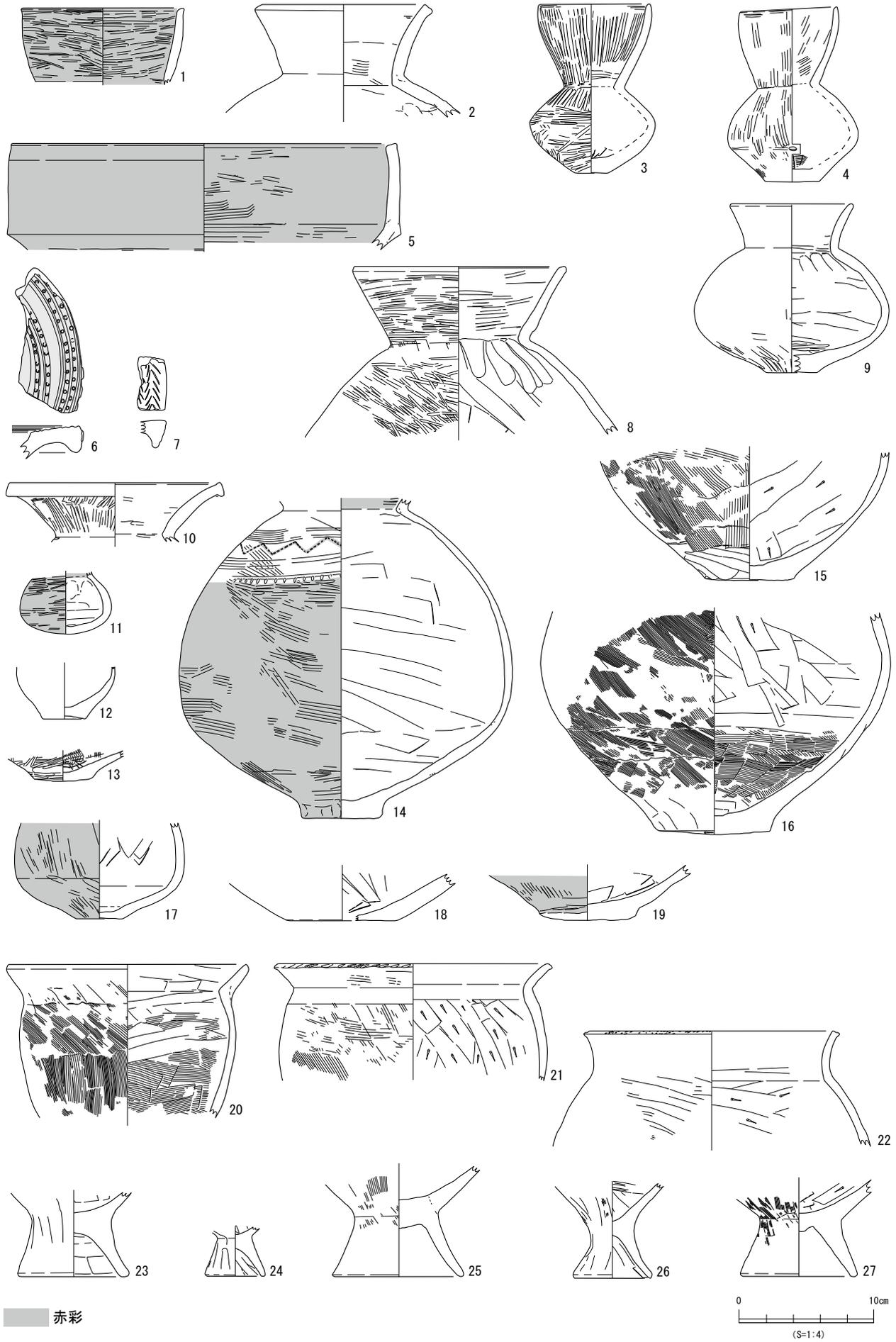
青銅製品 13は、直径10mmの円形を呈し、片面の中央が尖っている。縁辺は欠失している。重さ0.55gを量る。用途不明である。西トレンチ下層出土である。

石器 15は磨石である。円礫で焼けて赤褐色、暗赤灰色をしている。

SD08(第46図)

弥生土器 16は小型壺である。口縁部の3/4を欠失する。口縁部ナデ調整、体部上半部ヘラミガキ調整、下半部ナデ調整を施す。17は台付甕の脚部である。外面タテハケ調整、内面ヨコハケ調整を施す。18、19は高坏の脚である。18は外面ヘラミガキ調整、内面ヨコナデ調整、外面に楡描直線文を施す。19は三方透かし、外面ヘラミガキ調整を施す。20は、台付鉢の脚部である。外面が赤彩される。時期は、

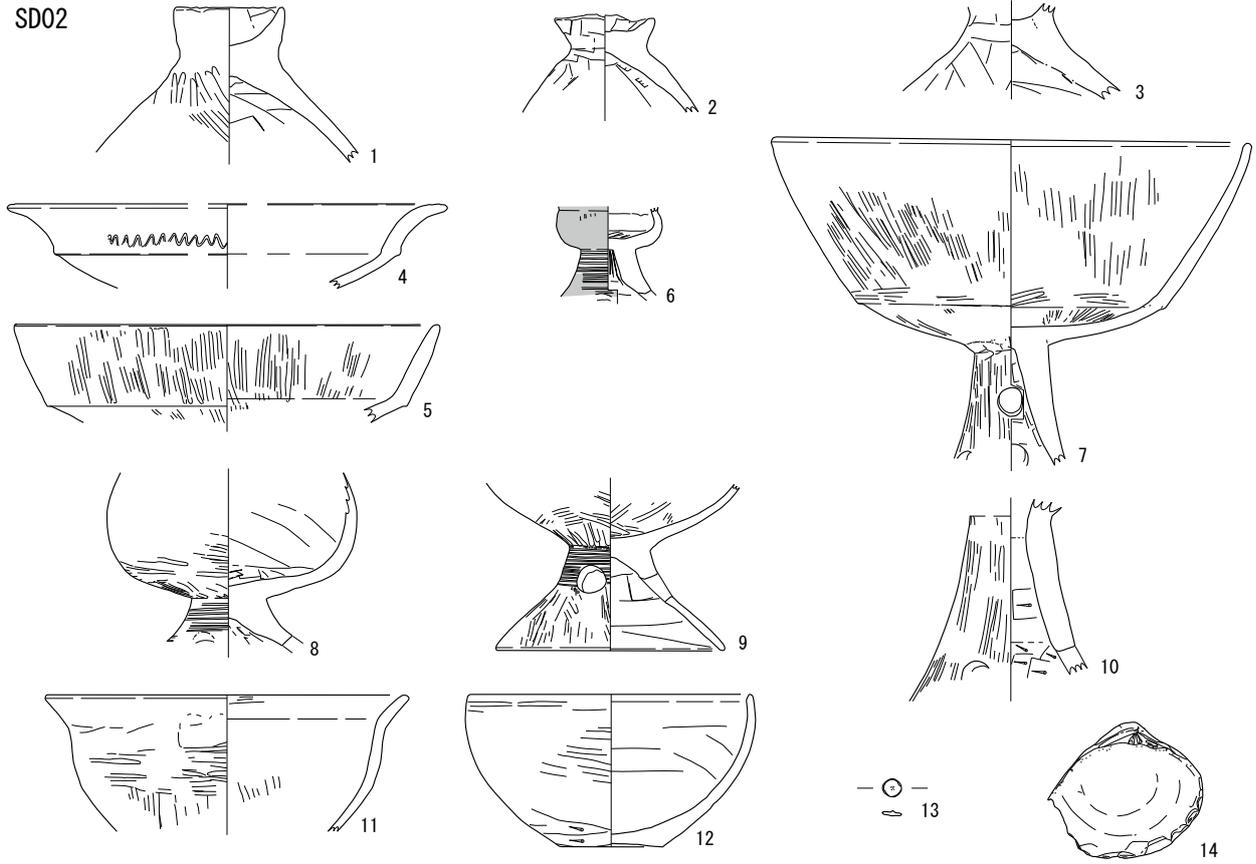
SD02 弥生土器



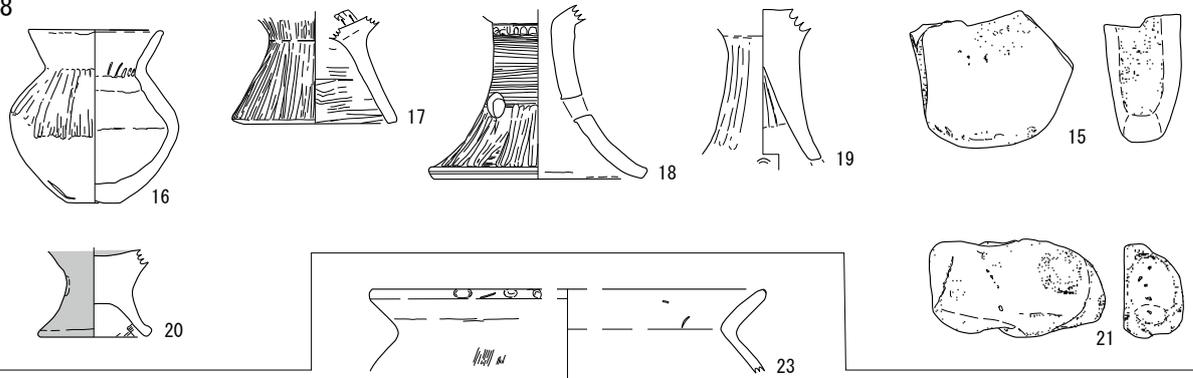
第45図 遺物図 (5)

A区

SD02

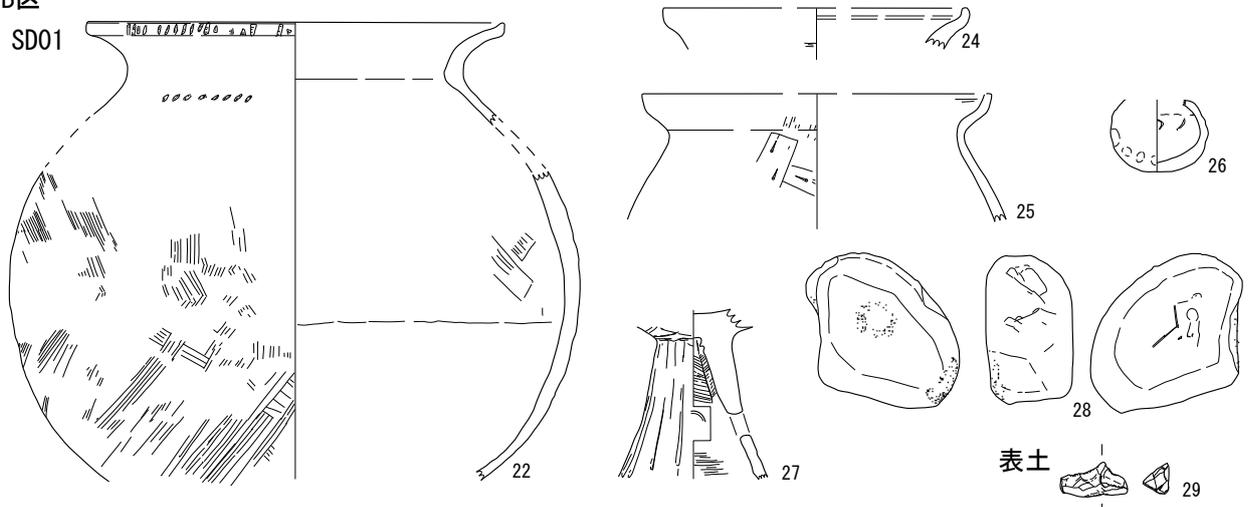


SD08



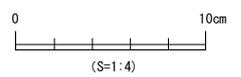
51B区

SD01



赤彩

表土



小型壺や高坏の特徴からVI様式（山中式）と考えられる。

石器 21は磨石である。円礫で焼けて赤灰色をしている。

表土（第46図）

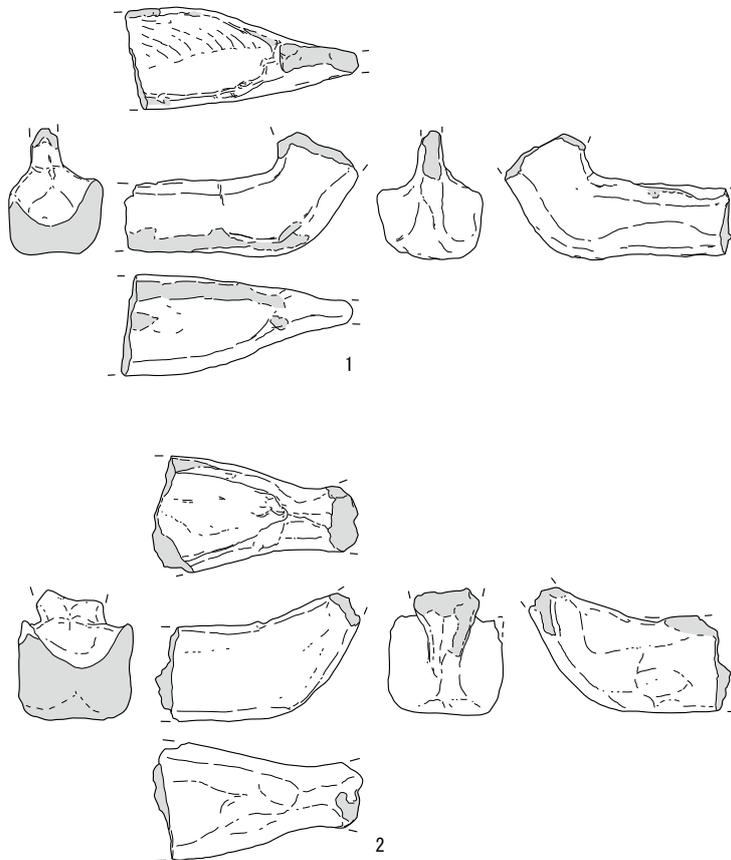
発火具 29は、火打石である。養老瀧産チャートである。南西隅地表面で採集した。

（4）51B区の遺物（第46図・写真図版32・33）

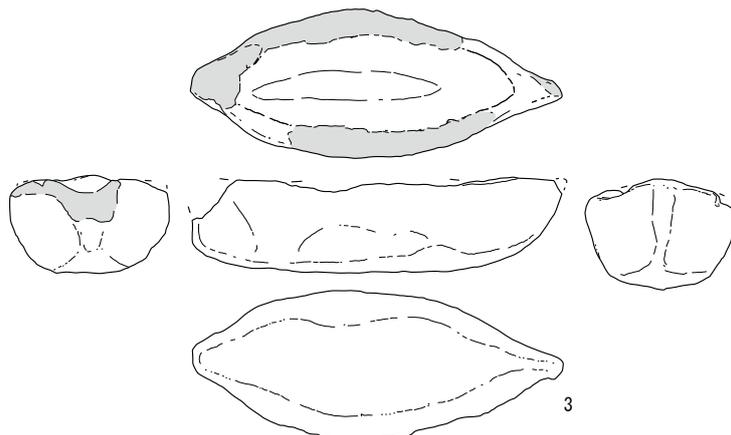
SD01

弥生土器 26は小形の壺である（ミニチュア土器）。22は甕で外面ハケ調整を施す。口縁部、体部下
半がある。23は甕の口縁部である。24、25は甕の口縁部で受口状口縁をなす。27は高坏の脚部で三方透
かしである。

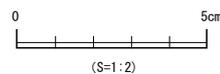
石製品 28（写真図版32-7）は磨石で、被熱により赤化している。



三王山遺跡4次 SK12出土 舟形土製品



第47図 遺物図 (7)



第5章 自然科学分析

1 見晴台遺跡出土の動物遺体

(1) はじめに

名古屋市に所在する見晴台遺跡の3次にわたる発掘調査において、環濠に形成された貝塚が検出された。貝塚からは、弥生時代後期を中心とする動物遺体が出土した。ここでは、これらの動物遺体の同定結果を報告する。

(2) 試料と方法

試料は、SD02（外濠）と、SD08（内濠）に堆積する2か所の貝塚より採取された。試料は肉眼および実体顕微鏡下で観察し、標本との比較により、部位と分類群を同定した。貝類の集計は、斧足綱については殻頂部の残るものをカウントし、腹足綱では殻頂および殻軸が1/2以上残るものをカウントした。

(3) 結果

同定された分類群を表3に示した。また、貝類の同定結果を表4に、その他の分類群の同定結果を表5に示す。以下、分類群ごとにその特徴を述べる。

・貝類

腹足綱で1科2種（フトヘナタリ科、アカニシ、ツメタガイ）、斧足綱で1科1属8種（フネガイ科、シジミ属、ハマグリ、サルボウガイ、ハイガイ、マガキ、オオノガイ、オキシジミ、カガミガイ？、シオフキ）を同定した。

腹足綱では、フトヘナタリ科が最も多く出土した。殻表面が摩滅している試料や殻頂および殻口を欠損する試料が多く、種の同定には至らなかったが、ヘナタリとフトヘナタリが混在していると思われる。次いでアカニシが多く出土した。殻頂部から外唇部にかけて欠損し殻軸部のみを残す試料が大半である。殻頂から殻軸まで残存している個体は2点あり、最も大きい個体で11.28cmである。ツメタガイは1点のみ出土した。

斧足綱では、シジミ属の出土が最も多い。SD02では最上層、中層、下層のいずれからも多く出土しており、下層からの出土が最も多い。SD08では、貝層2から集中して出土している。シジミ属は、遺跡の立地からするとヤマトシジミであると考えられる。シジミ属に次いで、ハマグリの出土が多い。ハマグリについても、SD02下層からの出土が最も多くなっている。一方、SD08の貝層2では、シジミ属のように多くは出土しなかった。シジミ属とハマグリの他は、サルボウガイ、マガキ、オオノガイ、オキシジミ、シオフキと続く。これらの他、SD08の貝層2からはハイガイとカガミガイと思われる殻頂部が出土した。

貝類を見ると、SD02からの出土が中心であり、SD08からの出土はシジミ属を除いて少ない傾向にある。

・魚類

硬骨魚綱2属を同定した。マグロ属の椎骨とクロダイ属の左前上顎骨が出土している。マグロ属の椎骨は、椎体の長さが3.5cmあり、体長1.5m前後のマグロと考えられる。クロダイ属はSD02からの出土である。

・爬虫類

爬虫綱 1 種を同定した。ニホンイシガメの腹甲破片が 2 点出土した。いずれもSD08より出土している。

・鳥類

カモ科と思われる上腕骨 1 点を同定した。近位および遠位端の欠損した骨幹部破片であり、種の同定には至らなかった。SD08からの出土である。

・哺乳類

ニホンジカおよびイノシシを同定した。ニホンジカでは、角、臼歯、椎骨、橈骨、中節骨が出土した。角は落角の角坐部分で、2 点とも金属製と思われる刃物の切断痕が観察された。イノシシは、下顎骨の下顎頸部破片と手根骨が出土した。ニホンジカとイノシシともに、ほとんどがSD08からの出土である。

(4) 考察

SD02とSD08において、SD02の動物遺体は貝類を中心とし、哺乳類はあまり出土していない。一方のSD08は、貝類の出土はシジミ属を除いて多くないが、SD02と比べて哺乳類の出土が多くなっている。

出土する貝類の種類はSD02とSD08とも共通しており、シジミ属やハマグリの出土が中心となる。生息域で見ると、シジミ属はヤマトシジミであるとするれば河口の汽水域、ハマグリは内湾の砂底域に生息する。また、ツメタガイやヘナタリ（フトヘナタリ）、マガキ、オオノガイ、オキシジミは内湾砂泥質や干潟に生息し、アカニシは内湾泥底域、シオブキ、オオノガイ、サルボウガイは、ハマグリと同じく内湾砂底域に生息する。したがって、貝の採取活動は内湾奥～中央部の砂泥底に分布する貝類が中心であったとみられる。なお、マガキは内湾の波食台にも生息するが、他に内湾岩礁底に生息する貝類がほとんどみられないため、内湾奥部の干潟で採取されたと考えられる。

魚類は、2 点しか確認されなかったため、漁労活動を積極的に行っていたかは定かでない。また、爬虫類のニホンイシガメや鳥類のカモ科と思われる骨も数点の出土であり、これらの動物も積極的に捕獲していたかは疑問が残る。

哺乳類では、ニホンジカが多く出土している。落角の角坐が出土したことから、落ちていた角を採集していたようである。また、角には切断痕が認められ、骨角器の製作と利用もうかがえる。その他の部位は、臼歯や椎骨、橈骨破片、中節骨など断片的であり、同様にイノシシも下顎骨破片と手根骨の出土のみで、ニホンジカやイノシシ利用の実態を詳細に把握するのは難しい。

なお、SD02とSD08の間にみられる出土種組成の違いが何に起因するのかは、今後の課題である。時期差や季節性の違いなども含めて検討が必要であろう。

参考文献

西本豊弘・松井章編（1999）考古学と動物学. 210p, 同成社.

奥谷喬司編（2000）日本近海産貝類図鑑. 1173p, 東海大学出版会.

山崎健（2019）農耕開始期の動物考古学. 315p, 六一書房.

表3 見晴台遺跡出土の動物一覧

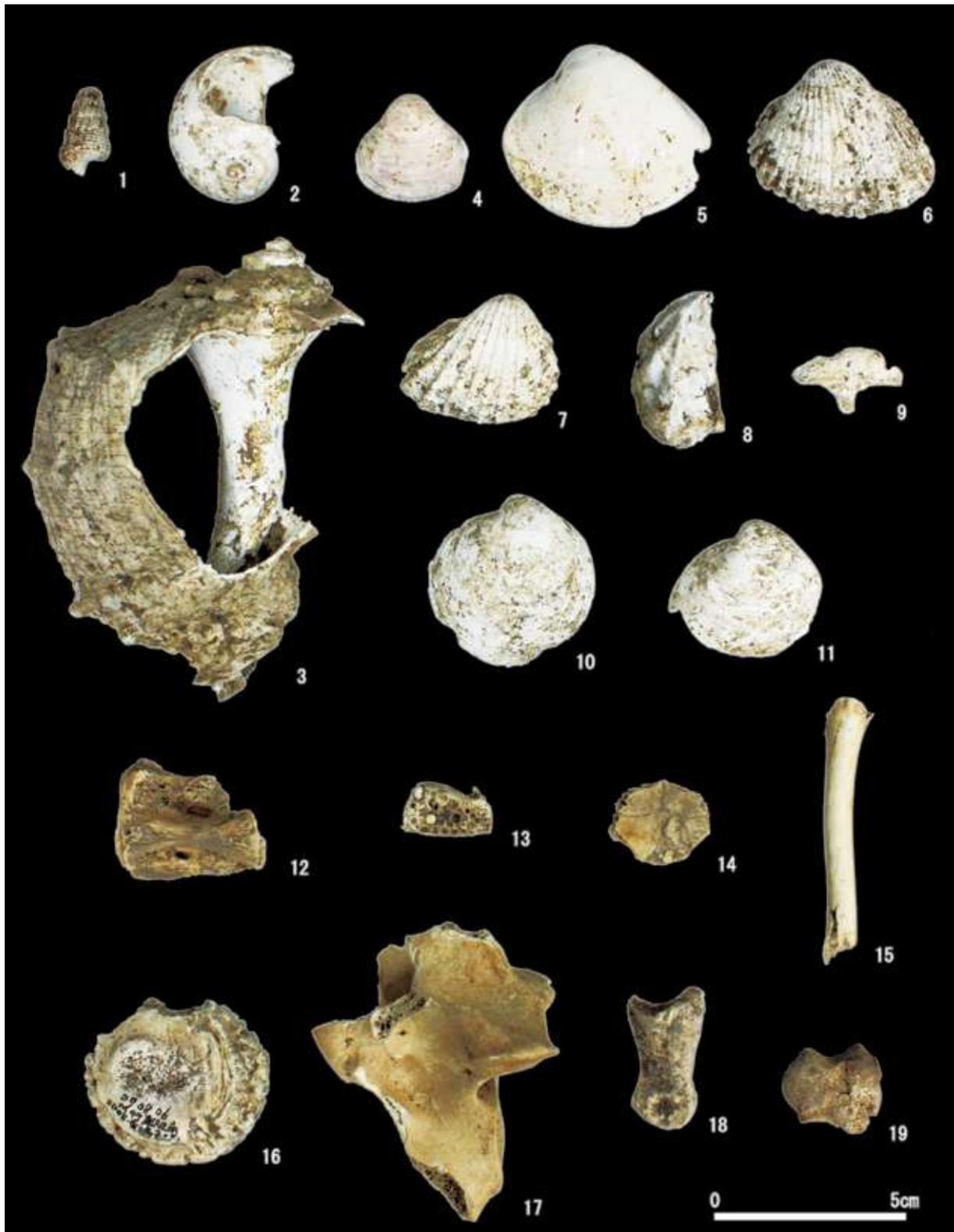
腹足綱	Gastropoda
	アカニシ <i>Rapana venosa</i>
	ツメタガイ <i>Glossaulax didyma</i>
	フトヘナタリ科 <i>Potamididae</i> spp.
斧足綱	Pelecypoda
	シジミ属 <i>Corbicula</i> spp.
	ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>
	サルボウガイ <i>Scapharca kagoshimensis</i>
	ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i>
	フネガイ科 <i>Arcidae</i> gen. et sp. indet.
	マガキ <i>Crassostrea gigas</i>
	オオノガイ <i>Mya arenaria oonogai</i> Makiyama
	オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>
	カガミガイ? <i>Dosinia japonica</i> ?
	シオフキ <i>Mactra veneriformis</i> Deshayes
硬骨魚綱	Osteichthyes
	クロダイ属 <i>Acanthopagrus</i> sp.
	マグロ属 <i>Thunnus</i> sp.
爬虫綱	Reptilia
	ニホンイシガメ <i>Mauremys japonica</i>
鳥綱	Aves
	カモ科? <i>Anatidae</i> sp.?
哺乳綱	Mammalia
	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>
	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
	哺乳綱の一種 <i>Mammalia</i> ord., fam, gen. et spp. indet.

表4 見晴台遺跡出土の貝類

調査年次	遺構	位置	層位	腹足綱			斧足綱																			
				アカニシ	ツメタガイ	フトヘナタリ科	シジミ属		ハマグリ		サルボウガイ		ハイガイ		フネガイ科		マガキ		オオノガイ		オキシジミ		カガミガイ?		シオフキ	
							L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
50次	SD02		最上層	6			431	488	51	58	12	14					15	17	2	2	1				2	
			中層	20		27	217	269	108	128	23	33					13	12	7	6	7	6			1	2
			下層	34	1	30	680	717	112	138	45	42			1		5	12	4	3	4				5	1
			形成中	6		17	60	95	17	25	2	4					2	4	5	10	2	5				1
49次	SD08	A区ブロックサンプル	貝層2	8		8	191	201	4	9				1		1				1	1		1			
50次	SD08	中央アゼ以东(3-41 b)	埋土上位貝層	2																						
		中央アゼ以东北西部	上位面				3	8		1	1															
		中央アゼ以东北東部	上位層	2			1		3	3																
		SK05 脇トレンチ	貝層中部				5	4																		
		SK05 脇トレンチ (SK05より北、集中部)		5		25											7	1	4	5						1

表5 見晴台遺跡出土の魚類・爬虫類・哺乳類

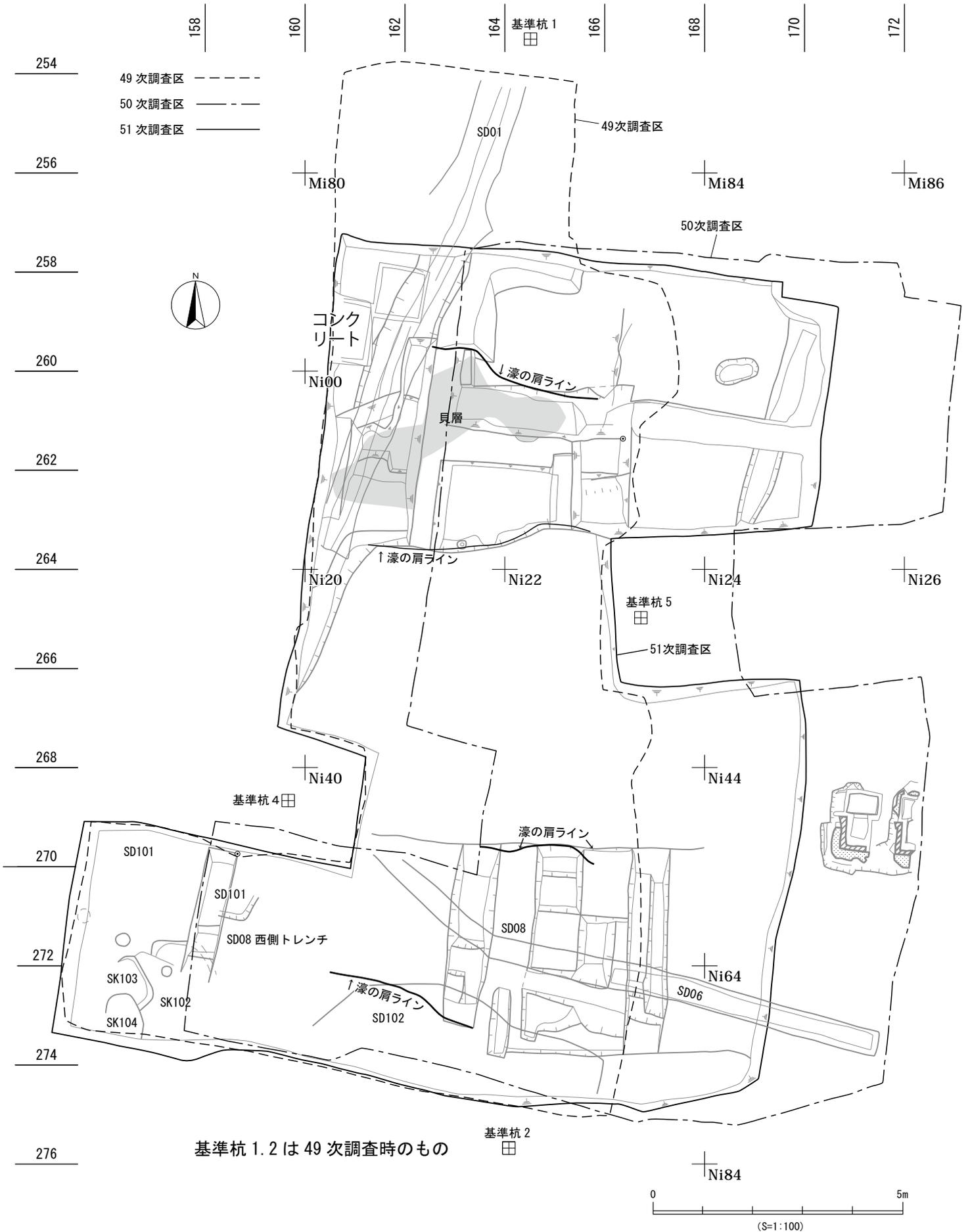
調査年次	収納番号	日付	出土地	遺構	土色	分類群	部位	点数			部分・状態	備考	
								L	R	不明			
49次	7-47	90806	A区南	環濠	SD08 トレンチ	黄褐色土層	ニホンジカ	角坐			1	落角	切断痕(角側)
49次	19-11	90805	A区南	環濠	SD08	黄褐色土層	ニホンジカ	角坐			1	落角	切断痕(角側)
49次	18-28a	90724	B区	高射砲陣地神社	階段	埋土	イノシシ	橈側手根骨	1			ほぼ完存	
49次	18-28b	90724	B区	高射砲陣地神社	階段	埋土	マクロ属	椎骨	1			椎体	
50次	1-5				SD02 西トレンチ	下層	哺乳綱	四肢骨			1	破片	一部被熱による炭化
50次					SD02 西トレンチ		クロダイ属	前上顎骨	1			破片	
50次					SD02	下層	鳥綱	大腿骨	1			遠位端	
50次	3-41a	100813		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东	埋土上位貝層	カモ科?	上腕骨	1			骨幹部	
50次	4-19	100806		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东東サプトレ内	上位層	哺乳綱	不明			8	破片	
50次	4-20	100801		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东(西南地点)	上位層	哺乳綱	四肢骨			1	破片	
50次	4-21	100804		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ東	南東部上面	ニホンジカ	椎骨	1			破片	第6頸椎(6-40と接合)
50次	6-27	100808		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东	西サプトレ	ニホンイシガメ	腹甲	1			破片	
50次	6-40			環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ東	南東部上面	ニホンジカ	椎骨	1			破片	第6頸椎(4-21と接合)
50次	6-41			環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东	南西部上位面	ニホンジカ	白歯	1			1/2欠	上顎、M1
50次	8-22	100807		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东	東サプトレ南上位	哺乳綱	四肢骨	1			破片	
50次	8-24	100807		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东	南西部上位面	イノシシ	下顎骨		1		破片	下顎頸部
50次	9-28	100806		環濠(49次と同じ)	SD08 中央アゼ以东	東サプトレ内(上位)	哺乳綱	四肢骨	3			破片	
50次					SD08 SK05脇・SK05北		哺乳綱	四肢骨			1	破片	
51次		110731		環濠(49次と同じ)	SD08 東・中央ベルト間	南東区掘り下げ2層黒褐色土および3層	哺乳綱	四肢骨			1	破片	
51次	a	110731		環濠(49次と同じ)	SD08 東・中央ベルト間	北西区掘り下げ2層黒褐色土	ニホンイシガメ	腹甲	1			破片	
51次	b	110731		環濠(49次と同じ)	SD08 東・中央ベルト間	北西区掘り下げ2層黒褐色土	哺乳綱	肋骨			1	近位端	カットマーク(肋骨頸付近、外面)
51次	8-24	110721		環濠(49次と同じ)	SD08 東・中央ベルト間		ニホンジカ	橈骨			1	近位端	
51次	14-6	110730		環濠(49次と同じ)	SD08 中央・東トレンチ間	北西区1層目淡褐色土(貝層混じる)	ニホンジカ	中節骨	1			ほぼ完存	
51次	6-4				SD02 北区・西トレンチ	下層貝層延長黒褐色層	哺乳綱	四肢骨			23	破片	
51次					SD01		哺乳綱	四肢骨			1	破片	近代



1.フトヘナタリ科 (SD02下層) 2.ツメタガイ (SD02下層) 3.アカニシ (SD02下層) 4.シジミ属左殻 (SD02中層) 5.ハマグリ左殻 (SD02中層) 6.サルボウガイ左殻 (SD02下層) 7.ハイガイ右殻 (SD08貝層2) 8.マガキ右殻 (SD02下層) 9.オオノガイ左殻 (SD02下層) 10.オキシジミ左殻 (SD02中層) 11.シオフキ左殻 (SD02中層) 12.マグロ属椎骨 (B区) 13.クロダイ属左前上顎骨 (SD02) 14.ニホンイシガメ腹甲 (SD08) 15.カモ科? 左上腕骨 (SD08) 16.ニホンジカ角 (SD08) 17.ニホンジカ第6頸椎 (SD08) 18.ニホンジカ中節骨 (SD08) 19.イノシシ左橈側手根骨 (B区)

第48図 見晴台遺跡出土の動物遺体

第 49・50・51次 調査平面図(A区 各次調査区の関係)



第49図 第49・50・51次 調査平面図 (A区 各次調査区の関係)

第6章 総括

1 調査の目標に対する成果と課題

調査テーマ 平成21年度から3か年の調査は、「弥生時代の環濠の実態を明らかにする」を調査のテーマに掲げて取り組んだものである。昭和39年（1964年）から開始された見晴台遺跡の調査は、第1次調査において台地東縁部で濠状遺構を検出し、その後の発掘調査を進めるにあたって、環濠集落というひとつのまとまりを解明するという明確な目標を生んだ。その後、台地西側や南側で濠を検出し、次第に環濠の様相が明らかになっていった。平成4年（1992年）の第31次調査では、2条存在していることが判明し、平成6年（1994年）の第33次調査では、内濠（濠1）と外濠（濠2）をつなぐ濠2Bが検出され、濠2A→濠2Bの前後関係が確認され、濠をめぐる事が単純でないことが明らかとなった。

また、第31次調査の西方の工事立会では、青銅器鑄造の際に使用されたと考えられる送風管の破片が出土したり、平成11年（1999年）の第39次調査では銅鐸の飾耳が1点出土したりした。こうした経緯から、居住地の北側を巡る環濠の規模や青銅器鑄造資料を得るため、第31次調査の西方に調査区を設定したのであった。3回にわたる調査では、青銅器鑄造資料は得られなかったが、第51次調査では、環濠（SD02）より青銅製品の小片が出土した。製品が何か不明であるが、今後の研究に期待したい。

このほかSD02から舟形土製品が出土した。「多くが海浜に立地する遺跡から出土」することから、「漁撈、製塩等直接海を生産の場とする人々の祭祀に用いられたもの」⁽¹⁾との考えが提示されている。あゆち潟との強い結びつきがあったのであろう。

環濠埋土の特色 調査の1年目にあたる、平成21年度は、近現代の掘り込みを検出・掘削し、環濠の一部を検出したところで終了となった。特に南側のSD08は地山の白色シルト塊を埋土としており、地山との区別が極めて困難であることがわかった。2年目、3年目は環濠の調査が主体となり、SD02ではサブトレンチを設けて一部の完掘に至った。以前より、濠埋土の中位層には、地山由来の白灰色シルトや黄橙色土の地山ブロック土を含む茶褐色土が堆積しており、濠掘削の際排出された土は、脇に積まれて土塁となっていたと想定していたが、今回のような地山と区別し難い白黄色シルト塊が堆積しているのは、土塁を崩した土以外に改めて地山を削って埋めたような印象を強く抱く。何がなんでも埋めなければならなかった「お触れ」のようなものが発せられたのであろうか。

貝殻の廃棄 SD02、SD08からは多量の貝殻が出土した。外濠にあたるSD02は、土層観察の結果、北側から廃棄されていることが判った。集落の外（北）側からの廃棄は、南側にSD08があるため、集落内から一端外に出て廃棄したとの考えと、北側の開析谷付近でむき身を行い、身の部分のみを集落内に持ち込んだとの考えが想定される。縄文時代の事例ではあるが、中里貝塚（東京都）ではストーンボイリングという方法で貝のむき身を取り出しており、焼け石が出土している⁽²⁾。今回の発掘調査でも磨石が焼けて赤化したものが出土しており、二次利用として同様な調理法が行われたとも考えられる。

多量の貝殻が出土し、ブロックサンプル以外に土嚢袋40袋分を採集した。小さい貝殻（二枚貝）が多いように思えたため、土嚢一袋分（貝類の重量約1449g）の貝殻を調べた。計測可能な二枚貝はわずかに36個（重量約71g）で、通常サイズのものであった（表2）。ただし、計測できなかった二枚貝には小ぶりなものもあった（現存殻幅 ハマグリ27～32mm、シジミガイ科13mm）。今日潮干狩りで使う道具（手

かぎ) や素手、踏み取り(海底を足の指先で探ってハマグリやオオノガイをとる漁法) で採集するならば、取捨選択の余地があると思うが、近現代漁具のジガキカゴやマンガ(万牙: 柄のついた鉄籠、竹籠) のようなもので一気に採ったのであろうか⁽³⁾。考古資料の縄文・弥生時代漁具としては、釣針や銚などが知られているが、貝の採集道具はいかなるものがあったのか、また、採った後「トオシカゴでふるい、死貝、稚貝は、その場で海へ落と」⁽⁴⁾ するようなことはしなかったのであろうか。今後の課題である。

また、貝刃が1点出土した。腹縁部端部及び内面に剥離による加工が認められる。貝は自然遺物との認識が強いため、採取資料の再確認は必要であろう⁽⁵⁾。

2 高射砲陣地に関する知見

第49次調査B区においてコンクリート製階段を検出したが、前年度に笠寺公園北東部で実施した試掘調査において、コンクリート製階段を検出していた。試掘調査では、電波標定機受信所の一部も検出し、両者共平成22年(2010)に報告した⁽⁶⁾が改めて述べておく。

(1) 営内神社

コンクリート製階段は、大隊本部の営内神社いすず神社の施設の一部である。社殿は宮大工出身の兵により作製されたという。いすず神社の「いすず」は、伊勢の五十鈴川から命名された第二大隊の通称名であるいすず隊から命名されたものである。資材不足のなか、直接的な戦闘施設ではない神社の階段にコンクリートを使用していることは、軍にとって精神的支柱として重要な位置を占めていた証である。また、笠寺陣地の中隊陣地では、今回調査したA区の南側付近にあったといわれる。この付近には敵機撃墜表彰柱が何本も建てられていたといわれている。戦後にあった春埜山神社の社が置かれていた小丘は、営内神社の再利用なのかもしれない。

営内神社については、坂井久能氏の研究により全国の営内神社の集成がなされ⁽⁷⁾、愛知県では歩兵第18聯隊(豊橋市)、豊橋陸軍教導学校(豊橋市)、名古屋陸軍幼年学校(春日井市)などが紹介され、痕跡も残っている。第3師団司令部(中区三の丸一丁目)やこのような要地地上防空部隊の陣地の事例など、まだ知られていない多くの営内神社が各地に存在しているものと予想される。史料や証言記録を補完する上で、現地の残存遺構調査や発掘調査が有効であることを示すことができた。

(2) 電波標定機

電波標定機の開発 電波標定機とは、陸軍が開発していた電波兵器のひとつである。防空は、「空襲に対する防衛戦闘であり、敵が空襲によって達成せんとする企図を完全に破砕することが目的」であった。このためにはまず「敵空軍の撃滅を企図」して、「来襲を予期される敵機の進攻を妨害し、之を速やかに捜索予報して防空準備を整」え、本土上空の敵機を撃墜しなければならなかった⁽⁸⁾。この際、敵機の発見をいち早くおこなうことが重要で、人間の目や耳の感覚を機械で補う兵器として対空双眼鏡、照空灯、聴音機の配備、要地から遠隔地に人員を配置する、防空監視哨の設置などに努めた。

しかし、航空機の発達は、高速化、夜間飛行など可能にし、その飛行緒元の測定も困難な状況であった。これを打開するために電波兵器が開発されるようになったのである。

昭和2年(1927)頃飛行機からの電波の反射を受ける研究が行なわれていたが途絶え、昭和11年(1936)



第50図 空中写真(米軍撮影) 笠寺陣地跡付近 左の森は笠覆寺
M158-A-6 139 1946年6月7日撮影 国土地理院所蔵



第51図 宮内神社 基壇・階段 第3師団司令部
(中区三の丸一丁目)



第52図 宮内神社 基壇上面 第3師団司令部



第53図 絵葉書 宮内神社 忠魂神社
野砲兵第3聯隊 (中区三の丸二丁目)



第54図 宮内神社 彌建神社 鳥居 歩兵第18聯隊 (豊橋市
今橋町)

に陸軍科学研究所により再開された。昭和14年（1939）に初めて飛行機の反射電波を捕えることに成功した。昭和15年（1940）には電波警戒機「甲」の試作が完成、次いで昭和16年（1941）秋には警戒機「乙」の試作機が完成した。これら警戒機は目標を発見するものであるが、これに対して標定機は、発見した敵機の緒元を電波によって測定するものであった。昭和14年（1939）頃から研究がすすめられ、昭和17年に至り、イギリスの資料をもとに住友通信工業株式会社と東京芝浦電機株式会社の試作機、Ⅰ型、Ⅱ型が完成したが、故障も多く30機ほど生産したところで製造中止となった。

その後イギリス、アメリカのレーダーを鹵獲し、住友通信工業でイギリス軍式、東芝でアメリカ軍式の試作を行い、昭和18年（1943）11月に完成した。イギリス軍式（Ⅲ型 タチ3号）は、量産して部隊に配備し、アメリカ軍式（Ⅳ型 タチ4号）は改良を進めた。Ⅱ型にウルツブルグ型標定機の長所を加えて改良し改Ⅳ型として生産配備したが、終戦となった⁽⁹⁾。

遺構 検出した遺構は、コンクリート製受信所とコンクリート製槽である。槽は、東西1.8m、南北1.6m、深さ0.90mである。コンクリート壁の厚さは、0.17mである。受信所は全体のおよそ西半分である。この施設は地下式で東側が円筒形、西側が方形の部屋を埋設したものである。西側には幅0.13m、高さ0.44mのコンクリート壁が囲んでいる。全体に地下部分はコンクリート製であるが、現状では天井屋根は失われているため、別の素材（木材等）で造られていたと考えられ、証言では屋根はトタンであったという。

西側部分は、現況で東西2.12m、南北3.42mで北端に南北幅0.64m東西長（現況）2.03m、深さ1.80mの長方形の縦穴があいている。また、中央東寄りにも小孔（推定0.25×0.50m）があいている。長方形の縦穴は、出入口と考えられ、床面に梯子（証言では木製階段）を留める突起があったことから、梯子（木製階段）を斜めに降ろして出入りしたものと思われる。縦穴の長辺脇には、方形孔が穿たれている。縦穴部分の屋根を支える柱穴であろう。検出したコンクリート床は、この面にあいていた小孔からなかにカメラを挿入して撮影したところ、部屋になっていたので、屋根にあたることがわかった。屋根の厚さは約0.25mと推定される。部屋の内部は大半が土砂で埋まっていた。また、同様にこの小孔から円筒形部分も撮影したところ、大半は土砂で埋まっている状況であった。

この円筒部分は、従来から道路が少し窪んでおり、また東端の一部は公園用地内に円形コンクリート縁の一部が露出していた。その規模は直径約8.0×7.0mである。その後公園整備事業により道は廃道となって現在は公園敷地となっている。

この施設で使用されていた電波標定機は、Ⅲ型と言われていたが、辻本光雄氏の証言からⅣ型であると証言を得た。その後米軍側資料により、やはりⅢ型の可能性が高まった⁽¹⁰⁾。

証言 電測隊といい、小隊長、分隊長、機長、方向（方位）、高低（角度）、通信2人など10人くらいで編成されていた。送信所と受信所の施設2か所で、送信所のほうは無人で電動（地中ケーブル線）で操作した。円筒形の屋根はこげ茶色のトタン屋根であった。Ⅳ型は、20kmから敵機を追従することができ、分隊長の「用意計れ」の号令で「直距離、航速、航路角」をとえ三角関数により高度を出した。その緒元（高度・航速・航路角）は高射砲中隊、照空中隊に電話で知らせた。

受信所の出入口の階段は、木製で急だったように思う。その南側の部屋は、通信室だった。電力設備は、発電機を置いていたと思う。施設の周囲に柵などはなかった。

その後いすず隊より2名、改造Ⅳ型研修のため、東京江戸川の河川敷に行き、帰隊後数か月で終戦となった。

写真資料 アメリカ軍が戦後日本に進駐してきた際撮影した写真には、高射砲陣地で撮影された写真があることが、工藤洋三氏の調査研究により明らかにされている。今回、貴重な写真を提供していただいた（第66図～第69図）。北海道室蘭市八丁平5丁目に構築された高平陣地には、高射砲第141聯隊の聯隊司令部、第1中隊、第2中隊があり、タチ3号送信機、受信機は聯隊司令部兵舎と第2中隊の間に構築されていた。

タチ3号送信機の写真（第66図）は、円形の半地下式コンクリート製構造物の中に送信機を収めた建物が建てられ、屋根の上に送信用アンテナが立っている。そして円形構造物に接して、切妻屋根の兵舎が建てられている。左側には、蓋が被せられている小型の円形のコンクリート製構造物がある。笠寺陣地では方形槽としたものと同じような機能があったのかもしれない。

タチ3号受信機の写真（第67図）は、平坦地の地上と同じ高さに屋根だけが見え、屋根の上にアンテナが立っている。送信機施設に隣接してあるような兵舎ははっきりしないので、地下室となっているかもしれない。

佐藤則之氏が撮影されたタチ3号送信機施設跡（第69図）は、このアメリカ軍撮影の送信機施設で、円形擁壁の内部や兵舎への取り付け部が映し出されている貴重な写真である。

笠寺陣地の送信機施設は、現在民家の敷地に位置し、家屋の基礎がコンクリートに載っていることから、地下に残っている。笠寺陣地の受信機施設が八丁平の受信機施設と同じ構造と思われることから、笠寺陣地の送信機施設も八丁平と同様と考えられる。しかし電動で操縦したことから兵舎は省略されていたかもしれない。

タチ3号送信機の地下施設及び送信機の写真（第68図）は、名古屋で撮影されたものである。高射砲第124聯隊に2か所、第125聯隊に2か所あった大隊本部のいずれかで撮影されたものであり、身近に感じる写真である。

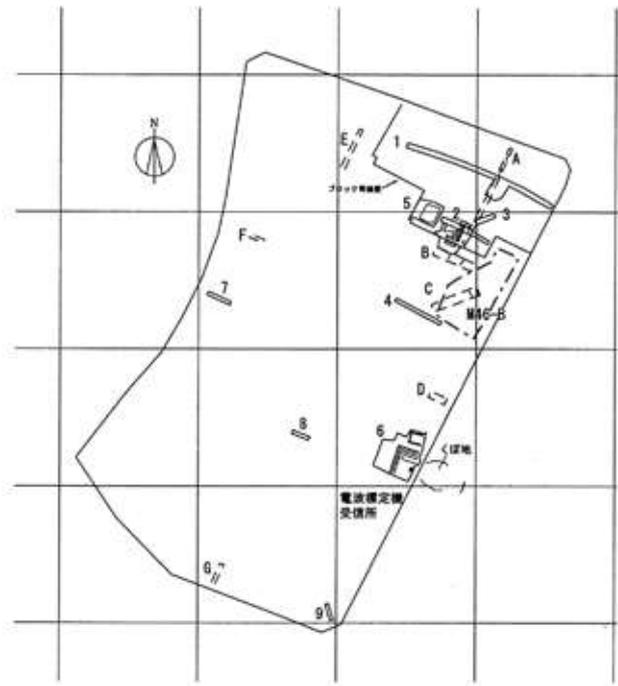
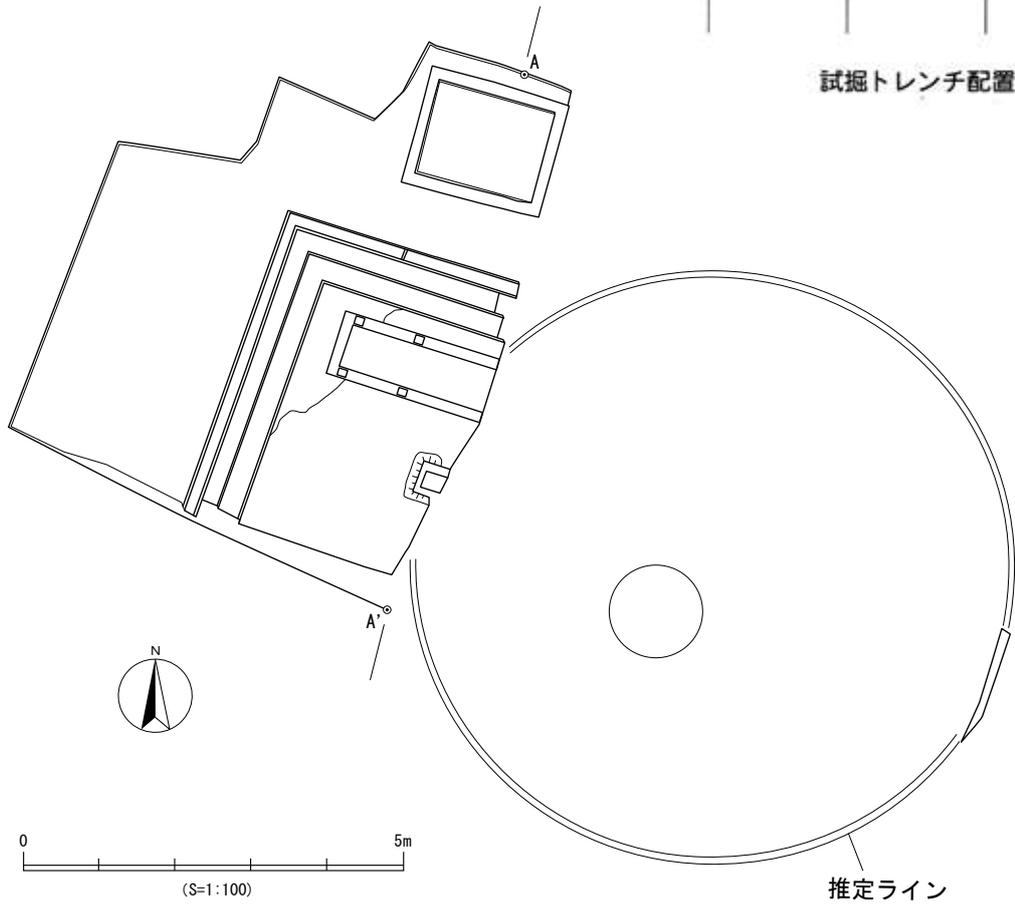
（3）炊事場跡（竈）

中隊陣地における炊事場の一部、竈2基を検出した。中隊陣地では、200人～300人の兵士が生活しており、大型のはそり鍋（平釜）を用いていたと推定される。直径100cmのはそり鍋の場合、米3升（30合）炊くとすると、約60人分となる。汁物なら180ℓ分できる⁽¹¹⁾。4、5基あれば1中隊分を同時に炊くことができるが、東海市名和町の名和・太佐山陣地（てんりゅう隊）の炊事場跡は、5基の竈跡（全長約675cm）が残っていることから、笠寺陣地でも3基以上あったと思われる。3基以下ならば、2交替制で調理飲食していたかもしれない。

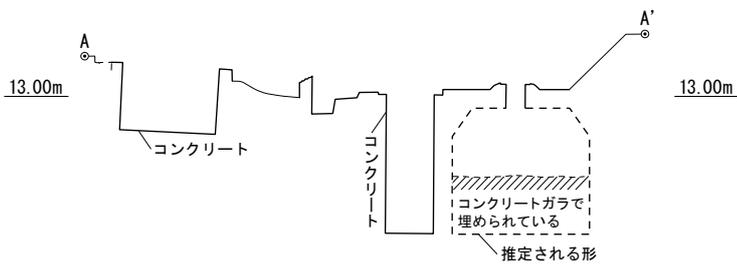
（4）まとめ

昭和19年（1944）、20年（1945）の名古屋の要地地上防空には、主として高射砲第124聯隊、高射砲第125聯隊が配備されていた。そのうち、高射砲大隊は、高射砲124聯隊は第1大隊（ふじ隊 汐止陣地 港区潮風町）、第2大隊（いすず隊 笠寺陣地 南区弥生町、見晴町、貝塚町）、高射砲第125聯隊は第1大隊（茶屋ヶ坂陣地 千種区揚羽町一丁目）、第2大隊（北練兵場陣地 北区名城二丁目）の4か所にあった。

電波標定機 平面図



試掘トレンチ配置図



第55図 電波標定機受信所 (試掘調査)



第56図 電波標定機受信所（西から）



第57図 電波標定機受信所（北から）



第58図 電波標定機受信所（東南から）



第59図 電波標定機受信所 出入口（西から）



第60図 電波標定機受信所 出入口（東から）



第61図 電波標定機受信所 小孔（西から）



第62図 電波標定機受信所 内部 通信室（東から）



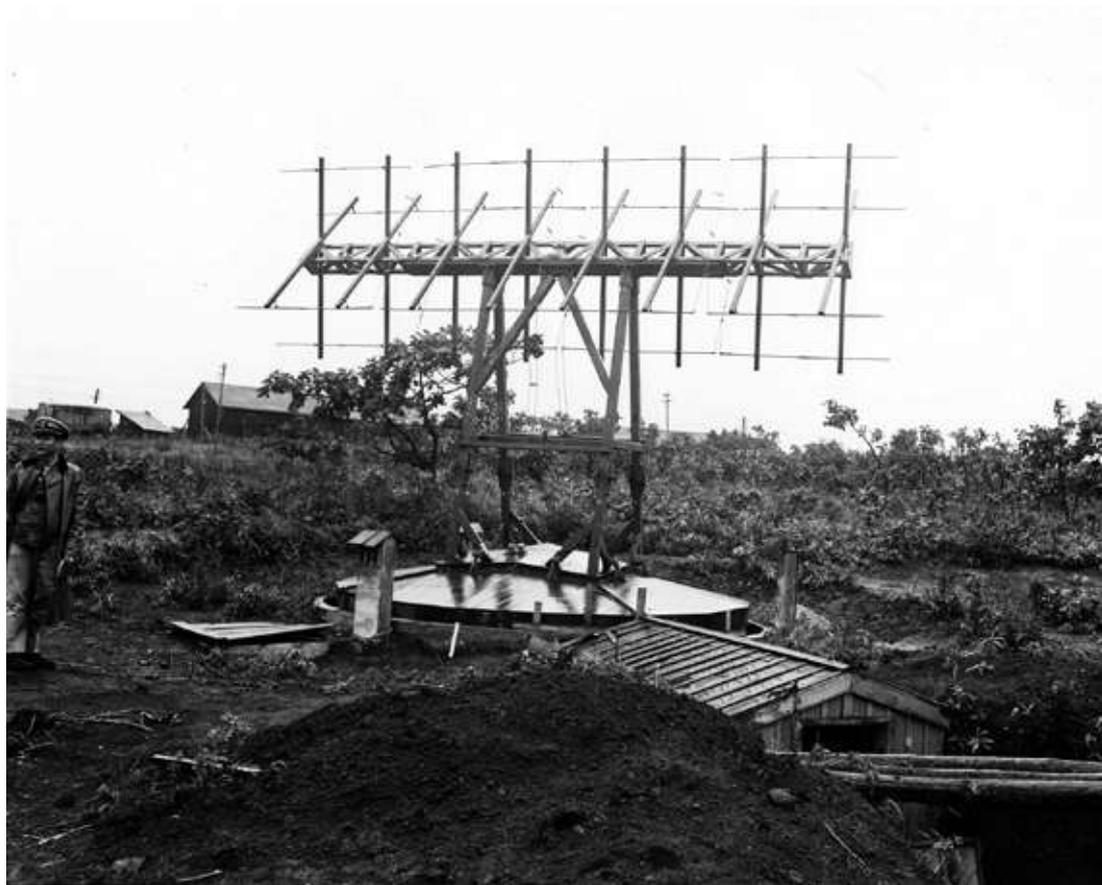
第63図 電波標定機受信所 内部 受信室（西から）



第64図 電波標定機受信所 内部 受信室（西から）



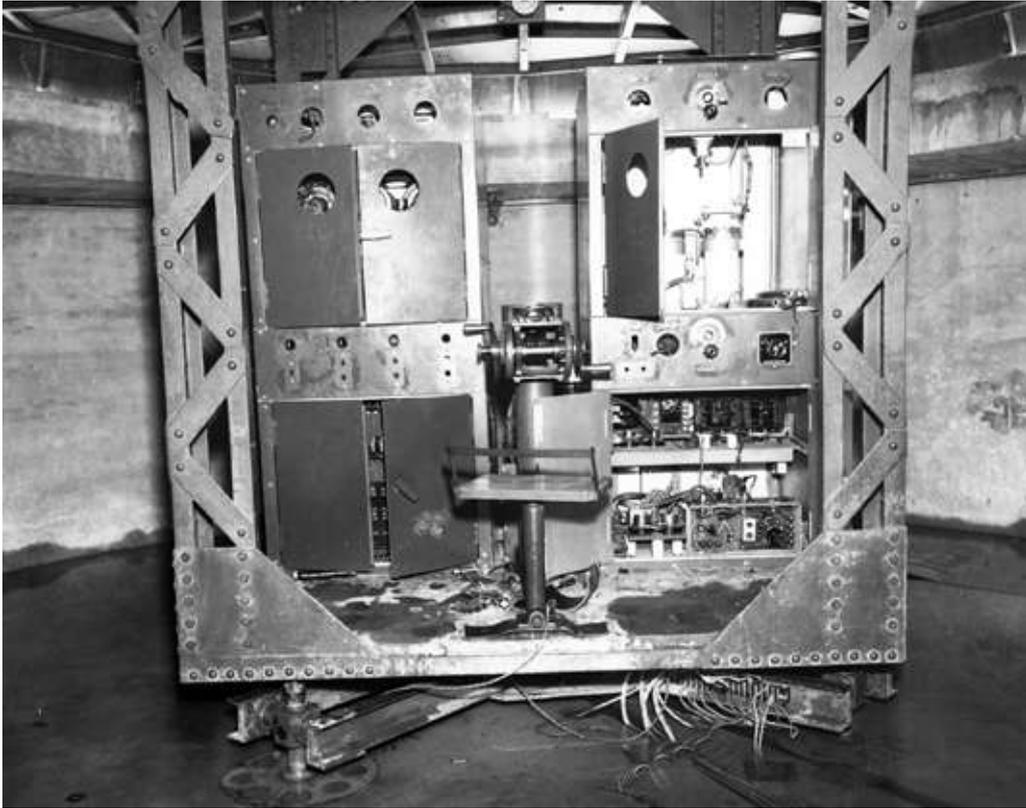
第65図 電波標定機受信所 方形槽（東から）



第66図 タチ3号送信機（米国立公文書館）1945年10月8日撮影 工藤洋三氏提供
北海道室蘭市八丁平5丁目、高平（栗山）陣地に設置されたもの



第67図 タチ3号受信機（米国立公文書館）1945年10月8日撮影 工藤洋三氏提供
北海道室蘭市八丁平5丁目、高平（栗山）陣地に設置されたもの



第68図 タチ3号送信機 地下部分（米国立公文書館）1945年10月30日撮影 工藤洋三氏提供
名古屋で撮影されたもの



第69図 宅地造成で現れたタチ3号送信機の遺構 2013年7月18日撮影 佐藤則之氏提供
北海道室蘭市八丁平5丁目、宅地造成した際に発見され、翌日撤去された。

高射砲大隊本部は、通信連絡を主な任務とし、砲台のような遺構がないため、注目されることは少なく、大隊数も少ないので遺構が把握されることがないのが現状である。その中にあって、笠寺陣地は遺構が残っている数少ない事例である。また笠寺陣地は、中隊陣地があり、セットで高射砲陣地の状況を知ることができる貴重な遺跡である。

註

- 1 久保寿一郎「舟形模造品の基礎的研究」『東アジアの考古と歴史 下』1987年 同朋舎
- 2 中里貝塚では、木枠付土坑（貝蒸し遺構）が出土しており、「採った貝は、ストーンボイリングと呼ばれる焼き石を使った調理法により、むき身にされたと考えられている」。HP「国史跡中里貝塚詳細解説4」（「国史跡中里貝塚」）北区／『史跡 中里貝塚 保存活用計画』2020年 東京都北区教育委員会
- 3 潮干狩りで使う手かぎの爪は3本が一般的で、岩場では1本爪が主に使用される。HP「あいちのあさり」（「あちは、あいちで、いただくぜ！」）愛知県農林水産部農林政策課
下之一色では、冬季に「船の上からカイマキカゴをひいて、貝をとる」貝捲きが行なわれ、昭和「戦前期から、カイマキカゴの代わりにマンガが使われるようになった。」貝の大きさは、ハマグリ殻長9cm、アサリ殻長3～4cm。夏季には地搔きが行なわれた。ジガキカゴは竹製であった。中の貝はウケカゴに移した。『名古屋の漁師町 下之一色』2004年 名古屋市博物館
腰マンガ漁では、乱獲を防ぐため、「マンガの目の幅を調整し、12mmより小さいアサリはすり抜けるようにして」いる。『広報たはら』2016年9月 愛知県田原市
- 4 『名古屋の漁師町 下之一色』2004年 名古屋市博物館
- 5 『新修名古屋市史 資料編 考古1』の45頁「長久寺遺跡」の写真1左下の貝、125頁「新宮坂貝塚」写真2の下段の貝などは、縁が破損しており貝刃のようにもみえる。
- 6 伊藤厚史「見晴台遺跡北西部の濠状遺構と北東部の高射砲陣地跡」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要第12号』2010年 名古屋市見晴台考古資料館
- 7 坂井久能「宮内神社等の創建」『国立歴史民俗博物館研究報告 第147集』2008年 国立歴史民俗博物館
- 8 『防空』1942年 ダイヤモンド社
- 9 『戦史叢書 本土防空作戦』1968年 朝雲新聞社／『高射戦史』1978年 田中書店
- 10 工藤洋三・鈴木梅治『アメリカが記録した室蘭の防空』によれば、タチ4号は、「一つの支持アームの上に、送信用アンテナと受信用アンテナを装備していた」ことから、笠寺陣地の電波標定機は、た号Ⅲ型（タチ3号）と考えられる。『高射戦史』230頁掲載の四型電波標定機は、Ⅲ型であろう。なお、「タチ」の「タ」は陸軍の多摩技術研究所（昭和18年7月設置）、「チ」は地上のことである。
- 11 HP「はそり釜」（「南陵日記」）常滑市南陵市民センター

引用・参考文献

伊藤厚史『見晴台遺跡発掘調査報告書 近代編』1992年 名古屋市見晴台考古資料館

伊藤厚史・野口泰子『見晴台遺跡発掘調査報告書 一遺構編一』1993年 名古屋市見晴台考古資料館

- 伊藤厚史「付編 笠寺高射砲陣地東半部の様相」『見晴台遺跡 第42・43次発掘調査の記録』2005年
名古屋市見晴台考古資料館
- 伊藤厚史「見晴台遺跡の高射砲陣地跡」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要第13号』2011年 名古屋市
見晴台考古資料館
- 伊藤厚史『見晴台遺跡 第44・45・46・47・48次発掘調査の記録』2014年 名古屋市見晴台考古資料館
- 伊藤正人・川合 剛『見晴台遺跡第31次発掘調査の記録』1993年 名古屋市見晴台考古資料館
- 伊藤正人『見晴台遺跡第32次・第33次発掘調査の記録』1996年 名古屋市見晴台考古資料館
- 加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年』2002年 木耳社
- 木村光一・村木 誠『見晴台遺跡第34・36・37・38次発掘調査の記録』1999年 名古屋市見晴台考古
資料館
- 木村有作・山田鉦一『見晴台遺跡第39・40・41次発掘調査の記録』2003年 名古屋市見晴台考古資料館
- 工藤洋三・鈴木梅治『アメリカが記録した室蘭の防空』2014年 工藤洋三
- 下志津修親会編『高射戦史』1978年 田中書店
- 名古屋市見晴台考古資料館編『講演会 見晴台遺跡発掘の現状と課題・将来の展望—32年間の総まとめ
— 資料集』1997年 名古屋市見晴台考古資料館
- 名古屋市見晴台考古資料館編『[特別展]よみがえる環濠集落—弥生時代後期の名古屋—』1998年 名古屋
市見晴台考古資料館
- 名古屋市見晴台考古資料館編『見晴台教室09 見晴台遺跡第49次発掘調査ニュース』2010年 名古屋市
見晴台考古資料館
- 名古屋市見晴台考古資料館編『見晴台教室10 見晴台遺跡第50次発掘調査ニュース』2011年 名古屋市
見晴台考古資料館
- 名古屋市見晴台考古資料館編『見晴台教室11 見晴台遺跡第51次発掘調査ニュース』2012年 名古屋市
見晴台考古資料館
- 林 英夫監修『愛知県の地名』1981年 平凡社
- 水野時二・林 董一・岩崎弥監修『なごやの町名』1992年 名古屋市計画局
- 水野裕之・服部哲也・村木誠・田原和美・伊藤厚史・稲田望子『埋蔵文化財調査報告書30 三王山遺跡(第
1～5次)』1999年 名古屋市教育委員会
- 宮腰健司「美濃・尾張の有稜高坏について」『2、3世紀の伊勢湾世界を探る』2018年 考古学フォーラム
- 村木 誠「付論2 高蔵遺跡の弥生土器—パレススタイル土器群を中心に—」『埋蔵文化財調査報告書45
高蔵遺跡(第1次)』2003年 名古屋市教育委員会
- 村木 誠「パレススタイル壺の動向—鋸歯文パレス壺の出現—」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要第
10号』2008年 名古屋市見晴台考古資料館
- 吉水亜紀子・千葉 毅「神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代前期貝塚出土動物遺体—横浜市上台遺跡
住居址内貝塚ブロックサンプルの分析—」『神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第43号』2016年
神奈川県立歴史博物館

表6 遺構一覧
第49次調査 A区

遺構名	検出層位	土色	規模 (長径×短径、深さ m)	底面水準値 (m)	出土遺物	時期	備考
P1	—	暗灰色土	0.30×0.35、-0.06	12.602			円形
P2	地山	暗灰色土	0.20×0.2、-0.04	12.709			円形
P3	地山	黄灰色土	—				
P4	黒褐色土	灰褐色土、黄灰色土塊多い	0.50×0.40、-0.08	12.509	土器		
P5	黒褐色土	灰褐色土、黄灰色土塊少ない	0.65×0.50、-0.06	12.468	磁器、土器	近現代	
P6	黒褐色土	灰褐色土、小石多い	0.35×0.18、-0.08	11.522	弥生土器		円形
P7	黒褐色土	灰褐色土、黒褐色土	0.25×0.35、-0.09	12.487	土器		円形
P8	黒褐色土	灰黄褐色土、黒褐色土	0.20×0.15、-0.09	12.516			円形
P9	黒褐色土	黄灰色土、黒褐色土	0.45×0.35、-0.16	12.556	瓦、弥生土器	近現代	円形
P10	黒褐色土	灰褐色砂、黒褐色土	0.40×0.30、-0.2	12.47	瓦、陶器		円形
P11	地山	暗灰黄褐色土	—		弥生土器		
P12	溝上面	暗灰色砂色土	—		土器		
P13	溝上面	灰褐色土、黒褐色土	0.40×0.25、-0.21	12.461	瓦、コンクリート	近現代	円形
P14	溝上面	灰褐色土、黒褐色土	0.80×0.60、-0.13	12.484			円形
P15	溝上面	灰黄褐色土、黒褐色土	—		弥生土器		
P16	地山	灰褐色土、黄色土ブロック	—				
P17	溝上面	淡茶褐色土、黄色土ブロック	0.30×0.20、—		土器		円形
SK01	地山	灰褐色土、砂質土	—		弥生土器、陶器	近現代	
SK02	地山	灰褐色土、砂質土	—		磁器、ガラス	近現代	
SK03	地山	灰褐色土、灰白色地山土塊	0.95×1.20、-0.16	12.231	弥生土器		円形
SK04	地山	黒灰色土、灰色砂質土多い	0.35×0.65、—				
SK05	—	黄橙色土、黄色砂	1.10×1.10、-0.48	12.078	弥生土器、釘	現代	方形
SK06	—	暗灰褐色土	0.50×0.40、-0.18	12.666			楕円形
SK07	—	黄灰色土、灰白色地山土塊	長さ1.50×幅0.50、—		ガラス、陶器	近現代	溝状
SK08	—	黄灰色土、灰白色地山土塊少し	1.20×1.10、—		タイル、基石	現代	方形、未掘
SK09	SD02埋土上面	灰褐色土、砂質土	0.95×0.6、-0.14	11.684	耐火煉瓦	現代	
SK10	地山	灰褐色土、黄色土ブロック	1.05×0.20、—		釘、土器	近現代	
SK11	SD02埋土上面	橙色土、黄色土ブロック	—		弥生土器		
SK12	地山	—	—				
SK13	地山	暗褐色土、円礫混じる	0.90×0.90、-0.24	12.609			方形
SK14	地山	橙褐色土	—		弥生土器		
SD01	—	灰褐色土	長さ9.85×幅0.80～0.90、-0.1～0.5	東端10.301、中央10.482、西端11.126	弥生土器、山茶碗、磁器ほか	近世以降	
SD02	—	黄褐色土	長さ5.80×幅4.00、—		弥生土器	弥生	環濠
SD03	—	灰黄褐色土、黒褐色土	3.00×0.40～0.65、-0.12	12.576	コンクリート、弥生土器、貝		北辺がSD08と一致
SD04	—	灰黄褐色土、灰白色地山土塊	長さ1.80×幅0.35、-0.02	12.441	土器、貝		
SD05	—	暗灰黄褐色土	長さ1.80×幅0.50、-0.13	12.326	陶器	近世以降	
SD06	地山	暗灰褐色土、灰白色地山土	長さ8.00×幅0.60、-0.41	11.920	通信ケーブル	太平洋戦争中	通信ケーブル線埋設溝
SD07	地山	灰黄褐色土、白色シルトブロック	長さ0.90×幅0.70、-0.32	12.143	土器		SD08の一部か
SD08	地山	黒褐色土、灰黄褐色土、白色シルトブロック	長さ11.00×幅3.00、—		弥生土器	弥生	環濠
SX01	—				瓦、タイルほか	現代	

第49次調査 B区

P1	地山	黒褐色土	0.10×0.10、-0.12	15.386			円形
P2	地山	黒褐色土	0.15×0.12、-0.01	15.382			円形
P3	地山	灰褐色土	0.20×0.15、-0.11	15.271			柱痕あり
P4	地山	黒褐色土と橙色土混じる	—				
攪乱1	地山	地山黄灰砂、黒褐色土ブロック密					
攪乱2	地山	地山黄灰砂、黒褐色土ブロック密					
攪乱3	地山	黒褐色土に灰黄色土少し混じる					

遺構名	検出層位	土色	規模 (長径×短径、深さ m)	底面水準値 (m)	出土遺物	時期	備考
攪乱4	地山	黒褐色土に灰黄色土少し混じる					
攪乱5	地山	黄灰色土					
攪乱6	地山	地山橙色ブロック、褐色土、石等混じる					
攪乱7	地山	粘質の橙色土、山砂混じる					
攪乱8	地山	灰褐色土、黒褐色土ブロック、橙色ブロック混じる					
攪乱9	地山	灰褐色土					溝状
攪乱10	地山	灰褐色土、堅く締まる					
攪乱11	地山	灰褐色土、黄色山砂					
攪乱12	地山	灰褐色土、砂、礫多い					
攪乱13	地山	灰褐色土、橙色土ブロック含む					
攪乱14	地山	灰褐色土、橙色土ブロック含む					
攪乱15	地山	灰褐色土、橙色土ブロック含む、礫、黄色砂					攪乱1、2に似る
SD01	地山	黒褐色土	長さ9.30×幅1.40～2.30、-0.334	北端14.961、中央14.897	弥生土器、磁器	弥生	南半は未完掘、方形周溝墓の周溝か
SD02	地山	黒褐色土	東西長1.30×幅0.25、南北長1.70×幅0.20、-0.07	15.10		弥生	L字状、住居跡の周溝か
SK01	地山	黒褐色土	南北7.5以上×東西1.2以上、-0.28	15.145	弥生土器	弥生	南側未掘

第50次調査

P101	地山	黄灰色砂、直径1cm砂利多い	0.40×0.38、—		プラスチック管	近現代	
P102	地山	黄灰色砂、直径1cm砂利多い	0.40×0.40、—			近現代	
P103	地山	黄灰色砂、直径2cm砂利多い	0.40×0.38、—			近現代	
P104	濠埋土	茶灰色砂質土、柱痕部灰白色砂	0.40×0.34、—			近現代	
P105	濠埋土	灰白色砂	0.40×0.34、—			近現代	
P106	地山	暗茶褐色シルト、地山ブロック多く含む	0.80×0.40、—				SD103と埋土似る
P107	地山	茶褐色シルト	1.40×0.70、—				
P108	地山	暗茶灰色土	—		陶磁器	近現代	位置不明
P109	地山	暗茶灰色土、地山等ブロック土多い	—		弥生土器	近現代	通信ケーブル線埋設溝を切る、位置不明
P110	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	0.30×0.30、—		磁器、ガラス	近現代	
P111	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	0.54×0.54、—		磁器、歯ブラシ	近現代	
P112	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	—			近現代	位置不明
P113	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	—		弥生土器、陶器	近現代	番号重複 (0.94×0.50、0.54×0.46)
P114	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	—		陶器、貝	近現代	番号重複 (0.60×0.28、0.40×0.32)
P115	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	0.58×0.38、—		弥生土器	近現代	
P116	地山	灰色土、地山等ブロック土多い	0.56×0.40、—		弥生土器、陶器	近現代	
P117	SD101上面	砂利石	0.24×0.24、—			近現代	
P118	SD101上面	砂利石	0.70×0.60、—			近現代	
P119	SD08上面	黒灰色土	0.48×0.34、—		弥生土器、釘	近現代	
P120	SX102上面	黒色土、均質	0.50×0.40、—		弥生土器、貝		SX102を切る
P121	地山	灰色土、上部を黄白粘土ブロックが覆う	1.52×0.34、—		弥生土器、貝	近現代か	SD104を切る
P122							注記無し
P123							注記無し
P124							注記無し
SX101	地山	茶褐色土	—			近現代	位置不明
SX102	地山SD08	黄色砂、橙色粘土、黒色粘土のブロック土	—				位置不明
SD101	地山	褐色土、淡褐色土	1.00×0.60、—		磁器、鍵、釘	近代	道跡
SD102	地山	褐色土	5.60×1.60、—		磁器、コンクリート	近現代	

遺構名	検出層位	土色	規模 (長径×短径、深さ m)	底面水準値 (m)	出土遺物	時期	備考
SD103	濠埋土・地山	暗茶色シルト、地山ブロック土多く含む	1.60×0.60、—		弥生土器、陶器、磁器ほか	近現代	
SD104	地山	茶灰色土均質	0.62×0.32、—		弥生土器	近世以降	
SK101	地山・濠埋土	上位赤褐色砂利、中位黄灰色土、下位黄灰色土	—		弥生土器、セメント建材		SK04と同じ、位置不明
SK102	地山	淡褐色土、褐色土、直径1～10cm大の地山多量	—				SD101に切られる、位置不明
SK103	地山	灰白色均質土	—				SK101、SD101に切られる、位置不明
SK04	—		1.08×0.70、—		弥生土器		49次SK04と別遺構

第51次調査 (第49次・第50次の遺構名を踏襲)

SK104	地山	褐色土	0.53×0.8、—				SD101に切られる
-------	----	-----	------------	--	--	--	------------

第51次調査 B区

SD01	地山	茶灰褐色土、黄灰白色土、灰褐色砂質シルト	長さ7.9×幅1.86、-1.64	9.96	弥生土器	弥生	
SD02	表土	灰色砂質土、明灰色砂質土、黄灰色砂質土			弥生土器、須恵器、山茶碗	近現代	
K1	灰黄色シルトブロック	白色シルト、灰褐色土のブロック土	長さ9.56×幅0.54、-0.82		弥生土器、タイル、ビニール袋	近現代	土管理設溝
K2	表土	灰褐色土			弥生土器、磁器、ガラス、瓦	現代	塩ビ水道管理設溝

表7 遺物観察表

第49次調査

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第20図-1	23-7 左上	弥生土器	壺	(10.0)	—	—	密	浅黄橙色、赤彩	良好	調整不明	口縁部内面に刺突文(不明瞭)、沈線	49次・A区SD02茶褐色土上層
第20図-2	21-1	弥生土器	直口壺	(11.6)	—	—	密	赤褐色断面灰白色、内外面赤彩	良好	内外面ハケ		49次・A区SD02茶褐色土下層
第20図-3	—	弥生土器	甗	—	—	—	粗 砂粒多い	にぶい黄橙色	良好	ナデ	口唇部に刺突文	49次・A区SD02 No.2
第20図-4	23-7 右上	弥生土器	壺	(14.8)	—	—	密	浅黄橙色、赤彩	良好	ナデ		49次・A区SD02茶褐色土上層
第20図-5	22-1	弥生土器	壺	14.1	—	—	密	灰白色	良好	内外面ナデ	残存3/4	49次・A区SD02茶褐色土上層
第20図-6	23-7 下	弥生土器	甗	—	—	—	密 0.1～0.2cm大の砂粒含む	外面橙色、内面淡黄色	良好	ハケ		49次・A区SD02茶褐色土上層
第20図-7	—	弥生土器	壺	—	—	(6.4)	密	灰白色	良好	外面板ナデ	内外面磨滅	49次・A区SD02検出中
第20図-8	—	弥生土器	鉢	—	—	—	密	外面黒斑内面浅黄橙	良好	外面ハケ		49次・A区SD02東トレンチ
第20図-9	21-2	弥生土器	ミニチュア土器	3.5	3.7	2.0	密	浅黄橙色	良好	手づくね		49次・A区SD02 No.3
第20図-10	21-3	弥生土器	壺	—	—	—	密 0.1～0.3cm大の白色砂粒少し含む	灰白色、赤彩	良好	調整不明	口縁部に羽状の刺突、竹管文	49次・A区SD02茶褐色土下層
第20図-11	—	弥生土器	高坏	(12.0)	—	—	密 0.1cm大の砂粒少し含む	浅黄橙色	良好	口唇部ヨコナデ、体部ヘラミガキ		49次・A区SD02茶褐色土下層
第20図-12	—	弥生土器	甗	—	—	—	密 0.2～0.3cm大の砂粒を少し含む	にぶい黄橙色	良好	ヨコナデ	口唇部に刺突文	49次・A区SD02茶褐色土下層
第20図-13	21-4	弥生土器	甗	(21.6)	—	—	密 0.1～0.3cm大の白色砂粒含む	浅黄橙色	良好	外面ハケ、内面ケズリ	高蔵式	49次・A区SD02東トレンチ No.22

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第20図-14	21-8	弥生土器	台付甕	—	—	—	粗 0.1~0.2cm大の砂粒含む	外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙	良好	脚部ハケ	内面に煤付着	49次・A区SD02(近世溝SD01底No.8)
第20図-15	21-5	弥生土器	台付甕	—	—	—	密 0.1~0.5cm大の砂粒少し含む	明黄褐色	良好	ナデ		49次・A区SD02(近世溝SD01 No.6)
第20図-16	—	弥生土器	台付甕	—	—	—	密 0.1~0.2cm大の白色砂粒含む	明褐色	良好	外面磨滅	1/3残存	49次・A区SD02
第20図-17	21-7	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面浅黄橙色、内面淡黄色	良好	外面ヘラミガキ、内面ナデ		49次・A区SD02 検出面~0.5m
第20図-18	21-9	弥生土器	高坏	—	—	—	密	淡黄色	良好	外面磨滅	三方透かし孔	49次・A区SD02東トレンチ No.17
第20図-19	21-6	弥生土器	高坏	—	—	—	密	浅黄橙色、赤彩	良好	外面ヘラミガキ	欠山式	49次・A区SD02 茶褐色土下層
第20図-20	22-7	弥生土器	ミニチュア土器	(6.2)	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面体部ヘラミガキ、口縁部外面、内面ヨコナデ		49次・SD01
第20図-21	22-2	弥生土器	壺	8.0	13.7	5.6	密	灰白色	良好	ナデ	黒斑	49次・A区SD08 No.29
第20図-22	—	弥生土器	高坏	(10.4)	—	—	密	外面橙色、内面灰白色	良好	ヘラミガキ	内面に黒斑	49次・A区SD08 No.33
第20図-23	22-3	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面橙色、内面浅黄橙色	良好	ハケ後ナデ		49次・A区SD08 No.41
第20図-24	—	弥生土器	壺	—	—	—	密 雲母含む	浅黄橙色	良好	調整不明	櫛描直線文、刺突文	49次・A区SD08 攪乱土層
第20図-25	—	弥生土器	壺	—	—	(5.0)	密	外面浅黄橙色、内面灰白色	良好	外面ヘラミガキ、内面ナデ		49次・A区SD08 No.32
第20図-26	—	弥生土器	壺	—	—	—	密 0.05~0.2cm大の白色砂粒含む	浅黄橙色	良好	内面ナデ	直線文と波状文	49次・A区SD08 No.36
第20図-27	—	弥生土器	壺	—	—	(7.2)	密	浅黄橙色	良好	ナデ		49次・A区SD08 No.40
第20図-28	—	弥生土器	甕	(16.0)	—	—	密 0.1~0.2cm大の砂粒含む	にぶい黄橙色	良好	外面ナデ、内面体部ヘラケズリ		49次・A区SD08 No.38
第20図-29	—	弥生土器	甕	(17.2)	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ハケ、内面板ナデ		49次・A区 SD08 攪乱土層
第20図-30	—	弥生土器	甕	(18.8)	—	—	密	浅黄橙色	良好	ハケ	口縁部に波状文	49次・A区 SD08 トレンチ黄褐色土層
第20図-31	22-5	弥生土器	ミニチュア土器	(3.5)	5.0	2.7	密	外面褐灰色、内面灰白色	良好	手づくね	外面に煤	49次・A区SD08 No.34
第20図-32	—	弥生土器	台付甕	—	—	—	密	灰褐色	良好	外面ケズリ、内面ナデ		49次・A区SD08 No.37
第20図-33	22-4	弥生土器	台付甕	—	—	8.0	密	灰白色	良好	ナデ		49次・A区SD08 No.30
第20図-34	—	弥生土器	器台	(24.2)	—	—	密	浅黄橙色	良好	ヘラミガキ		49次・A区SD08 No.39
第20図-35	22-6	弥生土器	蓋	—	—	摘み径5.2	密	灰白色	良好	ハケ		49次・A区SD08 No.35
第20図-36	23-5	弥生土器	高坏	—	—	—	密	灰白色	良好	磨滅	三方透かし孔(推定)	49次・A区北半遺構検出中
第20図-37	23-6	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面浅黄橙色、内面にぶい黄橙色	良好	ナデ	三方透かし孔	49次・A区攪乱
第20図-38	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密	浅黄橙色	良好	ナデ	三方透かし孔	49次・A区攪乱(SD02)

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第20図-39	23-4	弥生土器	高坏	—	—	—	密、白色粘土と橙色粘土混じる	浅黄橙色	良好	磨滅		49次・A区北端部
第20図-40	—	弥生土器	台付甕	—	—	5.6	密	外面にぶい橙色、内面にぶい褐色	良好	タテハケ		49次・A区攪乱坑
第20図-41	23-11	加工円盤	—	長径4.6×短径4.5	厚さ1.2	—	密	橙色、浅黄色	良好	縁部打ち欠き	弥生土器	49次・A区北端部
第20図-42	—	須恵器	脚付壺	(14.0)	—	—	密	灰白色	良好	ヨコナデ		49次・A区SD02 No. 10
第20図-43	—	須恵器	脚付壺	—	—	(8.75)	密	灰白色	良好	ヨコナデ		49次・A区SD02 検出面
第21図-1	—	弥生土器	壺	—	—	—	粗、白色砂粒多く含む	外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙	良好	ナデ	刺突文、楯描直線文	49次・A区SK11、50次・A区SD102 ベルトくずし3層
第21図-2	23-3	弥生土器	台付鉢	—	—	7.7	密	灰白色、外面赤彩	良好	ナデ		49次・A区西南部 土器の注記はSD05
第21図-3	23-8	発火具	火打金	長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm	—	—	—	—	—	—	錆化進行	49次・A区SX01
第21図-4	23-10	発火具	火打石	長さ2.8	幅2.3	重さ7.0g	—	—	—	—	養老瀧産チャート	49次・A区北端掘り下げ中
第21図-5	24-2	弥生土器	壺	(20.0)	—	—	やや粗、0.1～0.3cm大の砂粒を含む	外面浅黄褐色、内面灰白色	良好	外面磨滅	口縁部に羽状刺突文	49次・B区SD01
第21図-6	—	弥生土器	壺	—	—	(10.0)	粗	浅黄橙色	やや不良	調整不明	内面は剥離か	49次・B区SD01 上位
第21図-7	—	弥生土器	壺	—	—	—	密、0.2cm大の砂粒多く含む	外面にぶい黄褐色、内面浅黄褐色	良好	ナデ		49次・B区SD01 上位
第21図-8	—	弥生土器	壺	—	—	(5.0)	密、0.2～0.4cm大の砂粒含む	灰白色、内面橙色	不良	外面磨滅		49次・B区SD01 上位
第21図-9	—	弥生土器	甕	(14.4)	—	—	0.05～0.2cm大の砂粒含む	外面にぶい黄褐色、内面褐色	良好	板ナデ	黒斑、口唇部、頸部に刺突文	49次・B区SD01
第21図-10	—	弥生土器	台付鉢	(17.0)	16.3	8.2	粗	灰白色	やや不良	外面磨滅	山中式後半	49次・B区SD01 No. 9
第21図-11	24-7	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面にぶい赤褐、内面にぶい黄橙	良好	ミガキ	黒斑、三方透かし	49次・B区SD01 No. 3
第21図-12	24-5	弥生土器	高坏	—	—	(9.0)	密	浅黄橙色、赤彩	良好	ハケ	直線文、山中式	49次・B区SD01 No.15
第23図-13	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密 0.1～0.2cm大の白色砂粒を多く含む	外面淡橙色、内面灰白色、赤彩	良好	板ナデ	直線文、刺突文	49次・B区SD01 No.18
第21図-14	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密、0.1～0.2cm大の白色砂粒含む	外面にぶい赤褐色、内面橙色	良好	ナデ	黒斑	49次・B区SD01 No. 6
第21図-15	—	弥生土器	蓋	—	—	—	粗	にぶい黄褐色	良好	ナデ		49次・B区SD01 No. 1
第21図-16	—	弥生土器	蓋	—	—	—	密	外面浅黄橙、内面にぶい黄橙	良好	調整不明	穿孔あり	49次・B区SD01
第21図-17	24-9	石器	石斧	最大幅5.95	残存長4.1	最大厚1.85	重量83.2g	—	—	磨製		49次・B区SD01
第21図-18	24-8	石器	磨石	長17.0短9.8	厚さ6.8	重さ1209g	砂岩、白色砂粒多く含む	灰褐、にぶい橙	—	—	焼けている	49次・B区 SD01

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第21図-19	—	弥生土器	壺	—	—	(8.2)	粗、0.1～0.3cm大の砂粒含む	にぶい黄橙色	不良	粘土紐巻き上げ痕	内面に赤色痕	49次・B区SK01 No.11
第21図-20	—	弥生土器	壺	—	—	(10.4)	密、0.05～0.2cm大の白色砂粒含む	淡黄色	やや不良	調整不明	内外面磨滅	49次・B区SK01 No.12
第21図-21	24-1	弥生土器	壺	3.8	7.4	2.6	やや密	浅黄橙色、赤彩	良好	ナデ	山中式	49次・B区SK01 No.7
第21図-22	—	弥生土器	甗	(25.3)	—	—	粗、0.1cm大の砂粒含む	浅黄橙色	良好	調整不明		49次・B区SK01 No.13
第21図-23	25-4	弥生土器	台付甗	—	—	(9.7)	密	明黄褐色	良好	板ナデ		49次・B区SK01 No.4
第21図-24	25-5	弥生土器	高坏	(23.0)	—	—	粗	外面浅黄橙色、内面にぶい黄褐色	良好	調整不明		49次・B区SK01 No.3
第21図-25	25-3	弥生土器	小型鉢	(8.6)	—	—	密	褐灰色	良好	外面ハケ	口縁部を内側に折る	49次・B区 SK01
第21図-26	25-7	弥生土器	器台	—	—	(11.4)	密	浅黄橙色	良好	直線文	三方透かし孔	49次・B区 SK01 No.1
—	22-8左上	—	加工円盤	長3.2 短3.0	厚さ0.8	—	密	外面暗褐色、内面にぶい黄橙	良好		常滑産陶器	49次・A区SD01
—	22-8中	山茶碗	碗	—	—	—	密	灰黄	良好			49次・A区SD01
—	22-8右下	中世陶器	—	—	—	—	密	灰白色	良好			49次・A区SD01
—	22-8右上	磁器	小碗	—	—	—	密	白色	良好			49次・A区・SD01
—	22-8左下	陶器	土瓶	—	—	—	密	断面灰白色	良好		灰釉、煤付着	49次・A区SD01
—	22-9左上	弥生土器	壺	—	—	—	粗、0.1～0.2cm大の砂粒含む	浅黄色、外面赤、赤彩	良好	外面ヘラミガキ		49次・A区SD08 黄褐色土
—	22-9左下	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面灰赤色、内面明赤褐色、赤彩	良好	外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ		49次・A区SD08 黄褐色土
—	22-9中上	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面赤色、内面灰白色、赤彩	良好	外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ		49次・A区SD08 黄褐色土
—	22-9中下	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面赤橙色、内面赤橙色、赤彩	良好	外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ		49次・A区SD08 黄褐色土
—	22-9右	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面にぶい赤橙色、内面灰白色、赤彩	良好	外面ヘラミガキ、内面ナデ		49次・A区SD08 黄褐色土
—	23-2	弥生土器	甗	—	—	—	粗	浅黄橙色	良好	ハケ		49次・A区SK08
—	23-9左	弥生土器	壺	—	—	—	密	橙、赤彩	良好	調整不明	羽状文	49次・A区表土除去中
—	23-9右	弥生土器	高坏	—	—	—	粗 0.5～1.0mm大白色砂粒混じる	橙、外面赤褐色、赤彩	良好	外面ヨコナデ、ヘラミガキ、内面ナデ	波状文	49次・A区表土除去中
—	23-12右上	磁器	湯飲	7.6	—	—	密	乳白色	良好	透明釉		49次・A区北半検出
—	23-12右下	磁器	小坏	5.1	4.0	4.8	密	乳白色	良好	白色釉		49次・A区北半検出
—	23-12中	磁器	坏	5.9	3.1	2.7	密	白色	良好		透明釉、見込に「寿し白米 青森市大和田精米所」	49次・A区北半検出
—	23-12左	陶器	皿	—	3.0	2.4	密	白灰色	良好	削出高台、外面回転ヘラケズリ	透明釉	49次・A区表土

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
—	25-8	玩具	ラバー ドール 象	—	—	—	—	浅黄色、 彩色	—	—	体部欠損	49次・B区表土
—	25-9	土製品	貝形	—	1.7	3.0	密	灰白色	良好		重さ 11.2g	49次・B区溝状攪 乱土

第50次調査

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第29図-1	27-3上	弥生土器	壺	(11.2)	—	—	やや密	内外面に ぶい橙色	良好	外面 ナ デ、内面 ヘラミガ キ	黒斑 山中式	50次・SD02西ト レンチ
第29図-2	26-4、5	弥生土器	壺	(16.1)	—	6.0	密	にぶい橙 色	良好	口縁部ヨ コナデ、 体部ヘラ ミガキ、 内面ヘラ ケズリ	山中式	50次・SD02 西側 トレンチNo.13 No.8
第29図-3	26-2	弥生土器	短頸壺	6.4	(13.6)	—	やや密	橙色	良好	外面調整 不明、内 面板ナデ	欠山式	50次・SD02 西側 トレンチNo.2
第29図-4	26-1	弥生土器	短頸壺	6.6	16.5	4.3	密	外面淡橙 色、灰白 色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面ナデ	欠山式	50次・SD02 西側 トレンチNo.5
第29図-5	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面浅黄 橙色、明 黄褐色、 内面浅黄 橙色	良好	調整不明	櫛描 直線文 波状文	50次・SD02 No.8
第29図-6	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	灰白色	良好	調整不明	山形文	50次・SD02 西側 トレンチNo.2
第29図-7	26-3	弥生土器	小型壺	—	(5.4)	3.7	密	外面橙 色、内面 青黒色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面ナデ		50次・SD02 No.10
第29図-8	—	弥生土器	ミニチュ ア土器	—	残存 高 2.5	—	密	灰白色	良好	調整不明		50次・SD02 試掘 トレンチ 黒色土
第29図-9	—	弥生土器	壺	—	—	(5.7)	密	外面浅黄 橙色、内 面灰白色	良好	ヘラミガ キ		50次・SD02西側ト レンチNo.13の下
第29図-10	—	弥生土器	壺	—	—	(5.0)	やや密	内外面に ぶい黄橙 色、赤彩	良好	ナデ		50次・SD02
第29図-11	—	弥生土器	壺	—	—	(5.1)	密	外面浅黄 橙色、内 面にぶい 黄橙色	良好	外面ヘラ ミガキ?		50次・SD02 黒色 土
第29図-12	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面淡赤 橙色、内 面灰白色	良好	調整不明		50次・SD02試掘
第29図-13	—	弥生土器	壺	—	—	(8.25)	やや粗	外面浅黄 橙色、内 面黄褐色	良好	外面 ハ ケ、内面 ナデ	黒斑	50次・SD02 No.2
第29図-14	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	内外面浅 黄橙色	良好	調整不明		50次・SD02西側ト レンチ、SD02検出 中
第29図-15	—	弥生土器	壺	—	—	(5.4)	密	外面橙 色、内面 浅黄橙色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面ヘラ ケズリ		50次・SD02西ト レンチ
第29図-16	—	弥生土器	甗	(19.7)	—	—	密	橙色	良好	ヨコナデ	刺突文 欠山式	50次SD02 西側ト レンチNo.13
第29図-17	27-3左下	弥生土器	甗	—	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面橙色	良好	外面調整 不明、内 面口縁部 ハケ、体 部ヘラケ ズリ		50次・SD02 黒色 土
第29図-18	27-2	弥生土器	台付甗	—	—	6.0	密	外面灰白 色、内面 浅黄橙色	良好	外面ハケ	欠山式	50次・SD02西ト レンチ検出面～20cm
第29図-19	—	弥生土器	台付甗	—	—	(9.85)	密	にぶい橙 色	良好	調整不明	山中式	50次・SD02 西側 トレンチNo.11

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第29図-20	27-3右下	弥生土器	鉢	—	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面灰白色	良好	口縁部ヨ コナデ、 外面ハケ	受口状口縁 外面刺突文 欠山式	50次・黒色土検出
第29図-21	—	弥生土器	高坏	(32.3)	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ナデ、 内面ヘラ ミガキ	山中式	50次・SD02 西ト レンチNo.4
第29図-22	26-6	弥生土器	高坏	(17.3)	—	—	密	橙色	良好	内外面ヘ ラミガキ	欠山式	50次・SD02 西側 トレンチNo.1
第29図-23	—	弥生土器	有稜高 坏	—	—	—	密	橙色	良好	内外面ヘ ラミガキ	欠山式	50次・SD02 西側 トレンチNo.11
第29図-24	—	弥生土器	有稜高 坏	(23.2)	—	—	密	浅黄橙色	良好	内外面ヘ ラミガキ	欠山式	50次・SD02 西側 トレンチNo.11
第29図-25	26-7	弥生土器	高坏	—	—	(14.7)	密	橙色	良好	外面調整 不明	櫛描 直線文	50次・SD02 No.6、No.7
第29図-26	26-8	弥生土器	高坏	—	—	—	やや密	橙色	良好	外面調整 不明、内 面ナデ	三方透かし 孔	50次・SD02 西側 トレンチNo.6
第29図-27	26-10	弥生土器	高坏	—	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面ナデ	2段 三方透かし 孔	50次・SD02 西側 トレンチNo.9
第29図-28	26-11	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面橙色	良好	ヘラミガ キ	三方透かし 孔	50次・SD02 西側 トレンチNo.10
第29図-29	—	弥生土器	高坏	—	—	—	やや密	浅黄橙色	良好	外面調整 不明	透かし孔	50次・SD02 No.4
第29図-30	—	弥生土器	高坏	—	—	—	やや密	浅黄橙色	良好	ヘラミガ キ	透かし孔	50次・SD02最上層
第29図-31	27-1	弥生土器	高坏	—	—	—	やや密	浅黄橙色	良好	外面調整 不明	三方透かし 孔	50次・SD02 西側 トレンチNo.3
第29図-32	26-9	弥生土器	高坏	—	—	—	密	にぶい黄 橙色	良好	ヘラミガ キ	透かし孔	50次SD02 西側ト レンチNo.9
第29図-33	—	弥生土器	高坏	—	—	(14.0)	密	外面浅黄 橙色、内 面橙色	良好	調整不明		50次・SD02 番号 取上げ3
第29図-34	—	弥生土器	器台	(18.9)	—	—	やや密	内外面橙 色	良好	調整不明		50次・SD02西側ト レンチ
第29図-35	—	須恵器	脚付壺	—	—	—	密	灰黄橙色	良好	外面調整 不明		50次SD02上面
第30図-1	—	弥生土器	壺	9.1	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面灰白色	良好	内外面ハ ケ		50次・SD08 中央 アゼ東 上面、南 東部
第30図-2	—	弥生土器	壺	(12.35)	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面淡黄色	良好	ヘラミガ キ		50次・SD08 中央 アゼ東 北西上位 貝層中
第30図-3	—	弥生土器	壺	(9.2)	—	—	密	灰白色	良好	ヘラミガ キ		50次・SD08 中央 アゼ東上面
第30図-4	27-5	弥生土器	台付鉢	—	—	—	密	外面赤色、 内面橙色、 赤彩	良好	ヘラミガ キ		50次・SD08 中央 アゼ以東 東サブ トレ南上位
第30図-5	27-4	弥生土器	壺	—	—	—	密	浅黄色	良好	ヘラミガ キ		50次・SD08 中央 アゼ南東部上面
第30図-6	—	弥生土器	壺	—	—	(3.85)	密	外面灰白 色、内面 浅黄橙	良好	ヘラミガ キ		50次・SD08 上位
第30図-7	—	弥生土器	壺	—	—	5.5	やや粗	淡灰褐色	良好	外面ハケ		50次・SD08 アゼ 以東 上位貝層
第30図-8	—	弥生土器	高坏	(21.2)	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面灰白色	良好	ヘラミガ キ		50次・SD08 中央 アゼ東 北西部上 位
第30図-9	27-6右上	弥生土器	高坏	(21.4)	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ヨコ ナデ、内 面ヘラケ ズリ		50次・SD08 中央 アゼ東 東サブト レ上位層
第30図-10	27-6左	弥生土器	高坏	—	—	(15.3)	密	灰白色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面ハケ	山中式	50次・SD08 中央 アゼ東 東サブト レ上位層
第30図-11	27-8	弥生土器	高坏	—	(13.9)	—	密	浅黄橙色	良好	ヘラミガ キ	透かし孔	50次・SD08 中央 アゼ以東 南西部 上位貝層
第30図-12	27-9	弥生土器	蓋	(9.7)	4.35	—	密	浅黄橙色	良好	ヘラミガ キ	穿孔	50次・SD08 中央 アゼ東 北東上位 貝層
第30図-13	—	弥生土器	甕	(17.6)	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ハケ、 内面ヘラ ケズリ		50次・SD08 SD08 西 上面検出中

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第30図-14	—	弥生土器	甗	(21.35)	—	—	密	外面灰白色、内面浅黄橙色	良好	外面ハケ、内面ヘラケズリ		50次・SD08 SK05 脇トレンチ 貝層より上位
第30図-15	28-1	弥生土器	小型台付甗	(9.3)	—	—	密	灰白色、黄灰色	良好	外面ハケ、内面ヘラケズリ	黒斑	50次・SD08 中央アゼ以東 上面貝層中
第30図-16	27-7	弥生土器	台付甗	—	—	7.4	密	橙色	良好	ハケ		50次・SD08 トレンチ (SK05脇)、SK05
第30図-17	27-2右	弥生土器	台付甗	—	—	(7.0)	密	灰白色、灰色	良好	ハケ	黒斑	50次・SD08 中央アゼ東 北東上位貝層
第30図-18	27-6右下	弥生土器	鉢	(15.35)	—	—	密	にぶい橙色	良好	外面ハケ、内面板ナデ		50次・SD08 中央アゼ東 東サブトレ上位層
第30図-19	28-2左	弥生土器	台付甗	—	—	(7.65)	密	灰白色	良好	ヨコナデ		50次・SD08 中央アゼ東 北東上位貝層
第30図-20	27-10	土製品	紡錘車?	—	—	—	密	浅黄橙色、黄灰色	良好	ヘラナデ	黒斑	50次・SD08 中央アゼ以東上位面
第30図-21	27-11	土製品	不明	全長3.4	直径1.6~1.85	重さ9.39g	密	橙色	良好	ナデ		50次・SD08 SK05 脇トレンチ
第30図-22	27-12	土製品?	—	—	—	—	やや粗	にぶい黄橙色	良好	調整不明		50次・SD08、SK05
第30図-23	—	弥生土器	壺	—	—	(4.8)	密	橙色	良好	外面ヘラミガキ、内面板ナデ?		50次・SD01 西壁 清掃中
第30図-24	—	弥生土器	台付甗	—	—	(8.8)	密	灰白色、淡橙色	良好	外面ハケ		50次SD01
第30図-25	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密	橙色	良好	調整不明		50次・SD01 西壁 清掃中
第30図-26	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密	橙色	良好	調整不明		50次・SD01 清掃中
第30図-27	28-5左	中世陶器	甗	—	—	—	やや粗	外面褐灰色、内面にぶい赤褐色	良好	ヨコナデ	常滑産	50次・SD01 西壁 清掃中
第30図-28	28-5右	山茶碗	碗	—	—	(8.1)	やや密	灰白色	良好	ヨコナデ	高台に粉殻痕	50次・SD01
第30図-29	—	須恵器	坏身	—	—	—	密	にぶい黄橙色	やや良	ヨコナデ、底面回転糸切		50次・SD01
第30図-30	—	弥生土器	台付甗	—	—	(7.1)	密	にぶい橙色	良好	調整不明		50次・SD103
第30図-31	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密	橙色	良好		三方透かし孔	50次・SD103
第30図-32	—	弥生土器	高坏	—	—	—	密	浅黄橙色	良好	調整不明	山中式	50次SD103
第30図-33	—	弥生土器	壺	—	—	(4.85)	密	外面にぶい赤褐色、内面灰白色、赤彩	良好	外面ヘラミガキ、内面板ナデ		50次・SD101 北部トレンチ下位
第30図-34	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	浅黄橙色	良好	ナデ		50次・北端
第30図-35	—	弥生土器	壺	(15.6)	—	—	密	淡褐色	良好	ナデ		50次・清掃中
第30図-36	—	弥生土器	壺	—	—	6.7	やや粗	淡灰褐色	良好	ナデ	黒斑	50次 清掃中
第30図-37	—	弥生土器	壺	—	—	—	やや粗	淡褐色	良好	外面調整不明、内面ヘラナデ		50次・排土
第30図-38	—	弥生土器	鉢	—	—	—	密	にぶい橙色	良好	ヨコナデ		50次・SD102 東部アゼ西脇トレンチ
第30図-39	—	弥生土器	台付甗	—	—	(8.6)	やや密	にぶい黄橙色	良好	外面ヨコナデ		50次・SD102
第30図-40	—	弥生土器	壺	—	—	(6.15)	やや密	灰白色	良好	内面板ナデ		50次・P119
第30図-41	—	弥生土器	甗	—	—	—	密	外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色	良好	外面ハケ、内面ヘラケズリ		50次・SD102
第30図-42	28-3	弥生土器	甗	(17.0)	—	—	やや密	浅黄橙色	良好	外面ハケ、内面ヘラケズリ		50次・SD06

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第30図-43	28-9	電気コード	—	直径12mm	—	—	—	—	—	—	電纜	50次・SD06
—	28-7	磁器	小鉢	12.1	4.9	5.0	密	灰白色	良好	—		50次・P111
—	28-8	衛生用品	歯ブラシ	長15.8 幅1.1	厚さ0.45	—	—	灰黄褐色	—	—	「資生堂シセイ歯刷子」	50次・P111

第51次調査

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第45図-1	30-3	弥生土器	壺	(11.8)	—	—	密	赤色、赤彩	良好	ヘラミガキ		51次・A区SD02 北トレンチ 貝層
第45図-2	29-2	弥生土器	壺	12.1	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ヨコナデ		51次・A区SD02 西トレンチ
第45図-3	29-1	弥生土器	長頸壺	8.1	12.65	2.45	密	浅黄橙色、一部 橙色	良好	ヘラミガキ	ほぼ完形	51次・A区SD02 北トレンチNo.2
第45図-4	29-3	弥生土器	長頸壺	(7.05)	12.95	4.0	密	橙色	良好	ヘラミガキ		51次・A区SD02 西トレンチ 上層 貝層の下層南
第45図-5	30-8	弥生土器	壺	(28.4)	—	—	密	外面赤褐色、黒褐色、 内面橙色、黒褐色、 赤彩	良好	内面ヘラミガキ、 ハケ	北陸系か	51次・A区SD02 西トレンチ下層貝層
第45図-6	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	淡黄色、赤彩	良好	ヨコナデ		51次・A区SD02 中央トレンチ上層 貝層上黄白色土層
第45図-7	—	弥生土器	壺	—	—	—	密	浅黄橙色	良好	ヨコナデ	羽状文	51次・A区SD02 西区 上層(貝層)
第45図-8	29-4	弥生土器	壺	15.5	—	—	密	外面橙色、内面 浅黄橙色	良好	外面ヘラミガキ、 内面ユビナデ		51次・A区SD02 西トレンチ 土器 1、2、西部上層 貝層の下層北側
第45図-9	29-5	弥生土器	短頸壺	(8.9)	12.65	(3.8)	密	灰白色、内面一部 橙色	良好	調整不明	黒斑	51次・A区SD02 西トレンチ 上層 貝層下 黒褐色土層
第45図-10	—	弥生土器	壺	(15.65)	—	—	密	橙色	良好	外面ヘラケズリ、 内面ヘラミガキ		51次・A区SD02 北トレンチ No.1
第45図-11	30-1	弥生土器	小型壺	—	—	—	密	外面赤色、内面 橙色、赤彩	良好	ヘラミガキ	山中式	51次・A区SD02 北トレンチ下層貝層
第45図-12	—	弥生土器	小型壺	—	—	(3.05)	密	浅黄橙色	良好	調整不明		51次・A区SD02 西トレンチ 上下 貝層間
第45図-13	—	弥生土器	壺	—	—	4.2	密	外面浅黄橙色、内面 灰白色	良好	外面ヘラミガキ、 内面ハケ		51次・A区SD02 西トレンチ 土器 4
第45図-14	29-6	弥生土器	壺	—	—	5.9	密	灰白色、浅黄橙色、 明褐色、赤彩(赤褐色)	良好	外面ハケ 内面板ナデ	鋸歯文(赤彩)、 櫛描直線文、 欠山～元屋敷式	51次・A区SD02西部 断割上層貝層、 西トレンチ土器 15、16、西区南側 上層(貝層より南側)
第45図-15	30-6	弥生土器	壺	—	—	6.65	密	灰白色、淡黄色	良好	ハケ		51次・A区SD02 西トレンチ 上層 貝層下の黒褐色土
第45図-16	30-5	弥生土器	壺	—	—	8.2	密	浅黄橙色	良好	ハケ、内面 ナデ		51次・A区SD02 北トレンチ 土器 7
第45図-17	30-7	弥生土器	壺	—	—	(3.45)	密	外面浅黄橙色、内面 暗灰色、赤彩	良好	ヘラミガキ、 内面板ナデ		51次・A区SD02 東断割土器群より 下層
第45図-18	—	弥生土器	壺	—	—	(8.3)	やや密	浅黄橙色	良好	調整不明		51次・A区SD02 西トレンチ 西壁 付近

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第45図-19	30-2	弥生土器	壺	—	—	7.15	密	外面赤褐色、底面 橙色、内面灰白 色、赤彩	良好	ヘラケズリ		51次・A区SD02 北トレンチ 土器 4
第45図-20	—	弥生土器	甗	(17.6)	—	—	密	にぶい橙 色	良好	内外面ハ ケ	黒斑	51次・A区SD02 西トレンチ 上下 貝層間
第45図-21	31-1左	弥生土器	甗	(19.9)	—	—	密	浅黄橙色	良好	外面ハケ、 内面ヘラ ケズリ	黒斑	51次・A区SD02 東側トレンチ、東 面部分のアゼ上面 (1層上位)
第45図-22	31-1右	弥生土器	甗	(18.0)	—	—	密	橙色	良好	外面板ナ デ、内面 ヘラケズリ	煤附着	51次・A区SD02 西区上層(貝層)
第45図-23	—	弥生土器	台付甗	—	—	8.1	密	にぶい黄 橙色	良好	ナデ		51次・A区SD02 西トレンチ
第45図-24	—	弥生土器	小型台 付甗	—	—	4.2	密	橙色	良好	ヘラナデ		51次SD02 北ト レンチ 下層貝層
第45図-25	31-3	弥生土器	台付甗	—	—	(9.35)	やや密	にぶい黄 橙色	良好	ハケ		51次・A区SD02 中央トレンチ 上 層貝層上 黄白色 土層
第45図-26	31-2	弥生土器	台付甗	—	—	5.65	密	浅黄橙色	良好	板ナデ		51次・A区SD02 西部断割 上層貝 層
第45図-27	31-4	弥生土器	台付甗	—	—	8.3	密	浅黄橙 色、橙色	良好	ハケ		51次・A区SD02 西トレンチ 土器 1
第46図-1	32-1	弥生土器	蓋	—	—	—	密	外面橙 色、内面 灰色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面板ナ デ		51次SD02 北部断 割
第46図-2	32-3	弥生土器	蓋	—	—	—	密	灰白色	良好	外面ナデ、 内面ナデ またはハ ケ	黒斑	51次・A区・SD02 西トレンチ 南側 黒褐色土層
第46図-3	32-2	弥生土器	蓋	—	—	—	密	にぶい橙 色	良好	板ナデ		51次・A区SD02 北トレンチ 貝層
第46図-4	—	弥生土器	高坏	(22.4)	—	—	密	浅黄橙色	良好	調整不明	口縁外面 に波状文	51次・A区SD02 東側トレンチ 東 面部分のアゼ上面 (1層上位)
第46図-5	—	弥生土器	高坏	(22.25)	—	—	密	外面浅黄 橙色	良好	内面にぶ い黄橙色		51次・A区SD02 西トレンチ 上下 貝層間
第46図-6	31-7	弥生土器	ミニチュ ア土器 (高坏)	—	—	—	密	橙色、赤 彩	良好	調整不明	欠山式	51次・A区SD02 西トレンチ 下層 貝層
第46図-7	31-9	弥生土器	有稜高 坏	(24.8)	—	—	密	灰白色	良好	ヘラミガ キ	透かし孔 2段、欠 山式	51次・A区SD02 西トレンチ南側黒 褐色土
第46図-8	31-6	弥生土器	高坏	—	—	—	密	外面橙 色、内面 灰白色	良好	外面ヘラ ミガキ、 内面板ナ デ	黒斑	51次A区・SD02 西トレンチ 土器 7
第46図-9	31-5	弥生土器	高坏	—	—	11.9	密	外面にぶ い黄橙 色、内面 橙色	良好	ヘラミガ キ	欠山式	51次・A区SD02 北トレンチ 貝層
第46図-10	31-8	弥生土器	高坏	—	—	—	密	橙色、浅 黄橙色	良好	ヘラミガ キ	透かし孔、 欠山式	51次・A区SD02 北トレンチ下層貝 層
第46図-11	—	弥生土器	鉢	(19.0)	—	—	密	外面浅黄 橙色、内 面明黄褐 色、一部 赤色	良好	外面ナデ、 ヘラミガ キ、内面 調整不明		51次・A区SD02 西トレンチ 下層 貝層の下
第46図-12	—	弥生土器	鉢	—	8.1	5.35	密	橙色	良好	外面ヘラ ケズリ、 内面板ナ デ	欠山式	51次・A区SD02 西トレンチ 土器 8
第46図-13	32-9	青銅製品	—	直径 1.0	厚さ 0.15~ 0.3	重量 0.55g	—	—	—	—	片面中央 に突起	51次・A区SD02 西トレンチ 下層 (粘土混層)

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第46図-14	32-5	貝製品	貝刃	長7.1 幅8.1	重さ 24.2g	—	—	—	—	内面に剥離による加工痕	ハマグリ	51次・A区SD02 排土中から採集
第46図-15	32-6	石器	磨石	長8.1 短6.9	厚さ 3.8	重さ 356.5g	—	赤褐色、 暗赤灰色	—	—	円礫	51次・A区SD02 西トレンチ下層 粘土混層
第46図-16	33-1	弥生土器	小型壺	(7.0)	9.2	3.0	密	浅黄橙色	良好	口縁部ナデ、外面上半ヘラミガキ、外面下半ナデ	山中式(新)	51次・A区SD08 土器3
第46図-17	33-2	弥生土器	台付甕	—	—	8.6	密	灰白色	良好	ハケ		51次・A区SD08 中央ベルト西脇ト レンチ
第46図-18	33-3	弥生土器	高坏	—	—	(10.9)	密	灰白色	良好	外面ヘラミガキ	櫛描直線文、三方透かし孔	51次・A区SD08 土器2
第46図-19	33-4	弥生土器	高坏	—	—	—	やや粗 白色砂粒多く含む	外面浅黄色、橙、内面にぶい黄橙色	良好	ヘラミガキ	三方透かし孔	51次・A区SD08 東側ベルト
第46図-20	33-5	弥生土器	台付鉢	—	—	5.8	密 砂粒含む	橙色、赤彩	良好	外面ナデ、内面調整不明	黒斑、高蔵式	51次・A区SD08 1層上位 土器1
第46図-21	32-8	石器	磨石	長9.2 短5.1	厚さ 3.5	重さ 253.0g	—	赤灰色	—	—	焼けている	51次・A区SD08 西トレンチ 2層 黒褐色土
第46図-22	—	弥生土器	甕	—	—	—	粗、1~3mm砂粒多く含む	橙色	良好	内外面ハケ	口縁端部、頸部に刺突文(刻目)	51次・B2区 北部 SD01中・下位
第46図-23	33-7 右上	弥生土器	甕	—	—	—	粗	明黄褐色	良好	外面ハケ、内面調整不明		51次・B区SD01
第46図-24	33-7 左上	弥生土器	甕	—	—	—	密	橙色	良好	外面ハケ、内面調整不明	受口状口縁	51次・B区SD01 北半最下位
第46図-25	33-7 下	弥生土器	甕	—	—	—	粗	外面黄橙色、内面浅黄褐色	良好	ヨコナデハケ	受口状口縁	51次・B区SD01 北壁サブトレンチ 最下位
第46図-26	33-6	弥生土器	ミニチュア土器	—	—	(1.5)	密	灰白色	良好	手づくね		51次・B区SD01 暗褐色土
第46図-27	33-8	弥生土器	高坏	—	—	—	やや粗	橙色	良好	外面ヘラミガキ	三方透かし孔	51次・B区SD01 暗褐色土
第46図-28	32-7	石器	磨石	長9.8 短7.3	厚さ 4.1	重さ 511.5g	—	にぶい赤褐色、にぶい橙色	—	—	円礫 石英 焼けている	51次・B区SD01 暗褐色土
第46図-29	32-10	発火具	火打石	長3.4 短1.6	厚さ 1.3	重さ 7.0g	—	—	—	—	養老瀧産チャート	51次・A区南西隅 地表面採集
—	33-9	弥生土器	壺	—	—	—	密 砂粒多く含む	にぶい黄褐色	良好	調整不明	口縁部に棒状浮文	51次・B2区SD01
—	30-4	弥生土器	壺	—	—	—	粗 0.1~0.2cm大砂粒含む	外面橙色、内面浅黄色	良好	内面ヨコハケ	櫛描直線文、列点文、斜格子文	51次・A区SD02 西トレンチ 上層 貝層下 黒褐色土
—	32-4 右上	弥生土器	壺	—	—	—	密	浅黄褐色	良好	ナデ	波状文、櫛描直線文、扇形文	51次・A区SD02 中央南北トレンチ
—	32-4 右下	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面淡黄色、内面灰白色	良好	外面ヘラミガキ	櫛描直線文、扇形文	51次・A区SD02 北トレンチ 貝層
—	32-4 左上	弥生土器	壺	—	—	—	密 0.5cm大砂粒含む	にぶい黄褐色	良好	ナデ	扇形文、櫛描直線文、波状文	51次・A区SD01 東側断割土器集中 部より下層
—	32-4 左下	弥生土器	壺	—	—	—	密	外面浅黄褐色、内面にぶい黄褐色	良好	外面ヘラミガキ	櫛描直線文、扇形文	51次・A区SD02 北トレンチ 貝層
—	33-10	耐火煉瓦	—	長辺— 短辺 10.6	厚さ 5.8	—	粗、砂粒多く含む	灰白色	良好	—	格子文、刻印「N□□」	51次・A区竈付近。

図番号	写真図版番号	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	製作技法	備考	調査年次・出土地点
第47図-1	34-1	土製品	舟形土製品	残存長 5.8cm、 残存高 3.2cm	最大幅 2.7cm	—	密	灰黄色、 赤味は赤 彩か	やや不 良	ナデ		51次・A区SD02中 央茶褐色土層
第47図-2	34-2	土製品	舟形土製品	残存長 4.3cm、 残存高 2.6cm	最大幅 2.9cm	—	密	黄灰白色、 赤味は赤 彩か	良好	ナデ		51次・A区SD02東 側断割土器集中部 より下層
第47図-3	34-3	土製品	舟形土製品	残存 長 9.75 cm、残 存高 2.5cm	最大幅 4.0cm	—	密	赤褐色	不良	ナデ		三王山遺跡 4次・SK12



1 調査前



2 調査風景 SD08



3 調査風景 SD01



4 調査風景



5 調査風景



6 調査風景 SD06



1 遺物出土状況 SD08 (北から)



2 遺構掘削状況 調査区南東部 (北から)



3 遺構掘削状況 調査区南西部 (西から)



4 遺構掘削状況 調査区全景 (南から)



5 遺構掘削状況 調査区南東端 (南から)



1 SD01 (南西から)



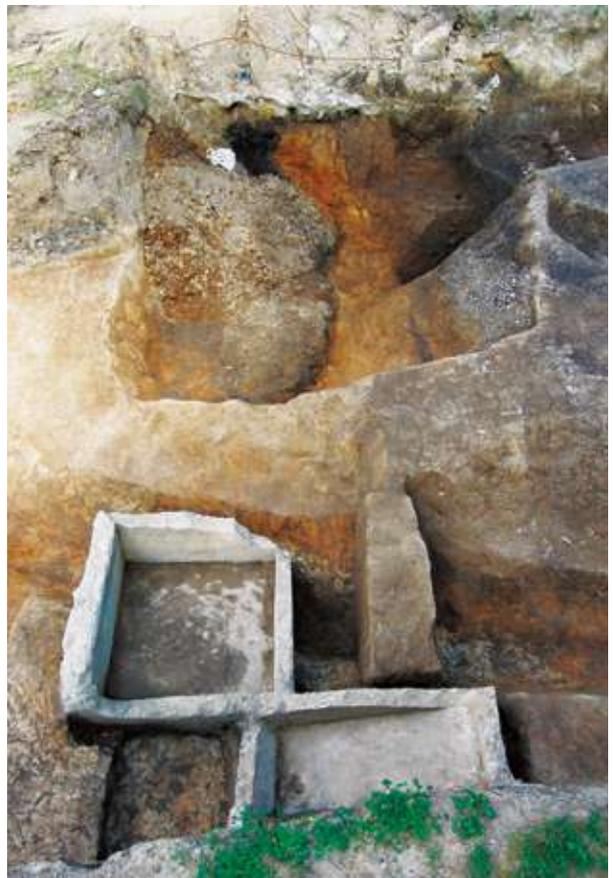
2 SD01 (北から)



3 SD01土層断面



4 SD01・調査区北壁土層 (南から)



5 SD01・攪乱 (西から)



1 SD06 (東から)



2 SD06 (東から)



3 SD06 (西から)



4 工事立会で出土した電纜



1 調査前（北から）



2 調査風景（西南から）



3 遺構検出状況 SD02付近（南東から）



4 調査風景



5 調査風景 SD01（北から）



6 調査終了状況（南西から）



1 石斧出土状況



2 土器出土状況



3 SD01土層断面 アゼ1南面



4 SD01土層断面 アゼ3北面



5 遺構掘削状況 SD01・SK01 (北から)



6 遺構掘削状況 SK01 (北から)



1 調査風景 階段



2 調査風景 階段



3 階段全景 (南から)



4 階段下部



5 調査区全景 (南から)



6 階段全景 (北から)



1 調査風景 竈（南東から）



2 調査風景



3 調査風景（北東から）



4 調査風景（北西から）



5 調査風景



6 ミーティング



7 調査風景



1 掘削終了状況 調査区全景



2 掘削終了状況 SD08



3 掘削終了状況 SD02



1 SD101 (西から)



2 SD101 (北から)



3 SD102 (西から)



4 SD101 (南から)



5 玉石敷き・SD06 (西北から)



6 SD08 中央付近 (東から)



7 SD02 土器出土状況



8 SD02 土器出土状況 (南から)



1 SD08 東半部 (西から)



2 SD08 東半部 (北西から)



3 SD08 中央部 (西から)



4 SD08 全景 (西から)



5 SD08 全景 (東南から)



6 SD02 全景 (東から)



7 SD02 全景 (西から)



8 SD02 全景 (西から)



1 竈検出状況（東から）



2 竈土層断面（西から）



3 竈全景（東から）



4 竈土層断面（西から）



5 SD06（電纜出土状況）（東から）



6 SD06土層断面（西から）



1 玉石敷き (東から)



2 玉石敷き (西から)



3 玉石敷き (西から)



4 甕埋設坑 (北から)



5 甕埋設坑 (南から)



6 玉石敷き (東から)



1 調査風景 (A区)



2 ミーティング (A区)



3 市民見学会 (51B区)



4 調査風景 (A区)



5 調査風景 (A区)



1 SD08・SK102・SK103 (西から)



2 SK102・SK103完掘 (西から)



3 P202検出



4 P201完掘



5 SD02 西トレンチ土層断面 (西から)



1 土器出土状況 (SD02)



2 土器出土状況 (SD02)



3 土器出土状況 (SD02 西壁付近)



4 土器出土状況 (SD02 西トレンチ)



5 土器出土状況 (SD02 北トレンチ)



1 清掃中（北西から）



2 SD08 東トレンチ（南東から）



3 SD08 東トレンチ土層断面（南西から）



4 SD08 中央ベルト西面（南西から）



5 SD02 北トレンチ土層断面（北から）



1 SD02 掘削終了（北西から）



2 SD02 調査区西壁（北東から）



3 SD01 検出状況（51B1区）（南から）



4 ミーティング（51B1区）



1 SD02 (51B2区)



2 SD01 土器出土状況・北壁土層断面(51B2区)



3 土器出土状況 (51B2区)



4 掘削終了状況 (51B2区)



5 SD01 土層断面図(北から)(51B1区)



6 SD01 土層断面図(南から)(51B1区)



1 調査区全景（南から）



2 調査区全景（東から）



1 弥生土器 壺 (SD02)



2 弥生土器 ミニチュア土器 (SD02)



3 弥生土器 壺 (SD02)



4 弥生土器 甕 (SD02)



5 弥生土器 台付甕 (SD02)



6 弥生土器 高坏 (SD02)



7 弥生土器 高坏 (SD02)



8 弥生土器 台付甕 (SD02)



9 弥生土器 高坏 (SD02)



1 弥生土器 壺 (SD02)



2 弥生土器 壺 (SD08)



3 弥生土器 壺 (SD08)



4 弥生土器 台付甕 (SD08)



5 弥生土器
ミニチュア土器 (SD08)



6 弥生土器 蓋 (SD08)



7 弥生土器 ミニチュア土器 (SD01)



8 中世陶器・陶磁器 (SD01)



9 弥生土器 壺 (SD08)



1 陶器 皿 (SX01)



2 弥生土器 甕 (SK08)



3 弥生土器 台付鉢 (SD05)



4 弥生土器 台付甕(包含層)



5 弥生土器
高坏 (検出)



6 弥生土器 高坏 (攪乱)



7 弥生土器 壺・甕(茶褐色土)



8 鉄器 火打金 (SX01)



9 弥生土器 壺・高坏 (表土)



10 石器 火打石 (北端)



11 円盤状土製品(北端)



12 陶磁器 皿・坏・碗(表土・北半検出)



1 弥生土器 壺 (SK01)



2 弥生土器 壺 (SD01)



3 弥生土器 壺 (攪乱)



4 弥生土器 高坏 (SD01)



5 弥生土器
高坏 (SD01)



6 弥生土器 高坏 (SD01)



7 弥生土器 高坏 (SD01)



8 石器 磨石 (SD01)



9 石器 石斧 (SD01)



1 弥生土器 壺 (SK01)



2 弥生土器 甕 (SK01)



3 弥生土器 鉢 (SK01)



4 弥生土器 台付甕 (SK01)



5 弥生土器 高坏 (SK01)



6 弥生土器 高坏 (SK01)



7 弥生土器 高坏 (SK01)



8 玩具 (表土)



9 土製品 貝形 (攪乱)



1 弥生土器 壺 (SD02)



2 弥生土器 壺 (SD02)



6 弥生土器 高坏 (SD02)



3 弥生土器 壺 (SD02)



4 弥生土器 壺 (SD02)



7 弥生土器 高坏 (SD02)



5 弥生土器 壺 (SD02)



10 弥生土器 高坏 (SD02)



8 弥生土器 高坏 (SD02)



9 弥生土器 高坏 (SD02)



11 弥生土器 高坏 (SD02)



1 弥生土器 高坏 (SD02)



2 弥生土器 台付甕 (SD02)



3 弥生土器 壺・甕 (SD02)



4 弥生土器 壺 (SD08)



5 弥生土器 壺 (SD08)



6 弥生土器 高坏・鉢 (SD08)



7 弥生土器 台付甕 (SD08)



8 弥生土器 高坏 (SD08)



9 弥生土器 蓋 (SD08)



10 紡錘車 (SD08)



11 土製品 (SD08)



12 土製品 (SD08)



1 弥生土器 台付甕 (SD08)



2 弥生土器 台付甕 (SD08)



3 弥生土器 甕 (SD06)



4 弥生土器 壺 (北端)



5 中世陶器 甕・山茶碗 (SD01)



6 磁器 蓋 (P110)



7 磁器 碗 (P111)



8 歯ブラシ (P111)



9 電纜 (SD06)



1 弥生土器 壺 (SD02)



2 弥生土器 壺 (SD02)



4 弥生土器 壺 (SD02)



3 弥生土器 壺 (SD02)



5 弥生土器 壺 (SD02)



6 弥生土器 壺 (SD02)



1 弥生土器 壺 (SD02)



2 弥生土器 壺 (SD02)



3 弥生土器 壺 (SD02)



4 弥生土器 壺 (SD02)



5 弥生土器 壺 (SD02)



6 弥生土器 壺 (SD02)



7 弥生土器 壺 (SD02)



8 弥生土器 壺 (SD02)



1 弥生土器 甕 (SD02)



2 弥生土器 台付甕 (SD02)



3 弥生土器 台付甕(SD02) 4 弥生土器 台付甕 (SD02)



6 弥生土器 高坏 (SD02)



5 弥生土器 高坏 (SD02)



9 弥生土器 高坏 (SD02)



7 弥生土器 高坏 (SD02) 8 弥生土器 高坏 (SD02)



1 弥生土器 蓋 (SD02)



2 弥生土器 蓋 (SD02)



3 弥生土器 蓋 (SD02)



4 弥生土器 壺 (SD01・SD02)



5 貝刃 (排土 SD02)



6 石器 磨石 (SD02)



7 石器 磨石 (B区 SD01)



8 石器 磨石 (SD08)



9 青銅製品 (SD02)



10 石器 火打石 (南西隅)



1 弥生土器 壺 (SD08)



2 弥生土器 台付甕 (SD08)



3 弥生土器 高坏 (SD08)



4 弥生土器 高坏 (SD08)



5 弥生土器
台付鉢 (SD08)



6 弥生土器 ミニチュア土器
(B1区 SD01)



7 弥生土器 甕 (B1区 SD01)



8 弥生土器
高坏 (B1区 SD01)



9 弥生土器
壺 (B2区 SD01)



10 耐火煉瓦 (A区 竈付近)



1-1 舟形土製品 (SD02)



1-2 舟形土製品 (SD02)



1-3 舟形土製品 (SD02)



2-1 舟形土製品 (SD02)



2-2 舟形土製品 (SD02)



2-3 舟形土製品 (SD02)



3-1 舟形土製品
(三王山遺跡)



3-2 舟形土製品 (三王山遺跡)



3-3 舟形土製品 (三王山遺跡)

報告書抄録

ふりがな	みはらしだいいせきはつくつちょうさほうこくしよ
書名	見晴台遺跡発掘調査報告書(第49・50・51次)
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	伊藤厚史 三谷智広
編集機関	名古屋市教育委員会 生涯学習部 文化財保護室
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1-1 TEL:052-972-3269 FAX:052-972-4202
発行機関	名古屋市教育委員会 生涯学習部 文化財保護室
所在地	〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1-1 TEL:052-972-3269 FAX:052-972-4202
発行年月日	西暦2021年(令和3年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みはらしだいいせき 見晴台遺跡	あいちけんなごやし 愛知県名古屋市 みぎくみはらしちよう 南区見晴町	23100	15-32	35° 6' 0.39"	136° 56' 22.1"	2009年7月6日～ 9月30日	140m ²	学術調査
						2010年7月5日～ 9月3日	160m ²	
						2011年7月4日～ 9月10日	190.5m ²	
くらだかいづか 桜田貝塚・ かいづかちよういせき 貝塚町遺跡	あいちけんなごやし 愛知県名古屋市 みぎくみやよいちよう 南区弥生町	23100	15-28	35° 6' 2.48"	136° 56' 30.90"	2009年7月6日～ 9月30日	50m ²	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
見晴台遺跡	集落・貝塚	縄文～中世	溝、環濠、 電線埋設溝、竈	弥生土器、須恵器、 中世陶器	環濠2条
桜田貝塚・貝塚町遺跡	貝塚・散布地	弥生～中世	溝、階段	弥生土器	高射砲陣地関連遺構
要約	<p>見晴台遺跡は、弥生時代後期の環濠集落で、集落の北側に位置する濠2条を検出した。濠のうち外濠には、多量の貝殻が集落の外側（北西側）から廃棄されていた。また内濠は、地山の土塊（主として白色シルト）で埋められていた。高射砲陣地関連遺構として、電線埋設溝、炊事場の竈が出土した。</p> <p>桜田貝塚・貝塚町遺跡は、弥生時代の溝1条、土坑1基、住居跡1基を検出した。溝は方形周溝墓の溝と推定される。土坑についても溝状遺構の可能性が高い。高射砲陣地関連遺構として、宮内神社の階段を検出した。</p>				

見晴台遺跡発掘調査報告書
(第 49・50・51 次)

2021 年 3 月 31 日 発行

編集 名古屋市教育委員会文化財保護室
TEL (052) 972-3269

発行 愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1-1
名古屋市教育委員会

印刷 愛知県名古屋市中区新栄二丁目11番6号
共生印刷株式会社